

まえがき

これからご紹介する本【理想世界への誘い】は、一九九五年七月に近代文藝社から出版したのですが、今改めて読んでみてもこの本の中に流れている精神は、少しも輝きを失っておりません。いや失うどころか、一段と輝きを増しているようにさえ思えます。というのも、人類は今、完全に物質文明に埋没し、あるべき心を見失っているからです。

私たちが感じて感じているこの世界は、本当にある世界では無いのです。現象の世界、あるいは幻の世界といわれ、あるように見えるけれど実際には無い世界なのです。その幻の世界に人類は、今必死になってバベルの塔を築いているのです。このような愚行に走るのは、本当の人間を知らないためです。つまり、人間を単なる肉の塊と思い違いし、精神部分を忘れてしまったためです。私がこの本の中で訴えているのは、まさに人類が忘れた精神部分です。社会は歴史の積み重ねによって変化しても、精神は永遠不動のものです。その永遠不動の精神をないがしろにし、今人類は無常の物集めに躍起になっているのです。このまま進めば、間違いなく大きな悲劇を生み出すでしょう。

物質に幸せを求める生き方を、私は全面的に否定するつもりはありませんが、行き過ぎは良くないのです。今人類があらゆる面で行き詰まっているのは、あまりにも物質に偏り過ぎたためです。これを打開するには、物から心への価値観の転換が必要です。いや物から心への価値観の転換は、もはや時代の要請なのです。

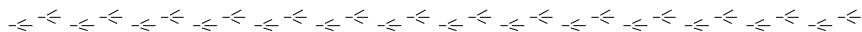
私たちは、科学の進歩が人に幸せをもたらすものと思いい違ひしておりますが、心の伴わない科学は危険こそあれ、決して幸せをもたらすものではないのです。なぜなら、科学は人の心が運用するものだからです。人の心が未熟では、科学は凶器です。だから宇宙は人類に、科学の全容を明かそうとしないのです。人類の心が成熟したら、成熟した分きつと明かしてくれるでしょう。

同様に社会も、人類の心の成長と共に自然と変わるべきもので、一人の権力者によって、或いは一人の思想家によって、強引に変えるべきものではないのです。したがってこれから紹介する社会モデルも、過渡的なもの、或いは暫定的なものと考え、決して囚われないようにして下さい。ただどんな世界になろうと、精神は変わるものではないので、この部分だけは手放さないようにして下さい。

将来理想世界を建設するに当たり、この本が叩き台として少しでも役に立てば、出版した意味も出てくると思います。どうか皆様の記憶の片隅にでも留めておいて下さい。いつか必ず役立つ時がくると思います。

二〇〇九年 九月

かとう はかる

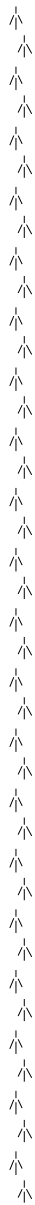
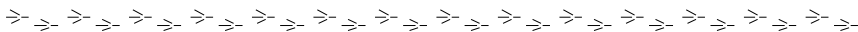


第三章 宇宙と人間

(1)進化論と人間	227
(2)心	233
(3)人間とは何か	237
(4)霊界の存在	241
(5)宇宙を支配する意識	244
(6)人間は神の幫助者	252
(7)磨きあい	255
(8)幸福を求めて	257
(9)宇宙の法則	269

第四章 人類は何処へ行く

(1)必然性の原理	288
(2)奉仕世界は必然性の原理がとる終局の姿である	299
(3)器をつくる	300
(4)日は昇る	303
おわりに	309
まどろみの中で	311



◎目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第一章 資本主義社会からの脱出

(1)不思議な老人との出会い・・・・・・・・10

(2)資本主義経済の矛盾と歪み・・・・・・・・19

(3)資本主義社会崩壊の道程・・・・・・・・34

(4)真の人間像を解明する・・・・・・・・43

(5)人間の使命と目的・・・・・・・・51

(6)人類が目指さなければならない真の文明とは・・55

第二章 理想世界への誘い

(1)奉仕経済・・・・・・・・・・・・・・・・70

(2)奉仕国家・・・・・・・・・・・・・・・・162

(3)人類法の制定・・・・・・・・・・・・184

(4)奉仕世界の教育・・・・・・・・・・・・190

(5)奉仕世界の宗教と科学・・・・・・・・204

(6)平和・・・・・・・・・・・・・・・・213

(7)奉仕世界の社会風景・・・・・・・・217

はじめに

近年よく使われている言葉の一つに、「繁栄」という言葉があります。この言葉の意味を辞典で調べてみると、「栄えること」とあるいは「繁盛すること」と書かれてあります。この言葉は、ひと昔前までは、「商売繁盛」とか「我が家の繁栄」といった狭い意味で使われていましたが、最近では経済発展のシンボル語として、あるいは生活の豊かさを示す言葉として、広く使われるようになりました。

ではこの二文字は、それだけの意味しか持たないのでしょうか？ たしかに、ひと昔前から比べると衣食・住などは格段の差で豊かになりましたし、便利さや快適さも比べようのないくらい良くなりました。これだけみると、素晴らしい世の中になったと喜べるのですが、果たして本当に心の底から喜んでよいのでしょうか？ 私はこの「繁栄」の文字の奥に、言いようのない含蓄を覚えるのです。それは物質的豊かさだけでなく、精神的豊かさを併せ持った調和の取れた姿が、真の繁栄の姿ではないかと思うからです。

今の世の中を見渡してみてください！ 人々は本当に満たされているのでしょうか？ 毎日のように、殺人、強盗、自殺、事故など、痛ましい事件や事故が新聞紙上をにぎわしています。すべてが整い何の不満もなき

そんな人達が、どこか落ち着かず、なぜか安心できないでいる。経済大国といわれる日本にしてこの有様ですから、世界に目をやると「繁栄」という文字がどこに行ってしまったのか戸惑うほどです。

ふり返ってみれば、人類数千年の歴史は、闘争と破壊の繰り返しであったといっても過言ではないでしょう。かわい民衆が一部の権力者によって虐げられ、戦争の犠牲者はいつも底辺であえぐ貧民でした。この間にも偉人賢人と言われる人達が輩出され、哲学の中に究極の生存原理を模索し、思想主義の中に恒久平和を見出そうとしてきました。しかし残念ながら、未だに真の世界平和は実現されておりません。でも、その中にある民主主義熟成の下に資本主義が発達していったのは、一つの希望の光だったかもしれません。

つまり資本主義は、『人類の不幸は物が十分に行き渡らないため起こるのであるから、生産技術と労働意欲の向上を図って物を大量に生産して自由市場に委ねれば、経済は必然的に活性化し貧困は解消されるだろう』との期待を持たせてくれたのです。しかし、どうでしょうか？ 貧困は解消されましたでしょうか？ 人々は本当に豊かになりましたでしょうか？ いいえ反対に、多くの歪みが噴出しているではありませんか。環境汚染・民族紛争・南北対立・経済摩擦・人心の荒廃など様々な歪みが現れているのは、資本主義経済という底なし沼に足を取られているせいなのです。つまり資本主義経済という仕組みは、停滞や後退の許されないブレーキ無しの子車ですから、ただ坂道を転がり落ちるしかないのです。

では人類は、この底なし沼からどうしたら抜け出すことができるのでしょうか？ 私はその解決策を長年考えめぐねてきましたが、ある日、ある人物との不思議な出会いによって一挙に解決の道が開かれたのです。その人物が提唱した世界は、正に理想世界を彷彿とさせるものでした。『理想世界』という言葉は、宗教書などから何度も目にしてきた言葉でしたが、その具体性となると全く明らかにされておらず、ただ、

『理想世界はきつと訪れる』

『必ず仏国土はやってくる』

『まもなく千年王国が築き上げられる』

との繰りごとが述べられているにしか過ぎませんでした。ところがその人物は、政治・経済はもとより教育・科学・文化に至るまで、およそ今日の世界では予想だにしない理想原理を提唱してくれたばかりでなく、そうならざるを得ない必然性までも語ってくれたのです。聞き始めは疑心暗鬼な気分でしたが、話を聞いてゆくうちに、“人類を救えるのはこれしか無い！”という確信に至ったのです。

この本は、皆さんの人生観・人間観・世界観を根本から変えてしまおうでしょう。夢幻の話だと言うかもしれませんが、空想家のたわごとだと言うかもしれないかもしれませんが、誰が何をいおうとこの世界に突入しなければ人類に明るい未来はないのです。みなさんもページを進めるにしたがい、これこそが人類が求めるべき真の世界

だと確信を持つようになるでしょう。私は皆様と共に、『人類の夜明』を一日も早く見たいと切望するものです。

一九九五年七月

かとう はかる

第一章 資本主義社会からの脱出

(1) 不思議な老人との出会い

それは春もたけなわの夕暮れのことだった。私は仕事で会社の車を利用しそのまま帰宅する時には、必ずある川辺りに立ち寄り瞑想することにしてきた。その日も私は、いつものように川辺りの土手に車を停めると、早速その日の反省をかねた瞑想に入った。川の流れが小気味良いリズムで耳に届いてくる以外、全くの静けさが辺りを支配している。今日の私の言動を振り返り、どこか誤りがなかったかチェックし、与えられた課題がどのくらい達成できたかなど振り返ったのち、いつものように今日人類が抱えている難問をどう解決すべきか探っていた。

どの位の時が流れただろうか、私はふと人の気配を感じて目をあけた。辺りはすでに夕闇にそまり、空に

は星が瞬きはじめていた。私は気配の感じた方に視線を移した。そこは私のところより一段高くなっており、石積みの土手が左右に広がっている。その土手の上に一人の老人が腰を下ろし、しきりに私の方を伺っている様子なのだ。

私が軽く会釈すると、老人は待っていましたとばかり土手から飛び下りると、笑顔を見せながらスタスタと近づいてきた。

「瞑想の邪魔をしてしまいましたな、申し分けありませんだ。」

老人は気さくにそういうと頭を下げた。

「いいえ、とんでもありません。」

私は窓を開けると、恐縮しながら応えた。

「ところで、あなたは人類の未来をたいそう憂いている様子でしたが、解決策は見つかりましたかな？」

「えっ!？」

突如心中を見透かされた驚きに、私は一瞬言葉を失っていた。

「どうじやろう、一つ私と人類の未来について語ってみませんか？ 私也大いに興味がありますでな……。」

そんな老人の誘いに、私は不思議と何の抵抗もなく同意していた。二人は一段高い土手に腰を下すと、ポツリポツリと世間話をはじめたのだった。

老人の年はゆうに八十歳を越えているように見受けられたが、顔の艶、眼光、身のこなしなどはまだ五十代の若さがあり、老いてますます意気盛んの感があつた。言葉を交わすうちに私は、人柄のせいかそれとも年齢差のせいか、老人を慕う気持ちが次第に強くなっていくのを感じていた。

「今の世の中をどう思いますかな？」老人は論点に触れた。

「私は常日頃から、資本主義社会が究極の社会システムなのだろうか？ この外に道はないのだろうか？と疑問を持っていましたが、共産主義社会の崩壊を目の当たりに見せられた今、やはりこれしかないのかと落胆的妥協に迫られているところです。」

「落胆的妥協とな？」

「ええそうです。資本主義社会は確かに物質的豊かさをもたらしてくれました。しかし一方、環境破壊や人心の荒廃を生み出しています。私にはどうしても、この矛盾多い社会がそのまま続くと思えないのです。かといって、これに代わる社会システムがあろうとは思えません。」

「たしかに現段階では社会主義社会は敗者で、資本主義社会が勝者のように見えますじやろう。しかし、

本当に資本主義社会は勝者となり得たのじやろうか？ この疑問はあなたばかりでなく、おそらく誰の胸の内にもあると思う。」

「ええ、たしかに。」

「資本主義経済は自由経済です。つまり人間の本能的欲求を出発点とした、いわゆる利益追及経済です。その世界においては、物の生産、流通、配分、消費に至るすべてを個人の自由にまかせ、国家の干渉を許さないのです。まあ、ある程度の法的規制はあるにしてもほとんどは自由です。したがって個人も企業も、どう利益追及するかの一点に絞られることになります。当然競争経済になるところから、企業はいかにコストを下げ、いかに良い品物を市場に提供するかを知恵のしぼりあいとなり、したがって企業努力は昼夜を問わず行われ、商品の高品位化と多様化は進み経済は活性化していきます。これに対して社会主義経済はどうじやろうか？ 欲望を刺激しない、競争がない、自由がない、個人の努力が報われないなどから経済は衰退していきます。社会主義経済の低落は、当然ともいえる結果だったのです。」

すでに話の主導権は老人がにぎっていたが、不思議にその話ぶりには何の厭味も感じられない。

「これによると資本主義経済の勝利は明らかで、事実今日、社会主義経済はその身を市場経済に移しつつあります。さてそれでは、私たちは勝利宣言をしてよいのじやろうか？ そうはいかないのです。なぜなら、

資本主義経済は行く先知らずの、白蟻経済だからです。」

「白蟻経済？」

「そうです。白蟻は土台や柱をトコトン食いあらし、家が倒壊するまで決して進撃を止めようとしません。資本主義経済もこれと似ていて、自然をトコトン食いつくし自らの居所(地球)を破壊するまで終わらないでしょう。また富の均等配分も、これからは期待できない。いや期待できないどころか、その格差は広がる一方です。私たちはこれを、“人間が生きている限りある程度の環境破壊はやむを得ないし、また弱肉強食の世界において能力のないものが貧しいのも当然である”ともっともらしい言いのがれをしてきたが、果たしてそんな屁理屈がいつまでも通用するものじやろうか？

富の分配が適切でなかったにも関わらず、何とかここまでやってこられたのは、地球の大きさに比べ人口が少なかったせいと、他の生き物とそう変わらぬ生産手段(肉体労働・畜力)に頼ってきたからです。しかしその人間が道具や機械を発明し、また強大なエネルギーを獲得するに至って、がぜん自然に与える影響力が大きくなってきました。そして二十世紀後半になって曲線的人口増加をみるに至り、その脅威は放置できないところまでやってきたのです。特に資本主義経済(競合経済)は環境を破壊する最も過激なシステムだけに、地球に与える影響はまことに絶大です。

このようにみてきますと、どんなに物質的豊かさが提供できても、それが制御不能な環境破壊をもたらすようでは、お世辞にも人類にふさわしい経済とはいえないのです。この経済に依存する限り、人類に明るい未来はないでしょう。」

「ではご老人は、資本主義社会も究極の仕組みではないとおっしゃるのですか？」

「そうです、資本主義社会は人類進化がたどる一つの道にしか過ぎない、と私は思っています。つまり人類発展段階説、これが私の信ずる歴史観です。」老人は白いあごひげを自慢げに撫でながらいい切った。

「人類発展段階説？」

「そうです。人類は常に進化の道を歩んでいます。当然万物の霊長といえども、初期の段階では動物的な生き方をまねるでしょう。しかしそれも進化がとる一時の姿であって、やがてもう一段上の生き方を身につけるようになるのです。」

「では今の社会は、ワンステップの一つに過ぎないといわれるのですか？」

「そうです。ワンステップ、ワンステップ、人類は進化の階段を上っていくのです。今日の資本主義社会も、そのワンステップの一つに過ぎないということです。」

「しかし、今の私たちは物質文明に満足しきっています。よほどのことがない限り、この慣れ親しんだ生

活を捨てようとは思わないでしょうか？」

「それが恐ろしいのです。人間というものは不思議なもので、物質的満足感に浸っているときには、何かわずらわしいことが起こっても、一度手にした豊かさを放棄してまで他に道を求めようと思わないのです。したがって正しい道を示す異端児が現れても、ただ疑い深い目で見ただけで一向に耳をかそうとしません。ところが身に危険が迫ってくると、これまでの態度を一変させ、あわてふためきながら助けを求めてくるのですが、その時にはすでに病が進行し手遅れになっているか、回復手術が可能だとしても多くの苦しみを味わうはめになるのです。そうなる前に、どこに病根があるかつきとめ、その根を勇気をもって切り取ることです。」

「今の社会は病んでいる、とご老人はおっしゃるのですか？」

「そうです。先程もいったように、ゴールのないゴールに向かってひた走る経済、それが資本主義経済の姿といつて良いでしょう。自動車の生産量をみても、家電製品の生産量をみても、エネルギーの使用量をみても、まさに曲線的勢いで増えており、その勢いは、とどまるところを知りません。それが全人類の生活安定に寄与するならまだしも、いまだに年に十億人近い極貧者を出し、数億人という失業者の群れをつくり、二千万人以上もの難民を生み出しています。それだけではない、果てしのない民族戦争は多くの同胞人の血

を流しているし、車社会は年間数十万人という痛ましい犠牲者を出している。また、生きる目的を失い自ら命を絶つ豊かな国の人々や、暖衣飽食に酔いしれ文明病で苦しむ先進諸国の人たちも、形こそ違うが同類の犠牲者といえるでしょう。そして最悪なのは、自ら作った環境汚染でジワジワと死の絶壁に追い詰められていることです。これが病いでなくて何でしょう？

まあ、これもすべて資本主義経済が生み出した歪みですが、人類はこの歪みを少しも直そうとしません。いや直そうとはしているのですが、現体制の中で行っているために、張りぼて的な修正にとどまっているのです。ですから、こちらを直せばそちらがおかしくなり、そちらを直せばあちらがおかしくなる、といった歪みが出てくるわけです。何せ私たちは、資本主義社会が究極のシステムだと信じて疑わないわけですから、場当たりのな修正にとどまるのも無理はないわけです。

よろしいですか。『経済はすべてのはじまり』といわれるように、社会構造の柱をなしているのが経済です。木にたとえれば、経済は幹で、政治、教育、文化などはその幹の上で茂る枝葉のようなものです。その幹が病めば、当然枝葉も病むでしょう。」

「たしかに、資本主義経済は万能でないかも知れませんが、しかし、良いところもあるはずですよ。その良いところを別な形に再生できないものでしょうか？」

「それは難しいでしょう。なぜなら、資本主義経済には回避できない根本的欠陥があるからです。

その第一の欠陥は先程もいったように、資源やエネルギーを食いつぶして成長する白蟻経済であるという点です。資本主義経済という生き物は、たえず増殖を続けなければ生きられない体質をもっています。つまり、売って、儲け、資本を蓄積し、また売って、儲け、資本を蓄積する、この繰り返しが必要なのです。しかしどうでしょう。有限な地球上において無限の成長が可能でしょうか？ もしこれを強引に押し進めるとすれば、私たちの子孫に大変な環境蘇生負担を強いことになるでしょう。いや、今すぐ発展途上国の人たちが先進諸国の人たちと同じ生活を望むとすれば、恐らく私たちの生きている時代にそのつけは返ってくるでしょう。『ねずみ講』にも似た不健全な経済、それが資本主義経済の正体なのです。

二つ目は、この仕組みからは決して貧富の差はなくならないという、配分の欠陥です。弱肉強食を唯一の配分原理とするこの経済から、平等な配分など考えられませんからね・・・。

そして三つ目は、モノ豊かな社会で果たして世道はどうなるか？ といった人心の不安です。モノが豊かになればなるほど人心の荒廃が進む現況を考えれば、今後ますます対立や抗争が激化するのではと悲観的にならざるを得ません。

こうしてみますと、資本主義経済下で迎える二十一世紀は、どうも多難な時代になるのは避けられそうも

なさそうです。」

老人はここで口を結ぶと、憂いのこもった目を空に向けた。

「それではここで、資本主義経済の矛盾と歪みを具体的に暴露してみることにしましょう。その矛盾のひどさに、改めて驚かれることでしょう。」

(2) 資本主義経済の矛盾と歪み

《1》資本主義経済は欲を前提にした自由経済であるから、市場機能を完全に働かすためには、できるだけ政府の干渉を許さない必要がある。そこに大企業の横暴が生れる。

- ・弱小企業を合法の下に吸収する。
- ・突然の下請け停止を行う。
- ・元請けの優位を利用し、下請けに低価格を押しつける。
- ・資本力をバックに、弱小企業を市場から排除する。

・市場を独占し価格操作を行う。

など、大企業の横暴ぶりは目を覆うばかりである。弱小企業が生きのびるには、大企業の傘下に入って延命策をこうじるか、反乱を起こすか、涙を飲んで転業するかのいずれかであろうが、いずれにしても生き延びる道はそう多くはない。これは企業間だけの問題ではなく、弱小国と大国においても同様である。すなわち、モノカルチャー政策（利益の得られる産業あるいは作物に特化する政策）をとらなければならなくなったり、借金をして無理に近代化を進めなければならないのも、大国の圧力に屈服したがゆえである。

またお金第一の社会では、何事もお金が優先する。金持ちは社会で優位な地位を獲得し、金のない者は虐げられる。その貧富の差から、人権すら無視されるようになる。こういったお金第一主義が人の心を狂わせ、犯罪の多い社会をつくってしまうのである。

《2》今日の経済の主役は、大資本をバックにした大企業であろう。その企業の使命は、何をしても利益をあげ、資本提供者(株主)に利益の還元をしなくてはならない。したがって、他企業に負けないう売上を増進を図り、少しでも多くの利益をあげること力が注がれる。歪みはそこに生まれる。

・需要満杯の状態から売上を伸ばすには、二、三年置きにモデルチェンジを行い、まだ使える製品を時代

遅れへと誘導しなくてはならない。

・修理するより新品を買った方が安価であるといった、道理に合わない商法を横行させる。

・宣伝は今や企業の必勝戦術であるが、その原価はなぜか消費者負担となって跳ね返ってくる。また過剰な宣伝は消費者の欲をあまり、無用な消費を生み出すことになる。

・コストを下げ生産性を上げるには、ロボットを導入した大量生産方式が有効であるが、それは雇用を減らすことにつながり、多くの失業者を生み出すことになる。

・質素節約がもてはやされてはこの経済はなりたない。また丈夫で長持ちする品物がつくられたのではこの経済は干上がってしまう。このようにどんなに良いことでも、どんなに良いものでも、経済を悪化させるものは敬遠され、どんなに悪いことでも、どんなに悪いものでも、経済を良くするものは喜んで迎えらるのである。

《3》資本主義経済は不況と隣合わせになっているため、常に倒産におびえていなければならない。いったん不況になると、一番に影響を受けるのは零細企業とそこで働く労働者であるが、大企業に比べ救いの手はほとんど無い。経営者の自殺や、仕事を失い路上生活に身を落とす者など、資本主義が生み出す悲劇は絶え

ることがない。

《4》儲けるためには手段を選ばない、これが企業の偽らざる気持ちであろう。これによって、どれほど社会正義が地に落ちたことだろう。

・ 経済が悪化してくると強引な需要作りが必要になってくるが、その代表的なものが戦争であろう。戦争も経済活性には必要な手段であり、それも必要悪として容認されている節がある。世界恐慌の次にくるのは大戦であるといわれるのも、まんざらの外れでないかも知れない。

・ 金の力で他国の自然を食い荒らし、自国の繁栄だけに酔いしれる。これも正当な経済取引であれば許されて当然だという。さらに許しがたいのは、ただ金を動かすだけで巨万の富を得るマネーゲームである。

・ 薬漬けにするのも注射漬けにするのも、退院時期がきているのに理由をつくって退院させないのも、回復の見込みゼロの患者にスバゲティ治療を施すのも、これみな儲けるための需要作りである。

・ 詐欺、売春、賭博、麻薬など、儲けられるものならどんな悪いことでも商売になってしまふのが資本主義社会の懐の深さであろうが、それによって人々はどれほど苦しんでいることだろう。

《5》今日企業の販売活動費(営業経費・広告宣伝費・販売手数料・接待費・販売員の人件費)は膨大なものとなっているが、それらはただ売上を伸ばすための費用であって、生産過程ではなんら貢献していないのである。もし、宣伝も営業活動も必要ないなら、すべての非生産労働者(営業マンや店頭員や宣伝マンなど、全就労人口の約五十%を占めているといわれている)を生産過程につき込むことができるだろう。そうなければ生産性の向上はいうにおよばず、福祉やサービスも行き届くようになり、潤いある社会が作られるはずである。それができないのは、どこよりも誰よりも多く売って儲けなければならない、この経済の仕組みにあるのである。

《6》資本主義経済における生産の適性さは、市場という相互取引の場があってはじめて知ることができる。したがって、その品物が人々の役に立ったかどうかは、市場に出て消費されるまで確認できないのである。本来なら、消費者側の要求が先行し生産側がそれを満たすという形にならないのだが、資本主義経済では生産者側が消費者側をリードする形をとるために、どうしても無駄な生産と消費が生まれてくるのである。時には企業の思惑がはずれ、生産イコール消費とはならず、多くの無駄を生み出すのもこの経済の欠陥である。

《7》農作物の価格の下落は一見喜ばしいように思えるが、現在の資本主義経済下では多くの弊害を招いてしまう。すなわち、耕地に恵まれた大国の意のままに市場が牛耳られるため、農産物の価格が維持できなくなり弱小国の農業はつぶれていく。これが更に地場産業の崩壊、地方の過疎化、自然荒廃など地域社会の崩壊につながっていくのである。また、気象事情からも食糧管理が不安定になり、ますます弱小国の食糧不安は高まるのである。

《8》その大国も、いつも経済効果や利益効率を念頭に経営しなければならぬところから、"早く、大量に"を掛け声に、高エネルギー(化学肥料)の投入や過度な農薬を使用して生産性の向上を図らねばならない。そのために、土壌疲弊や薬害を引き起こすことになる。土壌を守り自然体の作物を収穫するには、有機農業の導入が欠かせないと分かっているが、利益を優先する資本主義農営では、それが無下にも切り捨てられてしまうのである。これでは安全安定は望めないであろう。また豊作貧乏を回避するために、せっかく収穫した農産物を廃棄処分したり、価格維持の必要性から余った食糧を困っている国に無償で回せないなども、資本主義経済の抱える矛盾の一面であろう。(以前アメリカで、価格の安定を図るために二千万頭以上の牛を廃棄処分にしたことがあったが、その時飢えて苦しむ人は世界中に溢れていたのである。企業にとって牛は、

飢えをしのぐために飼育されているのではなく、売るため儲けるために飼育されているのである。何と愚かな経済であろうか。)

《9》現代の資本主義経済は『消費は美德・何よりもお金』の意識を定着させ、人を物欲の虜とした。それは精神的安らぎを奪い、異常なほどの競争人間をつくった。これによって対人関係はすべて損得がらみとなり、信じあえる社会は遠のいた。どんな約束もどんな決まり事も、今や文書にしたため合わなければ安心できなくなったのである。民事裁判(商業裁判)は、今後ますます多くなっていくであろう。

《10》国家挙げての高度経済成長政策は、国内産業を活性化させ労働者の生活を豊かにするという利益をもたらしたが、一方、地方の人口を大都市に集中させ過密都市をつくるという弊害も生み出した。この影響はこれだけに留まらず、地方の若年労働力が奪われたために、国の基盤である農林業を衰退させるという二重の弊害ももたらしたのである。今や農地や山は荒れ放題になっている。

《11》資本主義経済の発展の陰には、いつもインフレと失業がつきまといっている。国民はそれを恐れ、身

を守る為にさまざまな防衛策を考える。金取引や商品取引に引掛かたり、株式投資などで失敗するのもその現れであろう。もしインフレも失業もないなら、危険な投資をする人もいなくなるであろうに・・・。その失業も、資本家から見ればなくてはならない必要悪だという。つまり、労働力が逼迫すれば賃金が上がリ労働者を雇うことが困難になる、そうなる労働者の管理も甘くなり、生産性の向上は望めなくなる。失業の恐れがある労働市場こそ、企業に取って有利なのである。

《12》 国家の財政赤字のつけは、結局国民に降りかかってくる。税金や社会保険料の負担増など、今や慢性的である。これは卵が先か鶏が先かの論法と同じで、貨幣経済が抱える最も初歩的弊害である。また地方自治体の台所も今や火の車のところが多く、そのため社会秩序を守るべき役所自らが公営ギャンブルに手を染めている。これでは世の乱れは押さえられない。

《13》 企業の激しい販売合戦は、消費者に見栄と虚飾を煽り立て、果てしのない濫費浪費の泥沼に引きずり込んだ。これは恐ろしいほどの無駄を生み出し、自然環境を著しく悪化させる要因ともなっている。大都市では廃棄物の処分地がなく頭の痛い対策に追われているが、これも利益優先経済が招いた欠陥である。

《14》資本主義国家における経済施策や新法案制定の陰には、必ず企業と政治家との醜い癒着がある。贈収賄は今や日常茶飯事、『政治献金も誰々を励ます会』と称する集会も企業に借りをつくることであり、そこにもはや公平な政治はありえない。これも、営利を優先する現代資本主義社会の醜い体質であり恥部である。

《15》大企業は国家の擁護の元に急成長を遂げ、我が国は経済大国の名を勝ち得るにいたったが、それは学歴偏重社会を形成することとなり、試験地獄なるおかしな社会悪をつくってしまった。今やその影響は幼い子供にまで及びよっている。将来の夢は何かと子供に聞いたところ、サラリーマンになること」と答えた子供が半数以上いたといわれるから、その夢のなさに今更ながら驚かされる。勉強・勉強・試験・試験と追いかけられる子供達の、何とかわいそうなこと・・・。

《16》どのような有益なものであっても、儲けにならないものは常に切り捨てられるのが、利益第一を目指す資本主義経済の実態であろう。それによる新考案、新開発の阻害は計り知れないものがある。競合経済が社会を発展させたというが、その陰では素晴らしい『可能性』が見捨てられているのである。

《17》今や年中行事になった春闘は、労働者の生活を守るための戦いであるという。だが、いくばくかの賃金引き上げに喜んでいることから、物価は高騰し税金は高くなっていく。賃金引き上げと物価の上昇、これも卵が先か鶏が先かの論法と同じで行きつく先をしらない。

《18》一時、ねずみ講なるものが流行し驚かされたものだが、今日の資本主義経済もそれと似たり寄ったりである。ねずみ講は空売りで物の裏づけはないが、資本主義経済は物の裏づけがあるだけに、自然を破壊し環境を悪化させる。高回転経済、拍車経済、これは暴走する馬車みたいなもので、いつか我々を振り落としてしまうであらう。

《19》事件や事故の原因追及をしていくと、そこに必ず企業の無理な利益追及が浮かび上がってくる。企業はできるだけ多くの利益を得ようとするから、少々危険と分かっている手抜きを黙認する。現場を任されている者も、それが上司の心証をよくし自分の成績につながると思えば、いやであってもやらざるを得ない。

”不正融資、不正商品取引、不正株式投資、不正雇用、不正販売、積載違反、スピード違反、手抜き工事、

違反建築、違反何々”など挙げれば限りがないだろう。

《20》資本主義経済は欲望を根底としているだけに、どうしても人間性を墮落させる。

- ・あなたは本当に良いと思って商品を薦めているのだろうか？
- ・それを薦めることが本当に客の為になっているのだろうか？
- ・こちらに責任があっても賠償問題が絡むので、止むを得ず「これは不可抗力です」と責任逃れをしていないだろうか？
- ・成績欲しさから、同僚をおとしめなかっただろうか？
- ・仕事欲しさにこびへつらい、自己の人間性を傷つけないだろうか？
- ・接待、供応、買収などによって相手を墮落させなかっただろうか？
- ・その駆け引きが、自分の良心を傷つけていないだろうか？
- ・売りたい一心で、過剰な宣伝、ハレンチな宣伝をしていないだろうか？
- ・上司の手前、よい恰好をしなかったであろうか？
- ・手段を選ばず儲けようとする態度が、相手に煩わしい思いをさせたり、迷惑をかけたっていないだろうか？

うか？

・犯罪や事故を激増させているのは、売らなければならない、儲けなければならない資本主義経済の体質が理由である。また、諸々の価値を下落させているのも同様の理由からである。そこに我々は気がついてい
るだろうか？

・週刊誌も、新聞も、小説も、音楽も、映画も、はたまたテレビドラマも、好奇心を誘うもの、あるいは興味本位なもので勝負するようになってしまった。これも儲けるため、視聴率を上げるためであろうが、そのため
にどれほど社会は毒されたことだろうか？

・あなたは本当に人を救おうと、その宗教を勧めているのだろうか？ 宗教を生計の手段にしていないだ
ろうか？

・あなたは純粋に芸や技を披露しているだろうか？ お金のために芸を切り売りしていないだろうか？
このようにして、今日の経済は人から真心を奪ってしまったのである。

《21》今日の社会において、対等な人間関係を維持することが非常に難しくなっている。たとえば上司と部下の関係、営業マンと取引先の担当者との関係、店員と顧客との関係など、ほとんどが何等かの利害関係

を形成し、それが優位に立つ者とそうでない者とに分けている。最近では、友達や肉親の間においてもこのような関係が成り立っているといわれ(夫婦や親子の間でもお金は別)、ますます対等な人間関係が失われつつある。そんな社会で、本当に人間らしい生き方ができるだろうか？

《22》今や企業理念が社会の規範となり、企業の生き方が人の生き方の基準になってしまった。その影響は国の行政や教育にまで及び、もはや国民の生活は企業に握られてしまったといっても言い過ぎではないだろう。その規範を考えると、肌寒さを感じるのは私だけだろうか？

《23》成長なしにやっていけない資本主義経済は、今、環境問題との間で苦慮している。資本主義経済において、経済の停滞や縮小はそのまま生活の破壊につながるからだ。(そう思っているに過ぎないのだが) 経済を發展させ(豊かさを落とさない)環境を悪化させない連立方程式に、今人類は頭を痛めている。

「さて、資本主義経済の矛盾と歪みを追及してきましたが、この経済に依存する限り、私たちは万物の靈長としての誇りを失っていくでしょう。」

私たちは本当に、欲望を根底に置いた経済を望んでいたのでしょうか？ ハンドルのきかない経済を望んでいたのでしょうか？ あなたはどうですか？」

「ええ、若い時には贅沢な生活をしてみたいと思っただけでもありませんが、今は家族の皆がひもじい思いをせず健康で暮らせたならそれで良い、そんな考えに変わってきました。特に今のようによくの物に囲まれ生活していると、何か息苦しささえ覚えます。どうも私たちの望んでいたものと、違う方向に社会が進んでいるように思えてならないのですが？」

「あなたもそう思いますか。そうなのです。誰もこのような社会を望んでいたわけではないのです。それではなぜ、このような世の中になってしまったのでしょうか？ それは、物が豊かになれば貧困も争いも解消されるだろうとの考えが、市場経済を拡大させ、そこに蔓延した唯物主義が人々の欲望に火をつけてしまったからです。」

先程もいったように、資本は減退したり、停滞することが許されません。100であった資本が120に150に200にといったふうに、ドンドンと膨張していかねばやってゆけないのがこの経済の宿命なのです。その宿命の渦中に、人間が、社会が、国が、スッポリと呑みこまれているのです。こうなると、どんなにあがいてもその渦から逃れることはできません。したがって厭でも、よい学校へ、よい会社へ、と凌ぎを削る競争社

会に身を投じなければならなくなるのです。

・成績を上げなくては昇給も昇進もないから、ガムシヤラに働かなくてはならない。それでも結果が出ない場合は、悪いこともやらなくてはならない。

・企業のためにする悪は何のためらいもない。したがって、倫理も道徳もますます地に落ちていく。

・景気が冷え込み企業が儲からないようでは、国家の財政のめども立たなくなる。したがって環境保全の叫び声も、需要喚起と景気対策の前では空念仏となる。

・その国家の台所も今や火の車、その上追い討ちを掛けるように外国からの圧力も強まる。そこに国家間の不和も生まれてくる。

こうして人間がつくった経済に人間が操られ、いつしか抜き差しならぬ状態に陥ってしまったのです。どうでしょう。このような社会がいつまでも続くと思えますか？」

「さあ・・・??」

「私は資本主義社会の崩壊は、すでにはじまっていると見ています。それではどのような過程をへて資本主義社会は崩壊していくのか、ここでその足取りを追ってみることにしましょう。」

この時点で老人と私との関係は、完全に師弟関係になっていたのである。

(3) 資本主義社会崩壊の道程

「いわゆる資本主義社会の崩壊は、発達した資本そのものが極大化することによって身動きが取れなくなり、どうにもその身が支え切れなくなってもたらされるのです。

企業は利益獲得を最大の目標としています。ライバル企業に勝つために秘策をねり、新製品を開発し、あらゆるの宣伝をしては売上増強をもくろみます。そのために企業はできるだけ資本集約をはかろうとするわけですが、その一番の手法が吸収・合併と技術革新でしょう。つまり企業は、資本集約を図ると同時に技術革新によって安価な商品を大量に生産し、その競争力をもって市場の独占を図ろうとするのです。しかしライバル企業も負けじと資本集約と技術革新を推し進めるでしょうから、この戦いはどちらかが討ち死にするまで続けられるでしょう。このように市場経済における企業の立場は、常に消費者とライバル企業を念頭において相対的スタンスをとっていなければならないのです。もし企業努力を怠ったなら、途端にライバル企業の餌食になるか、市場から排除されるかのどちらかの運命をたどらなくてはならなくなるからです。こうして、吸収、合併、拡大再生産が資本の集積をますます促進させることになるわけですが、ここに資本主義経済の大きな落とし穴があるのです。

- ・産業構造の高度化が進んだ先進諸国においては、資本の集積が進めばすすむほど利潤の低下は免れぬこととなり、それがまた資本の集約化を強いるという悪循環を生み出すことになる。企業はこういった理由から弱体化し、僅かな経済変動にも対応しきれない体質に変質していく。
- ・資本集約は雇用の劣化を招き、望みもしない失業という社会不安をつくってしまう。
- ・資本の集約化は一国内に所得格差を生み出すだけでなく、全世界にアンバランスな貧富の差をもたらすことになる。

・国際分業と比較生産優位(各国が生産費の有利な商品に特化した方が、互いの利益になるとする経済政策)は、多くの失業を生み出すばかりでなく、人から文化を、地球から自然を奪ってしまう。

・売らなければならぬ、儲けなければならぬ、この資本主義経済の宿命的体質が多様な社会を生み出し、その多様さがもたらす矛盾が更に社会を硬化化させてしまう。

これまでの資本主義社会においては、不況は一つの流行のようなものでした。すなわち、

『物が売れるー生産が増えるー収入が増えるー物価が上がるー金利が上がるー貯蓄が進むー需要が落ち込むー生産が押さえられるー収入が落ち込むー金利が下がるー物が売れる』といった景気の循環図です。今までこのような不況は、呼び水を与えることによって克服も可能だったわけですが、価値観の変化や欲望の満

腹感によって消費に長期的かげりが出てくると、これまでのような方法では回復が難しくなってくるのです。といって外に方法はないわけですから、これまで以上に人々の欲望をくすぐり消費を促進させなくてはなりません。

しかしその消費が、基本的生活をはるかに越えた単なる人の欲望を満たすだけのものとすれば、企業の社会的責任は間違いないと思われることになるでしょう。（無謀な消費は地球環境を悪化させる）現実に環境からの圧迫を肌で感じるようになると、人々の消費意欲はますます減退し、更に需要は落ち込んでくることになる。それでなくても、腹一杯になった庶民の欲望を開発することは容易ではありません。まして、昔のように本業以外で（金融、土地）利益を得ることなど到底不可能でしょうから、成長を続けなければやっていけない企業にとってこれは死活問題となってくる。

企業が赤字を出し税収が落ち込めば、国家の運営にも支障を来してくるわけですから、政府は景気回復に積極的に乗り出していかなくてはなりません。財政投融资政策はその常套手段ですが、これは地下にお金を埋めて掘り起こすようなもので、なんら社会的利益はありません。それどころか、ますます環境を破壊し資源の枯渇に拍車をかけることになるでしょう。こうして、生き残りをかけた資本は海外へと向かっていくわけですが、この世界市場への進出も結局はライバル同士の醜い戦いとなり、資本の引いた後に残されるもの

は、頽廢した人心と荒地（環境破壊）だけということになるのです。武力戦争は人命を奪い家や都市を破壊しますが、資本戦争はそれ以上に、貧困と飢餓、人心の頽廢、自然の破壊、伝統的生産様式や文化の破壊、といった大きな被害をもたらすのです。

さてこうしたことがきっかけとなり、人々の疑念は社会システムの根幹に触れるところまで拡大するでしょう。社会不安とは裏腹に民主主義はますます熟成するでしょうから、この恨みの声は政治家を震え上がらせることになる。政治家は庶民の一票が恐ろしいのです。したがって所得の再配分は、ますます社会主義的色合いを深めていくでしょう。要するに政治家は、社会主義的手法を駆使することによって庶民をなだめようとするのです。これは成熟した民主主義社会において、経済弱者が圧倒的に多い数の論理（多数決選挙）からすれば、当然予測のつくところですよ。」

「しかし最近規制を緩和させ、市場経済を活性化させようという動きが活発になっておりますが、これは一時的流れなのでしょうが？」

「多少の揺れもどしはあるかも知れませんが、人類主義あるいは社会全体主義は今後世界の潮流となっていくでしょう。事実、民主主義が発達し国連の力が強まっている今日、発展途上国に対する経済的援助措置が富の再配分の役割を演じているし、地球環境を保全するグローバルな対応も、世界を人類主義へと向かわ

せているといえるからです。日本においても、国民年金保険・社会保険・国民健康保険・失業保険・労災保険・生活保護制度など、数々の社会制度は今や当たり前になっています。どんなに自由放任を叫んでも、人類主義が世界の趨向となれば、その流れに乗っていかなくては収まらなくなってくるのです。ですからアメリカのように自由を強く訴える国も、また自由貿易を唱える国々にしても、いつか資本主義の矛盾にぶちあたり、社会主義的政策を採用しなければ収まらない時がやってくるのです。この意識が拡大していけば、人々は『何でこんな回りくどいことをするのだろうか?』と疑問をもつようになるでしょう。

つまり、偏った富を税金で吸い上げ弱者に回すくらいなら、資本を公的なものとし、そこで生み出された富を平等に分配したら良いではないか。そうすれば税金も社会保険も健康保険も徴収する必要はないし、所得の再配分に頭を痛めることもないのにと・・・これは次のような疑問と重なり一層表面化するでしょう。

- ・物価が上れば賃金も上り、賃金が上がればまた物価も上がる。こんなイタチごっこをなぜするのだろうか? といった疑問。(デフレは経済を崩壊させるので、後に大きなインフレを生む)

- ・社会を豊かにする労働力は幾らでも必要なのに、なぜ失業者を出すような経済にしがみついているなければならないのだろうか? といった疑問。

- ・技術革新によっていくらかでも物がつくられるようになったのに、資本主義の経済ルールに従わなくてはなら

ないというだけで、なぜ餓死者を出さなければならぬのだろうか？ といった疑問。

・優勝劣敗（優秀な者が勝ち劣る者は負ける）に身を任せる市場原理は、配分の混乱をもたらしているだけではないだろうか？ といった疑問。

・神経を擦り減らし一生アリのように働かなくてはならない、こんな生き方が人間の本当の生き方なのだろうか？ といった人生に対する疑問。

こういった疑問は、貧困・飢餓・失業などの経済不安、戦争・抗争・殺人・強盗・麻薬などの社会不安、さらに、ガン・エイズ・奇病・環境汚染といった文明病理が進行するにつれますます募り、その憤りが資本主義社会を放棄させることになるのです。その資本主義社会に幕を引かせる直接の原因は金融です。つまり資本主義経済の妖怪といわれる貨幣制度、すなわち金融制度の崩壊が発端となって、資本主義社会の終焉は始まるのです。しかし、資本主義を断罪するのは人間だけではありません。大量生産・大量消費の社会構造に、自然は厳しい反省を迫ってくるのです。つまり人類は、自然界から目から火花が出るほど頭を叩かれることになるのです。」

「でも、資本主義社会以外にどのような社会システムがあるのでしょうか？ それが見つからないからこそ、人類は今日まで苦しんできたのではないのでしょうか？」

「いいえ、理想とする社会システムはいつの世にもありません。ただ、人類がそれに気づかなかっただけです。」

「気づかなかっただけ？ どんな理想社会があるのでしょうか？」

「これまで人類史上において、永続性のある社会づくりがなされたことがあったでしょうか？ 権勢の宿命といえばそれまでですが、これまで築かれた社会はいずれも砂上の楼閣のごとく短命で終わりました。これは、基礎そのものに欠陥があったからに外ならないのです。つまり、誤った人間観や世界観の上に社会づくりがなされていたからです。釈迦は『実在は心の中にある』といいます。この世の現象は『心の反映である』ともいいます。その真意は『物質の世界は幻のごとし、心の世界こそ真実なり』ということでしょう。しかし人類は、これまで一度たりとも世界づくりに唯心論を採用したことがありませんでした。人の五感(感覚)にかからないものを世作りの中心に据えるのが不安だったからでしょうが、その唯心論を無視した世作りの結果が今日の混乱なのです。もうそろそろ人類は、何が本物で何が偽物か気づくべきではないでしょうか？」

「ではご老人は、唯心論を社会システムの中心に据えろとおっしゃるのですか？」

「そうです。ですから先程私は、理想とする社会システムはいつの世にもあったという言い方をしたので

す。その気になって手を伸ばせば、理想社会はすぐにも掴めるのです。

よろしいですか。世作りをするには、まず人間を知らなければなりません。人間を知らなくて、どうして良い世作りができればよいか？ これまでの政治家には、この点が忘れられていたのです。もし『人間は何者で、何のために生まれてきたのか？ また何を目指して生きなければならないのか？』といった人生の目的に目を向けるようになれば、それでは人はどのように生き、どのような文明を求めるべきか、またそこにどんな社会システム(経済)が必要か、といったことがはっきりと見えてくるはずなのです。これをベースに社会を組立てれば、どんな揺れが来たってビクともしないでしょう。

それでは整理してみましょう。

一、正しい人間像を知ること。

この誤った見方が、これまで人類を悲しみと苦しみに誘ってきたのです。真の人間像を知れば、人の迷いは吹き飛んでしまおうでしょう。

二、人類(個人)の目的と使命を知ること。

目的地の見えない旅は、実に味気のないものです。はっきりとした目的地が見えればこそ、人は希望をも

って前進することができます。

三、人類が目指さなければならぬ真の文明を知ること。

これを知ることによって、具体的な生き方も見えてくることでしょう。

揺るぎない社会を築くには、この三つの解明は欠かせません。これを放っておいて世作りなどできるものではないのです。私が後に提唱する理想世界は、まさにこの理解のなされた世界です。ですからあなたも、まずこの理解から入ってもらいたい。そしてその理解がいくらかでも進んだ後に、私の提唱する理想世界の門をくぐってもらいたいと思います。」

すから、時間も当然永遠に続くでしょう。ならば、無限時間×10兆年分の1≡無限回数となり、存在する回数は無限数となるでしょう。勿論、存在しているのは今の肉体のあなたではないが、あなたというあなたではある。

さて唯物論者は、肉体が自我意識を作っていると信じていますから、肉体の死は無意識の始まりとなり、死に至った人はその瞬間から無意識に陥り、次生まで10兆年かかろうとも、無意識においては一瞬と感ずるでしょう。そうなると死と生はつながり、本人からすれば一瞬たりとも休みなき生の旅路が続くことになる。もし唯心論者(第三章宇宙と人間を参照)のいうように、死は肉体だけの現象で意識は永遠に存続するとの観点に立てば、死と生の区分けができ、肉体から離脱した人は一時の安らぎが与えられるでしょう。

さて、この確率論で結論づけられるのは、あなたは再び生まれてくるという事実であり、その回数は無限数であるという事実です。よって唯物論者の生死観は、生の連続となって休みなき肉体の旅が続くことになる。それではA・B・C・Dのあなたは、まったく関連性のないあなただろうか？ すなわち、今私とと思っている私と、未来で私と思っている私との関連性はどうかということですが。これは実に興味深い問題です。

[A]という名のあなたの誕生 [A]という名のあなたの死
[B]という名のあなたの誕生 [B]という名のあなたの死
[C]という名のあなたの誕生 [C]という名のあなたの死
[D]という名のあなたの誕生 [D]という名のあなたの死

私がここで言いたいのは、唯物論や唯心論に関わりなく、あなたは再び生まれてくるという事実であり、それはあなたという意識の再生であるという事実です。ただ唯心論においては、次のような生命の循環が人間を高貴な存在に押し上げているといえるでしょう。すなわち、

『人間は肉と心をもった二重生命体であり、時がくれば肉体は死んで大地や大気に還元されてしまいが、心つまり意識は永遠に生き続け、再び別な肉体に宿り人生体験を積んでいくものである。つまり人間は、輪廻転生（人は生き死にを繰り返している）を繰り返して進化する永遠の生命体である』という人間観です。これを理解するのは、容易なことではありません。しかし、この理解なしにこれ以上話を進めることができませんので、私の話を聞いている間だけで結構ですから、『人間は輪廻転生を繰り返す生命体である』と聞いていただきたい。いや、何もむり強いしていいものではありません。私の話を聞いている間だけ信じていただ

ければ結構なのです。後に詳しくこのことに触れ、理解してもらおうよう努力はするつもりですが・・・。

マルクスが唱えた史的唯物論は、たしかに物質社会を前提に考えれば説得力のある理論でしょう。すなわち、すべての社会形態は物質経済の上部構造をなし、人の考えも文化も教育もすべて物質経済に規定されてしまうという論理は、特に今日の物質偏重社会においては万人を納得させる説得力があります。しかし、人間が肉体で無く、命であるとすれば、この史的唯物論も色あせてしまうのではないのでしょうか？」

「しかし観念的には理解できても、現実にごとまで信じられるでしょうか？ やはり私たちは、目に見え、肌で感じる、肉体しか信じられないのです。」

「ついこの間まで、電波はおろか空気の存在すら認められていませんでした。勿論、地球が動いているなどは狂人のたわごとでした。ですからガリレオは宗教裁判にかけられ、持説を強引に曲げられてしまったのです。その当時の人たちは、卓越したガリレオの考えが理解できなかつたのです。しかし理解できなくても、現実に宇宙の動きが人びとの生活に影響を与えていたではありませんか。同様に、“それは観念論だ！”と云ったところで、その観念の影響を今私たちはもろに受けているのです。事実私たちの周りには、いろいろな苦しみや悲しみがあるではありませんか？ これは、人の心が作った結果ではありませんか。すなわち、観念が現実の世界に影を落としている証なのです。これは現代人が電波の存在を信じているように、地球が

動いていることを肌で感じているように、百年後には常識化される事実なのです。いや百年といわず、数十年もすれば科学的に実証される事実なのです。そうならば、もう観念と現実は一切り放せなくなるでしょう。意識とは実に不思議なものです。すべての存在は、人の意識があればこそ認められるものだからです。その意味では、死も、生も、私たちの意識の中に存在しているといえるでしょう。同様に、人の欲望もこの意識を離れては存在しないのです。」

二、欲望について

「それでは人の欲望を、少々視点をずらして考えてみることにしましょう。『人の欲望には限界が無い!』ということについて異論を挟む人はいないでしょう。しかし、基本的な生存にかかわる欲望だけに限定すれば、そうはいえなくなるのです。つまり、衣・食・住の基本的欲望が満たされると、そこで一段落がつくということです。動物などはそこが終着点でしょうが、そこで終わらないのが万物の霊長である人間です。欲心をつのらせ、更なる欲望の旅を開始します。この欲心があるから人間は向上してゆくのでしょうか、それだけに危険も伴うわけです。」

それでは、基本的生存にかかわる欲望が満たされた次にもよおす欲望とは、どのような欲望でしょうか？

それは次の三つの欲望です。

一つは肉体を喜ばしたいという欲望

二つは優越を誇示したいという欲望

三つはモノそのものに対する欲望です。

この三つの欲望が複雑にからみあい欲心の拡大が進むわけですが、企業はこの微妙な心理を逆手にとって利益につなげているわけです。

一つ目の肉体を喜ばしたい欲望は、五感を刺激することによって得られるため、外界のあらゆる刺激が欲望の対象になります。たとえば、舌が喜ぶもの、肌心地よいもの、芳しい香りのもの、目に美しいもの、また耳ざわりのよい音曲などがそうですね。これらの欲望は、基本的欲望が満たされた後に生まれてくる、いわゆる賛沢欲といわれるものですが、一旦手に入ると急激に色あせるため常に補給が必要になります。それ、より刺激的でより新鮮なものが効果的ですから、ますますエスカレートしていくことになります。

二つ目の優越を誇示したい欲望は少々違います。これは相手が必要になります。しかも持続性の長い欲望ですから、これにとりつかれると始末に終えません。

・あなたより私の方が美人である

・私の方が家柄がよい

・私の方が頭がよい

・私の方が金持ちである

・私の方が足が早い、力が強い

・私の方が良い物をより多く持っているなど・・・

とりわけ、“私の方が良い物をより多く持っている”という物に対する優越感は、お金さえあれば誰でもひたれるものですから、人は競って金儲けに走るようになるわけです。

最後に、モノそのものに対する欲望について考えてみましょう。モノそのものに対する欲望とは、こういうことです。普通私たちが物を欲するのは、生理的欲求を満たすためか、肉体を喜ばすためか、あるいは優越を誇示するためです。しかし、骨董品・古美術品・絵画・宝石などにとりつかれるのは、単に人にみせびらかし優越感に浸りたいだけでは説明のつかないところがあるのです。（焼き物や宝石を手にし、一人ニヤニヤしているなどはその好例です）。

実は私たちが物にとりつかれるのは、物の奥に隠されている神秘的なもの、掴めえないもの、未知なるものを、求める心の働きであり、更にその心理状態を深く追求してゆくと、『喜び・感動・安らぎ・幸せ』求

める心にゆき着くのです。物はそれを具象化させる代替え品になっているのです。実はこの心の動きは“肉体を喜ばしたい！”“優越感に浸りたい！”という欲望にも通じているのですが、通常それは快楽や快哉の高ぶりの中に隠されてしまい、自分が何を求めているのか、分からなくなっているのです。

このように、私たちの欲望は『喜び・感動・安らぎ・幸せ』を求める心の現れであり、それはもう物の世界の話などではなくなるのです。覚者が物に執着しないのは、その喜びに直接触れる技術を身につけているからです。もし多くの人間が、この技術を身につけることができたら、もう物を奪い合う愚かな戦いなどしなくなるでしょう。私が精神論を強く訴えてきた理由は、そこにあつたのです。だから生活水準があるところに達すれば、人の欲望を物から心にそらす努力が必要になってくるのです。

さて、人間の本性が命であることを見破りました。更に、欲望は幸せを求める心の現れであることを発見しました。ではその人間には、一体どのような使命が与えられているのか？次に明らかにすることにしましょう。」

(5) 人間の使命と目的

「人類の歴史を振り返ってみると、どの時代も闘争と破壊、貧困と飢餓の繰り返しでした。なぜ、このような悲劇がいつまでも繰り返されるのでしょうか？ それは、人類の目標が不明だったからではないでしょうか？ すなわち、一体人類は何のために存在しているのか？ 一体人類は何を目指して生きなければならぬのか？ など人類が進むべき道が不明だったため、ただ物質的豊かを追い求める経済や、領土拡張などに明け暮れてきたのではないのでしょうか？ 個人にしてもそうです。人生の目的が不明だから、ただ肉体を守る行為や生本能を満たす行為などに明け暮れてきたのではないのでしょうか？ しかしこれでは、万物の霊長としてはあまりにもお粗末です。人間は動物とは違うのですから、そんな生き方をして良いはずはないのです。人間には、やらねばならない目的と使命がちゃんとあるのです。

では、どのような目的と使命が与えられているのか？ 宗教じみた話は後に譲るとして、ここでは万物の霊長としてやらねばならない目的と使命を示しましょう。

目的とは、『人格を極めること』です。

つまり、

- ・慈愛の精神を養うこと
- ・不動の心を築くこと
- ・不屈の精神力を養うこと
- ・やさしさやおもいやりなど、他人をいたわる心を育むこと
- ・広く大きな心を育てること
- ・正義と秩序を守る心を育てること

このように心を豊かにすることが、私たちがこの世に生まれてきた目的なのです。

この目的が達成できれば、必然的に人類の使命も達成されるのです。人類の使命とは、この地球上に理想世界を建設することです。世界は一人ひとりの集まりです。その一人ひとりの人間が愛深く、どんな苦難にも負けない不屈の精神を築き、不平不満をいわず、人にやさしく、かつ人を思いやる心を培ったなら、世界は必然的に平和にならざるを得ないでしょう。すなわち理想世界が造られるというわけです。

考えてみて下さい。人間社会の争いは、すべて欲得がらみで起きているのですよ。それは、人の心が豊かになれば回避できるのです。家庭の不和も、小さな戦争も、大きな戦争も、みな心の未熟さが生み出しているのです。多くの予算を使って道路を整備しても、交通事故がなくなることはないのです。莫大な予算を費

やして武装しても、戦争がなくなることはないのです。事故をなくしたいなら、戦争をなくしたいなら、人の心を豊かにすることです。人の心が豊かになれば、黙っていても人類の使命は達成されるのです。政治や経済や科学は、この使命を達成する手段にすぎないのです。ならば、使い切れないほどお金や物を集める必要もないし、資源やエネルギーを奪い合うようなことも不要でしょう。また物質科学一点張りの文明も、この目的の前では何の意味もなくなる。ましてや、自然を犠牲にして経済拡張をはかるなどは、愚ともいえる所業でしょう。こうしてみますと、お金や物に幸せを求めるライフスタイルからの脱却が、価値観を越えて求められてくるのです。」

「しかし私たちは、そんな目に見えない目的のために生きられるでしょうか？ 私たちの生き甲斐は、やはりおいしいものを食べ、楽しいことに熱中する、そんなところにあるのではないのでしょうか？」

「しかしその食べたり楽しんだりする満足も、ほんの一時のものなのです。そんなつかの間の喜びのために人は奪いあい、殺しあい、悲しみと苦しみを作っているのです。一時の満足を得んがために永遠の心に傷をつけてしまう、そんな愚かなことをして良いでしょうか？ 後で触れますが、真の幸せは物や快樂の中にはないのですよ。幸せは唯一、心の中にあるのです。」

もう一度いいいます。私たちがこの世に生まれてきた目的は、人格を磨くためです。宗教的にいえば、魂を

磨くためです。これ一点に尽きるのです。」

「では、経済的豊かさは必要ないとおっしゃるのですか？」

「必要ないとはいっておりません。ただ今日のように経済行為だけが、人生の目的であるかのように見えるのは間違いだということです。一生、お金、お金、お金、利益、利益、利益、と経済に振り回され、果たして私たちは死ぬ間際に悔いを残さないでしょうか？ 人生はそんなものではないでしょう・・・？」

「それでは、人生を楽しむことは悪なのですか？」

「いいえ、大いに人生を楽しんでください。しかし、節度だけは守ってほしいのです。なぜなら、人類は万物の霊長として地球環境を守る大きな責任を持っているからです。ですから人生を楽しむにしても、そこに節度が必要になってくるのです。」

(6) 人類が目指さなければならぬ真の文明とは

「文明とは『文教が進んで人知の明らかになること』といわれていますが、今日のように自然の犠牲の上に成り立っている文明を、どうして人知の明らかになったものとして歓迎できるでしょうか？ 真の文明とは、人間と自然とが相和する中に生まれる、安らかさ、美しさ、知恵の輝きを指しているのです。

ところが人類は、早さ、利便さ、快適さ、合理性が文明の証であると思ひ違いし、なりふりかまわずこの目標に力を注いできました。しかしどうでしょう？ ほとんどこの目標が達成できた今日、一人人間はどんな感動を味わい、どんな安らぎを体験し、どんな満足を得たのでしょうか？ 何も得ていないのです。かえって、心の不安は広がっているといえるでしょう。だからまた人は際限のない欲望にのめり込んでいくのでしようが、果たしてそのようなことがいつまでも許されるのでしょうか？ もし許されるとすれば、それこそ人類総白痴化、地球は褐色の星と化してしまうでしょう。

文明には、安らかさと、安定さと、美しさがなくてはなりません。そして何よりも感動をもたらすものでなくてはなりません。

つまり、

早さに対して・・・安らかさ

便利さに対して・・・安定さ

快適さに対して・・・美しさ

合理性に対して・・・感動性

この牽制が必要なのです。いつてみれば文明とは、芸術作品のようなものと思つたら良いでしょう。ついでこの間まで人類は、自ら筆をとり絵を描いておりました。しかし機械科学が発達した今日、人類はずばらにも機械に筆をもたせて絵を描かせているのです。たしかにみた目は写実的で美しいかもしれませんが、でもどんなに美しくみえても、機械の描いた絵には温かみを感じられません。訴えるものが感じられません。まるで感動がわかないのです。当然です。心をもたない機械が、心をもった人間を魅了することなどできないからです。

昔を懐かしむのは私の感傷かもしれませんが、一昔前までは一つひとつの品物に人間的温もりが感じられました。たとえば、畳、手織物、木工品、履物、その頃の文明品であつたラジオや自転車にしても、小売店のおやじさんが一つひとつ手で組み立てていたものですから、そこかしこに人の匂いが感じられました。また家庭内においても、手作り品は実生活の中に多く生かされており、それが情を通わす原点ともなつていま

した。たとえば古い布を再利用したおしめや、雑巾や、毛糸を巻き直しての手袋や靴下など、母親の夜なべ仕事から生まれた手作り品は、子供心に無上の幸福感を与えてくれたものです。また食べ物にしても、その家独特の「おふくろの味」というものがあって、その味の中に母心がたたみ込まれていました。

子供の遊びにしても手作りが主流でした。何せ物が無い時代ですから、自分たちで遊びを考案するしかなかったのです。あやとり、おはじき、竹とり、おてだま、竹馬、輪転がしなど、不用品を利用した遊びは、そんな物不足から生まれたものでした。物が無いからこそ大切に使うし、大切に使うからまたその物も生きてくるわけですが、これを昨今の『作られた・与えられた』遊びとくらべてみて下さい。どちらに拍手を送りたくなるでしょう。

このようにみてきますと、今日の文明はどうも人類が求める真の文明とは似ても似つかぬように思えてなりません。そこで私は、次のような文明転換を提起したいと思います。すなわち、

- ・ 人情溢れる人間臭い文明を目指す
- ・ 実生活に密着した質実文明を目指す
- ・ 自然と共生しうる均整のとれた文明を目指す
- ・ 地域色豊かな土臭い文明を目指す

などです。

今日の機械文明は速さと便利と快適さはもたらしてくれましたが、それが人と人との絆を強めてくれたでしょうか？

・隣人の死に何ヶ月も気づかない

・近所の人たちとの挨拶もそこそこ

・他人の不幸は人ごと

・夫婦や親子の情も浮薄に

機械文明はこのように、人と人とのつながりを薄情なものに変えてしまったのです。ある中年の独身男性がこんな愚痴をこぼしておりました。

『一日の仕事を終え家路についたとき、なぜか無性にわびしくなるのです。家に帰って迎えてくれるのは、暗くて冷たい部屋だけ。電気をつけ湯を沸かし、一人寂しくコーヒーをすするとき、そのわびしさは頂点に達します。そこでついつい酒を飲みに出ていくのですが、いき着く先は人ごみの多い盛り場なのです。やはり人恋しいのでしょうかね』と・・・。

この人のいっていることは、偽りのない実感でしょう。誰もが温かみのある人と人との触れ合いを求めて

いるのです。どんなに強がりをもって、しよせん人間は一人では生きられないのです。ですから物はひとまず横において、人と人との触れ合いを大切にしたい人間臭い文化を求めます。その人間臭い文化は、決して機械がつくるものではありません。人間の心がつくるのです。その意味では、文明は文化を裏支えすることだけに徹し、決して表舞台に飛びだしてはならないでしょう。もし飛びだして一人歩きするとすれば、その文明は滅亡を意味するでしょう。

さて、今日私たちは多くの知識を身につけておりますが、その知識は特化された知識とか、単に学校に入るための知識とか、知識のための知識とか、あまり実生活に結びつかない知識が多いように思うのです。ですからその道から外れてしまうと、赤子同然の無能者に早変わりしてしまうのです。おばあさんやおじいさんが生きた知恵をもっているといわれるのは、知識を頭で終わるのではなく、実生活で試し、生きた知恵に変えてきたからです。

たとえば、私の小さな頃は鉛筆をナイフで削っていました。たまには失敗し指を切ることもありましたが、その体験というものは痛さを補って余りあるものでした。ところが、今の子供たちは自動鉛筆削り機の中に鉛筆をおし込むだけです。鉛筆を上手に削るにはどのように鉛筆をもち、どのようにナイフを使わなくてはならないか、またどのように削ったら怪我せず削れるかなど、さまざまな工夫が必要になり、そこから知恵

も授かります。

火を扱うにしてもそうです。一昔前までは、石炭に火をつけるのに大変苦労したものです。ときにはやけどをしたり煙でむせることもありましたが、その苦い体験の中から火を自分のものにするのができたのです。

旅行にしても、昔はテクテクと歩いて行きましたから、いく先々でその土地独特の生活の薫りと人情の機微に触れることができました。少し文明の匂いをつけたSL旅行にしても、停まった先々でその土地独特のお国言葉とか風土の匂いを嗅ぐことができ、少なからず地方人の心に接することができました。ところが今はどうでしょう。火をつけるのに何の苦労もいりません。ただボタンを押すだけです。また新幹線や飛行機旅行で、一体どんな体験価値が得られるのでしょうか？

このように、機械文明は私たちの生活を無味乾燥なものに変えてしまったのです。これでは、豊かな人生体験を身につけるなど望むべくもないでしょう。厚みのある人生を望むなら、生活に密着した人間臭い文明の中に身を浸すことです。そのためには、昔のような文化を取りもどすことです。

昔は地方ちほうで独特の文化がありました。言葉一つにしてもお国言葉というものがあって、その訛りを聞くだけでその地方の人たちの人柄とか気質といったものを偲ぶことができました。また、お祭り・田植え

歌・子守歌・民謡・民芸・陶芸・織物などからも、独特の郷土色を感じとることができました。このようにみると、豊かな文化は人がつくるもので、決して機械がつくるものでないことが分かるでしょう。」

「それではご老人は、科学をすべて否定なさるのですか？」

「いいえ、これまで得た基礎科学や基礎技術は、人類の貴重な財産として子々孫々に伝えていかねばならないでしょう。なぜなら、その科学や技術が来たるべき時代に人類の使命を全うさせることになるからです。ただし今日の科学は、人の心を豊かにすることには殆ど役に立っておらず、それが文明と文化の融合を妨げているのです。ですから科学を生活の中に生かすにしても、その選り分けが必要になってくるのです。つまり、

- ・少し暑い・・・すぐクーラーを
- ・その市場に買い物に・・・マイカーで
- ・通勤も・・・マイカーで
- ・子供に着せるもの・・・出来合いのものを
- ・味噌汁は・・・お湯を注いでつくる
- ・遊びは・・・テレビゲームで

また何かというとすぐに海を埋める、山を削る、ダムをつくる、自然の気持ちもおかまいなしに力でねじ伏せる。薬を使い、遺伝子をいじくり回し、大量のエネルギーを投下しては自然のリズムを変える。このよ
うな科学の利用は止めてもらいたいということです。できるなら、ハードな科学からソフトな科学にシフト
ダウンしてほしいと思います。つまり、

- ・単なる便利なものから意味のある便利なものへ
- ・何もかも速いものから適当な速さへ
- ・単なる快適なものから意味のある快適へ
- ・量から質へ
- ・頑健なものからしなりのあるものへ
- ・ギラギラキラキラしたものから落ち着いたものへ
- ・集中から分散へ
- ・高いものから低いものへ
- ・化学製品(金属、プラスチック)から木や石へ
- ・高回転から低回転へ

要するに、おだやか、ゆっくり、安定、といった自然のリズムとマッチした文明を目指すことです。そうすることによって人類は、自然と仲良かったもとを分かちあうことができ、永続的な繁栄もまた約束されるはずなのです。」

「しかし、それでは何のための科学か、誰のための科学か分からないではありませんか？」

「たしかに大自然は、万物の霊長である人間に法(科学)の使用を認めています。いや、法は人間に使われることを待っている、といった方がいいかもしれません。とはいっても、無闇やたらに正体を見せるわけではないのです。人間の成長に相応するように、一枚一枚そのペールを脱いでいくのです。これは、子供に危険なおもちゃを与えてはならないという神の配慮でしょう。科学(法)が偉大であるだけに、少しでもその利用法を間違えればとんでもない結果を招きかねないからです。(原子爆弾などは典型的例である)ですから科学の利用は大いに結構だけれども、くれぐれもまじめな目的に、しかもその扱いには細心の注意をはらって、といった節度が必要になってくるのです。間違っても、法をもてあそぶようなことをしてはなりません。」

「化学製品から木や石へという意味は、金属やプラスチックを捨て、木や石へくら替えしなさいという意味でしょうか？」

「今日化学製品は、身近な日用品から技術の粋をあつめた航空機に至るまであらゆるところに使われてい

ますが、そのせいで地球環境はすっかり汚れてしまいました。私は、こんな節操のない使用は止めてもらいたいと思っています。たとえばどうしても使わなければならない場合でも、基幹部分のみにとどめて、大量消費の流れに乗せないようにする、また使用する場所も公開場や公共施設だけに限定し、私的な生活の場まで持ち込まないようにする、といった配慮がほしいのです。できるなら木の良いところを見直し、日常使うものは木に置き換えてもらいたい、そして使えるものは使いきり、消費回転をできるだけ遅らせてもらいたい。木はそれができるのです。ガラガラ・キラキラしたものから落ち着いたものへというのも、同じような意味です。ガラスやプラスチックは汚れやすいし壊れやすい、ですからどうしても消費回転が早くなります。その点木々(木や竹や草のような再生可能なもの)は汚れも目立たないし案外長もちします。そして、何よりもどっしりと落ち着いた風格をみせます。その良いところを生かしてもらいたいのです。当然、石の利用も考えて欲しいものです。」

「石の利用?」

「そうです。金属やプラスチックだけが文明の証ではないのです。石や木であろうと、周りのものと調和するかぎりそれは立派な文明なのです。先程もいったように、文明は芸術作品です。したがって自然と調和しない文明は、真の芸術作品とはいえないでしょう。」

「では、文明と文化は油と水のように、永久に混ざらないといわれるのですか？」

「新しい文明が文化の中に溶け込むには、やはり時が必要でしょう。つまり、人間によく噛み砕かれ、違和なく消化された時はじめて新たな文化につけ加えられるのです。噛んでも噛んでも噛みきれないものは、人の文化になじまないのでしょうか、その時はキツパリと見切りをつけるべきでしょう。」

「集中から分散へ、とはどのようなことでしょうか？」

「今日の文明は、全世界を一樣のものに変えつつあります。個性を奪いつついているのです。勿論、そのすべてが悪いといっているわけではありませんが、段々と持ち味がなくなりつまらなくなっているということですね。要するに文明の力によって縦の力が強くなり、横の力である人間模様、つまり文化の薫りが弱まっています。ですから私は、世界を一樣に染める文明色はできるだけ排除し、個性豊かな地方文化を重視すべきと思っています。そのためには、今の地方自治を中央政府の優先機関といった従属関係から、地方政府すなわち準独立国家的色彩をつよめた地方国家という本来の姿にもどすべきでしょう。人間一人ひとりに個性があるように、地方国家もまた個性の濃い輝きを放つべきだと思っております。」

経済面においては、工業の特化や農業の特化を止め、できるだけその土地で使うものはその土地でつくるようにすべきでしょう。また暮らしの面においても、故事伝来の特色ある生活様式を尊重し、特質ある土俗文

化を継承すべきでしょう。庶民の生活様式は終局的には土着の風が似合うのであり、そこから生まれる人情や気質が文化に彩をそえていくと思うからです。民謡も、数え歌も、地遊びも、その中からきつと息を吹き返すでしょう。また特産品の持ち味も大いに生かされるでしょう。」

「最近、大企業のブランド食品がもてはやされていますが、これは喜ぶべきことなのでしょうか？」

「味覚の画一化を、どうして喜べましょうか？ 私たちの舌にもやはり文化があるのです。一人ひとりに、地方ちほうに、国々に、それぞれに似合った舌の個性というものがあるのです。その個性を無視する味覚の画一化を、どうして歓迎できましょうか。味覚の国際化は、一見文明進歩の証のように見えますがとんでもない、文化の消沈・文明の墮落です。機械による大量生産方式は、たしかに儲けるためには欠かせない手段かもしれませんが、先程もいったように機械には顔がありません、情がありません、暖かさがありません。ですからどんなに美しく装っても、どこか無表情で、どこか冷たく、まるで感動が沸かないのです、しかし手作り品は違います。顔があり、情があり、美しさがあり、感動があります。そして、どこかホツとする安堵感があります。ですから私は、地縁技術や手作り製法は地方の顔としてできるだけ残して欲しいと思うのです。今日、農業も工業と同じように特化が進んでおりますが、私はこれを大変憂えるできごとと受け止めております。食べ物は自然が母体です。水、土、太陽、どれを取ってもあの豊穡は約束されないのです。」

たしかに儲けるためには、季節を問わない水栽培やビニールハウス栽培は必要かもしれないませんが、(資本主義社会だからなりたっている手法である)その中身はまるで水と油のかたまりでしかないのです。まるで栄養価が低いのです。ごさかしい手法で豊穣を手にしようとしても、そうはいかないということです。ですから私は、食べ物だけは全面的に自然の力に委ねるべきだと思っています。特に主食である穀物類については、その土地に根差したものはどんな事情があろうとも守っていくべきだと思います。また地元の人、率先してそれを愛好すべきだと思います。世界中の人が何もパンを食べる必要はないし、米を食べる必要もないのです。その地域人の体質や気候風土に合った主食というものがそれぞれあるわけですから、それを大切に保護し子々孫々に伝えていくことが自然に対する礼儀であるし、また恩義だと思っております。何度もうのように、ローカル色があるから文化と呼べるのです。ポーダレス化する文化など何の魅力もありません。その土地へいかねば味わえない独特の文化、それこそが真骨頂の文化なのです。

特に自然との共生を考えると、自然破壊の下に繁栄する文明は、利己的刹那的でそこに何の価値を見いだすこともできません。速く、便利で、快適で、という人間のエゴは、安らぎや、美意識や、感動に通じるものではないからです。その意味で人類は、便利さや快適さに酔いしれるのではなく、感動と精神的安らぎを大切にしたい、心豊かな文明作りを目指すべきでしょう。もし、これまで人類が蓄積してきた科学を人のエゴの

ために使うのではなく、人類の進化と目的を押し上げるために使うなら、安らぎと美意識と感動に通じるものとなり、均整のとれた自律ある繁栄が約束されるでしょう。それを思うと、『科学は諸刃の剣である』という諺が、単なることわざとは思えなくなってくるのです。

以上、かいつまんで申し上げましたが、要するに、美と、感動と、安らぎが幸せにいたる道であることを信じ、それに沿った文明を求めていくことです。私がなぜこうまで今日の文明を否定するかといえば、余りにも人生の目的から掛け離れてしまっているからです。人生の目的に合致しない文明は罪悪です。その罪悪なる文明に、今人類は酔っているのです。よろしいですか？ 人格を（魂を）磨くのに、文明（便利・快適・速さなど）はなんら関係無いのですよ！

一言つけ加えておきますが、キンピカ・キラキラ高層ビルが立ち並び、その間を高速道路が縫うように走るといった文明は今日限りです。未来社会は文字どおり、地に足のついた落ち着いた文明が幅を利かせていくことでしょう。

前述したように、人類の使命と目的は次の二つでした。

◎人は永遠に生き通す生命体であるがゆえに、人格を極めなくてはならない。すなわち、魂を磨くことが目的である。

◎この地球に理想世界を築くことが使命である。

したがって文明も社会システムも、この目的を成し遂げ得るものでなくてはならない、という結論に到達したはずです。

それではこの結論をひっさげて、これより私の提唱する理想世界の門をくぐってもらうことにしましょう。」

第二章 理想世界への誘い

(1) 奉仕経済

「私がこれから紹介する世界を、『奉仕世界・奉仕社会』と呼ばせてもらおうことにします。奉仕という言葉を使うのは、この社会を動かしているのは、唯一奉仕労働力だからです。奉仕労働という言葉からも推測されるように、この社会の特徴は、万事が万事人の善意によって切り盛りされている点です。そこで私は、この社会の経済を奉仕経済と呼ぶことにしました。

この奉仕経済は、次の二つの原理が柱となっております。

一、奉仕献身の原理

二、価値の平等原理(すべての価値を否定する。裏返せば、すべての価値を同等に見る)

ではなぜ、このような原理が採用されたのでしょうか？

人類の使命は、この地球に理想の世を建設することでした。そのためには、まず人の心を豊かにしなくてはなりません。つまり、魂を磨く必要があるのです。その目的を遂行するためには、すべての人に平等な生活環境が保障(生活保障)されなくてはなりません。この二つの原理は、それを苦もなく可能にしたのです。それでは、一つずつ見ていきましょう。」

① 社会を支える奉仕労働力

「経済の源をたどっていくと、まず自然の恵みである資源や土地を第一番目に取り上げなくてはなりません。次に、それを製品化する労働力が必要です。また、その労働力を有効に生かす生産技術も忘れてはなりません。この生産技術は絶対欠かせない経済分野で、近代産業革命はこの機械技術の発達が押し進められました。私たちが余暇に親しめるのも、労働時間を短縮させた高度な工業技術のおかげです。しかしその生産技術を確保するには、現在の経済下では資本は絶対欠かせない要素でしょう。ここに資本家が登場してくることになります。そして最後に分配や流通にかかわる商行為者、つまり商人が顔を出すことになります。この五つの要素が支えあって、現在の経済はなりたっているはずですが、でも一の資源や土地の要素は、明らかに

自然界からの贈り物です。そうすると、あとの二から五までの要素はすべて人間側にあることになります。とくに四の資本家は、人間がつくりあげた社会権力ですから、排除しようとおもえばいくらでも排除できます。となると残りの三つは、すべて私たちの労働力ということになります。以上の理由から、『労働力こそが経済を支える大黒柱である』と断言できるのです。その意味では、労働力の乏しい国はどんなに資源が豊かでも大国になれないし、怠け者は貧乏から抜け出せないのです。

さて経済を支えている大黒柱は、『労働力』であるという理由を示しました。ではもし、この労働力をただで手に入れることができれば、すべての物やサービスもただにできるのではないのでしょうか？ 経済学はいつています。『労働力という商品の価値は、労働力の再生産に必要な生活財を生み出す価値に等しいと：：つまり、労働力という価値が生活財の価値を決定し、また生活財の価値が労働力の価値を決定し返す』のだと：：。もしそうなら、タダで労働力が手に入ったら、すべての生活材やサービスもタダにできるのではないのでしょうか？

「でも、どのようにしてタダの労働力を獲得するのですか？」タダ働きする人などいるだろうか!?

「まあ、私の話を聞いてください！

これまで人類が行ってきた労働力の獲得方法は、次のようなものでした。

① 権力や武力によって強引に獲得した・・・奴隷制度・封建制度・社会(共産)主義制度

② 資本(お金)によって買収した・・・資本主義制度

今日のように民主主義の行き届いた社会で①はナンセンスですから、どうしても②の方法に頼らざるを得ません。すなわち、資本家は労働者から労働力を買うことで、労働者は資本家に労働力を売ることで得てきたわけです。さてそれでは、労働力を得る方法は①②以外ないのでしょうか？

あります。それは労働奉仕という方法です。といっても、これは人の善意を当てにするものですから、全面的に頼るわけにはいきません。でも世の中にはまれではありますが、奉仕心が旺盛な人もおります。もしまれな人をまれでなくしたら、この方法は使えるのではないのでしょうか？ そのためには、『奉仕は自らを助ける』という納得できる科学的論拠を示す必要があるでしょう。それを示しましょう。

今日物価が上がるのは、太陽が東から昇るくらい当然と思われるようになりました。でも、物価はなぜ上がるのでしょうか？ 先程、『労働力の価値は、労働力の再生産に必要な生活材を生み出す価値に等しい』という経済法則を紹介しましたが、もしそれが確かなら、物価も上げない代わりに、賃金も上げないという経済操作も可能ではないのでしょうか？ 勿論この前提には、『単純生産に徹し、人々の生活水準は凍結したまま』という条件はつくでしょうか？・・・もし物欲に飽きがきて、人口増加も横這いになる時代がくれば、

この話はまんざら夢物語でなくなるでしょう。」

「・・・？」

「まだ納得がいかないようです。それでは、この話をもう一歩前進させてみることにしましょう。」

これまで私たちは、賃金上がることを当然と思い、下げられることには大きな抵抗感をもっていました。でも発想を変え、思いきり賃金を下げてみることにしましょう。

100であった労働力の価値(賃金)を、50に、30に・・・このように下げられたなら、物の値段も100から50に、30に、下げられるのではないのでしょうか。物価が下がればまた賃金も下がる。今の逆循環がはじまるわけですね。もし、この労働力の価値をゼロまで持って行ったら、どうなるのでしょうか？ 労働力の価値がゼロという意味は、無報酬で働くということです。」

「タダ働きをするという意味ですか？」

「先程の経済法則によれば、労働力がタダになれば生活材もタダになるのではありませんか？ 生活材がタダになるなら、タダ働きにはならないでしょう。」

「・・・？」

「この科学的論拠を示すことによって、奉仕社会ではみなが納得して労働奉仕してくれるようになるので

す。ただし、善意が土台(動機)となっていないくは長続きしないでしょうから、善意を保つ意識改革は必要でしょう。意識改革とは、唯物思想から唯心思想への改革です。もしこの改革に成功したら、人類は奉仕労働力という無限の価値を秘めた社会的財産を手にすることができましょう。」

「しかし、私的な奉仕労働力をどのようにして社会的財産にするのでしょうか？」

「たしかに、人の心は損得に揺れやすく楽な方へ傾きやすい弱さをもっていますから、奉仕労働力を私物化させない配慮は必要でしょう。」

「私物化させないとは、自分の労働力を自分のものにしてはならないという意味ですか？」

「そうです。自分好みに使われては、社会の福利に反した使われ方をされてしまうからです。何よりも不合理的です。」

「しかし、自分の労働力を自由にできないなんて、まるで奴隷と同じではないでしょうか？」

「自由にできないとはいっておりません。職業選択の自由はどんな世界でも保証されるべきですし、労働する、しないの意志も尊重されるべきです。ただ、自分好みに使われては、せつかくの奉仕労働力が無駄になってしまふといっているのです。大自然をごらん下さい。細菌も虫も動植物も、自ら生きるために働いているように見えて、実際は生態系を安定させる犠牲的働きになっているではありませんか。人間も自らの労働

働力を社会的財産として提供すれば、犠牲的働きとして社会に貢献できるのです。更に奉仕労働力の良い所は、労働の連鎖性を完成させることです。」

「労働の連鎖性を完成させるとは、どういうことでしょうか？」

「タダで提供した個々人の奉仕労働力は、物となりサービスとなって社会を渡り歩き、最終的に奉仕労働者のところに帰ってくるでしょう。つまり農業に従事する奉仕労働者は、米や麦や野菜などを作って社会に貢献します。それを食べて英気を養った他の労働者は、別な働きをして社会に貢献します。物を作らない学校の先生も、その生活材によって生計をたて、生徒を教育して形こそ違いますが社会に貢献します。教育をうけた生徒も、いずれ奉仕労働者として社会に貢献するでしょう。このように、連鎖とした労働力のつながりを、労働の連鎖性と呼んでいるのです。ところが今日の社会においては、この連鎖性が貨幣によって分断されているために、社会における労働者の立場も、労働成果も、労働者同士のつながりも、人の目に見えづらくなるようになっていくのです。もしこれが貨幣でなく生活材によるならば、社会における労働者の立場も、労働成果も、労働者同士のつながりも、人の目にはつきり見えてくるはずなのです。

では、ここまでの考えを整理してみましよう。

一、経済を支えている大黒柱は労働力である。

二、その労働力を奉仕労働力という形で社会に組み込むことができれば、その社会は無限の価値を秘めた財産を手に入れたことになる。

三、更に労働者同士のつながりが、はっきりとした形で見えるようになる。

社会で一番大切なものは労働力であり、その労働力は奉仕労働力という形でいくらかでも確保することができ、さらに労働者同士のつながりが身近に感じられるようになる、ということが理解できたと思います。」

「そうなると、生み出された物の配分が問題になってきそうですね？」

「物の配分が問題になる？」

「どのような世界でも、能力や労働量や職種によって配分量は違ってくるでしょうから、配分問題は当然注目的になるでしょう。」

「奉仕労働力を使えば、いくらでも物は生産できるのですよ。そのいくらでも生産できる物を、どうして労働価値に応じて分けねばならないのでしょうか？ あなたは、空気を労働価値に応じて分けよとおっしゃるのですか？ よろしいですか。人類の争いの種は何だったのでしょうか？ それは、配分争いから起きたわけではありませんかな？ そしてそれは、価値の拘りから生まれたものではありませんかな？」

「しかし！」

「まあまあ、私の話を聞いて下さい。」

②すべての価値を否定する

「私たちは何かというと、すぐに価値を持ち出しては問題にします。

・あなたの職業より私の職業の方が価値が高いから、私の方が余計に報酬がもらえて当然である。

・私の方が労働時間が長いから、それ相応の報酬がもらえて当然である。

・あなたより私の方が能力が優れているから、あなたより多く報酬がもらえて当然である。

・こちらの物の方が価値が高いから、それに見合った利益を得るのは当然である。

このように私たちは、価値を秤にかけ価値の重さを貨幣などで表そうとする悪い癖をもっているのです。この価値を問題にしないで、

・物やサービスや労働力が商品となる

・量や時間が商品となる

・価値を測る道具、つまり貨幣などが必要になる

そうなる、

- ・ 欲得者が貨幣に群がるようになる
 - ・ 貧富の差がつくられる
 - ・ 階級社会が生まれる
 - ・ 弱肉強食まがいの闘争社会が展開されるようになる
- さらに、

- ・ 価値が人品評価の道具とされる
- ・ 偽善の道具に利用される
- ・ 視線社会がつくられる

このように価値を問題にしますと、二重三重の社会悪が生まれてくるのです。いわゆる闘争心と競争心を煽り、争い多い社会にしているのはこの価値なのです。「諸悪は価値が生み出す！」ここに着目した奉仕社会では、価値をこの社会から一掃しようと考えたわけです。では、どうすれば価値をなくすることができるのでしょうか。それには価値はなぜ、どうして、どこから、生まれてくるか突き止めねばなりません。

いうまでもなく、価値は希少性が生みだしております。アメリカ大陸が発見された当時、土地はタダ同然でした。これは土地が沢山あったからです。空気がタダなものも無限に存在するからです。もし労働力も無限

に存在するなら、労働力はタダになるはずです。労働力がタダになれば、この社会に価値は存在しなくなるでしょう。労働力が有限だから、この社会に価値が生まれるのです。

奉仕労働力がすべてのものを無価値にするということは、裏返せばすべてのものに無限の価値を与えることになるのです。なぜなら、無価値なるがゆえに私達は自由に使えるからです。(空気が無価値なるがゆえに、私達は自由に使える)そう考えると、価値を無くした社会がいかに優れた社会か分かります。これは奉仕労働力が、そのような優れた社会を作ります。今日の社会が有償社会なのは、労働力が私物化され私的に使われているからです。つまり、労働力が有償化され売買されているからです。」

「職業の価値・労働の価値」

「すべての価値は労働力が生み出し、その労働力が奉仕労働力ならすべての価値は消滅してしまうという考えは、たしかに納得できません。しかし、物そのもの、人そのものの価値を否定するとなると、これは別問題だと思えます。なぜなら、それを否定することは、物そのもの、人そのものを否定してしまうことになるからです。たとえば帽子一個とスーツ一着とは、明らかに価値は違います。もしそれを同等に見よというなら、スーツそのものを否定してしまうことになるでしょう。職業の価値にしてもそうです。医者と綿菓子

職人の価値差は、歴然としています。それを同等に見よというなら、医者そのものを否定してしまうことになり、それこそ公平と平等を無視した社会になるのではないのでしょうか？」

「本当に、帽子一個とスーツ一着に価値差があるのじやろうか？ 医者と綿菓子職人の価値は違うのじやろうか？」

「えっ!？」

「価値を生み出しているのは労働力であり、その労働力が奉仕労働力なら価値は無限に生み出されてくる。その奉仕労働力に、優劣（差別）があるのでしょうか？ 優劣がないなら、優劣のない奉仕労働力から生まれた物やサービスに、どうして価値差がつくのでしょうか？」

「しかし、その物がもつ使用価値や有用価値がなくなったわけではないはずですよ。その物がもつ価値自体は、どんな労働力から生まれたものであっても存在しているはずだからです。それともご老人は、その価値まで否定してしまおうといわれるのですか？」

「たしかに、使用価値や有用価値は失われていないでしょう。しかし、その使用価値や有用価値は絶対的な価値なのでしょうか？」

「えっ！ どういう意味でしょうか？」

「その価値は不変的価値じゃろうか?とっているのです。

たとえば、病人から見れば医者には価値が高いと思うかも知れないが、健康な子供たちから見れば綿菓子職人の方が価値が高いと思うじゃろう。また、芸能界やプロスポーツ界は今は花形産業としてもはやされているが、一旦戦争になり国が乱れたらこれらの職業は社会の隅に追いやられ、国を防衛する自衛隊が一躍クローズアップされてくることになるじゃろう。気候不順で食糧不足ともなれば、今度は農業に従事している人たちが最も価値ある存在となるじゃろう。トイレの配管が詰まり汚水が溢れたとき、駆けつけてくれた職人さんが神様のように見えた、そんな経験はありませんかな?

このように職業の価値というものは、時により、場所により、世相により、状況により、相手により、クルクル変わる相対的なもので、決して絶対的なものではないのです。また、こういう価値評価もあります。

自動車は何千種もの部品で作られています、見た目は派手なボディや動力源であるエンジンは、とりわけ部品の中でも主役の座を占めていますといえるでしょう。しかしどんなにエンジンが大切でも、ネジ一本無くても車は動かないのですよ。ならばどうして、エンジンを作っている会社が主役で、ネジを作っている会社が脇役だといえるでしょうか? また次のような三すくみからも、職業の価値は平等化されるはずですよ。電力会社は石油会社から石油を買って電気をつくりますが、その石油会社は原油精製機を機械メーカーか

ら買わねばなりません。その機械メーカーは電力会社から電氣を買わなくては機械を作ることができません。現代の産業はこのように、動力、機械、原料、部品、消耗材などの生産材が、様々な産業間を渡り歩き相互に依存しあう構造をなしているのです。すなわち、すべての企業は三すくみの関係にあり、相互依存を通じてお互いに価値を作り合っているのです。なのに、一方の会社だけを価値が高いと見るのは、軽率だといわねばならないのです。つまり相互に依存しあっている社会では、価値を比較し序列をつけるのはタブーなのです。いや、できないのです。となると、私たちはこれまで職業に優劣をつけ、賃金に格差をつけ、金持ちと貧乏人を作ってきたことが、いかに誤りだったかが分かるでしょう。

今の社会では、有用性の高い職種の労働者を優遇する傾向がありますが、その有用性はあくまでも相対的なもので、決して絶対視すべきものではないはずですが、重視すべき点は、仕事に対する『姿勢』が『熱意』がどれほど真剣か、『努力』と『工夫』がどれほど傾けられているか、ではないでしょうか。」

「ご老人のおっしゃることはよく分かります。でも世の中には、責任の重い職業とそうでない職業とがあると思うのです。ですから、それ相応の待遇があつて良いと思うのですが？」

「どうして待遇差が必要なのですかな？」

「ではご老人は、責任ある仕事をしている人も、責任のない仕事をしている人も、みな同等にみよとおつ

しやるのですか？」

「奉仕社会の良いところは、貴重な職業であろうとなかろうと、また学歴の差、熟練の差、男女の別、年の差があろうとなかろうと、生活格差がつかないところです。どんな労働者も同じ人間です。奉仕者としても同格です。もともと職場の規律や統制を維持するために、上司や部下といった職階が生まれるのは当然じゃろうが、それによって暮らしの差が生まれてはならないのです。」

「でも医者になった者は、それだけ苦勞をしてきたのです。それを認めてやらなくては、可愛そうではないでしょうか？」

「人に認めてもらいたくて努力するのですかな？ 何か形あるものが欲しくて頑張るのですかな？」

「ええ、人に認められたいから、人よりよい生活がしたいから、一生懸命努力するし、頑張りもするのです。人間の本性は善である！」とご老人は思っておられるようですが、怠けて人より良い生活がしたい！と思うのが人間の本性だと思います。」

「性悪説を信ずる限り、人の世に理想社会は訪れないでしょう。よろしいですか。昔の職人は、技術を教えてもらうために幼い頃より丁稚奉公にいったのですぞ！ ここでは食べさせてもらうだけで、殆ど報酬らしきものは貰っていない。当然です。技術を教えてもらうのに報酬を戴くなど恐れ多いからです。私たち

はこの地上界で自然の恵をただで頂いて、今人生という勉強をさせてもらっているのです。仕事は修道のひとつであり、人格を育てる貴重な体験のひとつです。なのに報酬が欲しいなどといっているのは、罰が当たるというものじゃ。『人格の向上』これ以上の報酬がどこにありますか？ 私たちは魂を磨くために生まれてきたのであって、良い生活をしたために生まれてきたのではないのですよ。そこを勘違いしてはこまります。」

「能力の価値」

「職業に差別感を抱いてはいけない、ということは分かりました。でも人の能力を認めてやらなくては、奮起が期待できないのではないのでしょうか？ 人は何か形で認めてもらってこそ、一層奮起するものです。」

「それは職場の地位が上がることで、認めてやれるのではないじゃろうか。それだけではご不満ですか？」

「でも実のない肩書だけ与えられ、責任だけを押しつけられて皆が納得するでしょうか？」

「しかし、貨幣も財産もない奉仕社会で、どんな形で認めてやれというのじゃろうか？ もし何等かの報酬を与えるとしたら、再び狂った競争社会へと発展するじゃろう。なぜそこまで能力を認めてもらいたいの

か？ 私には解らない。能力というものが何か分かれれば、そんなものに拘ることもなくなるじゃろうに……。
能力とはこういうことなのです。よろしいですか！

世の中には同じ仕事をして、百こなす人がおるかと思えば、十すらやり遂げられない人もおる。何事もテキパキと処理する者がおるかと思えば、ヘマばかりしている者もおる。しかし本当に一生懸命やっているのだったら、それをとやかくいってはなりません。もつとも、努力によってある程度の能力差は埋められようから、努力と挑戦心は忘れてはならないが、歴然とした能力差を責めては可愛想というものです。

また能力の優劣は相対的判断によるもので、決して絶対的なものではないはず。たとえそこで有能者呼ばわりされている人も、他の場所に行ったら無能者呼ばわりされなくても限らないのです。この宇宙は広いのです。その広い宇宙の中で能力の自慢をし合っている、それこそ“井の中の蛙大海を知らず”と笑われてしまうじゃろう。能力のない者が、少しでも能力を向上させようと努力するところに価値があるのです。その意味では、有能者といえども努力と挑戦心を忘れては、大切なものを失ってしまうじゃろう。

また有能者の責務は、無能者の鏡ともならなくてはならないのですから、有能者であればあるほど自分を律し技量を磨いておかなくてはならないでしょう。これは横綱は横綱らしい実力を備え、幕下の手本とならなければならないのと同じで、天の配剤の意味もそこにあるのですから、それを忘れて増長慢になっては下

位の者にも負けかねないじやろう。無能者も、そこに有能者がいるからそれを目標に励めるのですから、引け目を感じたり劣等感を抱くのではなく、目指す大樹として敬うくらいの心の大きさが欲しいものです。

あなたは形で認めてやることは大切だというが、私たちは口にこそ出さないが優秀な人を見ると、心の中で拍手を送っているものです。つまり認めているのです。これは何にも代えがたい誉れではありませんか？」

「たとえお金で認めてやれなくても、賞状とか記念品とか、何か別な形で認めてやることはできると思います。そうすれば益々やる気を起こし、より大きな成果が期待できるはずです。」

「それこそおかしな考えです。形で評価しきれない成果を、物や賞状などで認めてやるとしたら、その評価は形(物や賞状)の中に封じ込められてしまい、かえって価値を下落させてしまうでしょう。またその評価をランクで表すとすれば、評価された人たちの中から必ず不満が起き、せっかくの喜びも後味の悪いものとなってしまふでしょう。もしそれが物や形でなく、よくやったね!」素晴らしい!」あなたは私たちの誇りだ!」と心で讃えてやったなら、それは限りない評価を与えたことになり、その満足感はどこまでも膨らんでいくでしょう。

この地上界には、形で讃えきれないものが沢山あります。にもかかわらず、人はとかく形で讃えようとす

る。これは評価される側の者にとって、有難迷惑といわねばなりませんまい。次のようなこともその類いでしょう。

美しいものを見ると、つい自分の手元に置きたくなるのが人情のようですが、『やはり野に置け蓮華草』の句を持ち出すまでもなく、大自然の美しさ(花鳥風月)はその場所にあつてこそ輝けるのであつて、花瓶や写真の中に封じ込めてしまえば色あせてしまうものです。これも、形に置き換えたがために価値を下落させた一例でしょう。

またこんなこともあります。最近ある新興宗教の教祖が、自分の偉大さを誇示する演出材料として、音響やレーザー光線を利用してありますが、これもせっかくの偉大さを形の中にすげ替えてしまうことになり、かえつてその人物を小者にしてしまうでしょう。まあ小者だからそのような演出をしたがるのでしょうが、見る人の目から見れば滑稽に写るので、そのようなことをしない方が賢明でしょう。大人物はそんな姑息な手段を用いなくても、心ある人たちを十分に引きつけることができますから……。

このように、大自然の美しさや人の心(行為、成果)を形の中に封じ込めるのは、価値の下落につながりあまり感心したことではないのです。」

「・・・」

「知的な価値」

「それでは、人の頭から生まれてくる知的な価値はどうでしょうか？ それこそ、その人を讃えてやらなければならぬと思うのですが？」

「たしかに、知的な価値は大切にしなければならない財産でしょう。何せ、無限の可能性を秘めた財産ですからね。といっても、私が大切にしなければならぬというのは、その知的価値自体であって、生み出した人を特別扱いしなさいとっているわけではありません。なぜならその価値は、その人が生み出したものではないからです。」

「えっ!？」

「物質である脳から、発明などなされるのでしょうか？ それを認めることは、コンピューターが発明することを認めるようなものです。」

よろしいですか。知的な価値が生み出されるのは、私欲を滅し人のため社会のためと純粋に打ち込んだ時に、インスピレーションとして天から与えられるのです。いかえれば、宇宙の知恵の宝庫に人の心が触れ、引き出されてくるのです。勿論その宝庫から引き出すには、努力と粹なる心が揃わなくてはできませんから、その人の努力は認めてやらなくてはなりません。知的価値そのものは宇宙の知恵の宝庫に眠っていたもの

なのです。

今日知的価値が金儲けの道具にされておりますが、これは天の心を無視した背信行為といわねばなりません。人類が得たこれらの財産は、広く世間に公開し、更に発展させ、人類のため、いやすべての生き物のために役立てるべきでしょう。私はこの知的価値こそ、『永遠の価値』だと思っています。労働者の追及する価値は、この永遠の価値の追及でなくてはならないでしょう。

〔量的価値と質的価値〕

「では、量的価値はどうでしょうか？ どんな世界であろうと、量が価値の対象にならないはずはないと思うのですが？」

「0をいくらプラスしても0になるのは、小学生でもわかる計算問題です。」

「どういう意味でしょうか？」

「タダの労働力がどれだけ集まろうと、どれだけ時間をかけようと、タダはタダにしかならないということです。すなわち、

労働対象(土地や資源) 0円 + 労働手段(機械や道具) 0円 + 奉仕労働力 0円 || 作られた物 0円・・・となる

のは当たり前だということです。

それに労働価値というものは、単に時間量だけで測れるものでしょうか。たとえば、一瞬の技が大きな価値を生む労働もあれば、じっくりと時間をかけなくては生み出せない労働もあります。

また一時間で一日分の価値を生み出す労働もあれば、残業をしてもなんら生み出せない労働だってあります。労働価値はこのように、単に時間量だけで決められるものではないのです。」

「しかし、工場で働く工員さんや工事現場で働く職人さんなどは、時間で価値を生み出しているではありませんか？ いや、時間で価値を生み出している職業は沢山あります。」

「それは商品価値を生み出しているのであって、使用価値を絶対化させているのとは違うのです。

つまり資本主義経済では、労働を二つの側面に分けてしまうのです。ひとつは使用価値を生み出す労働、もうひとつは商品価値を生み出す労働です。商品価値を生み出す労働は、それ自体が労働力という商品ですから、時間によって価値が生み出されるように見えるのです。要するに、本来使用価値だけ問題されるべきものが、資本主義経済下においては商品価値というもう一つの価値を作りだし、それを売買し利益に結びつけているわけです。

今日資本家は、労働者の売りつける労働力を次のような商品価値に結びつけています。

資本家が得る労働価値（一日八時間） 二五、〇〇〇円

労働者が資本家から得る賃金（一日八時間） 一〇、〇〇〇円

差し引き剰余価値（商品価値） 一五、〇〇〇円

（我が国の剰余価値率は約210から260%であるといわれている）

このように資本家は、支払う賃金の何倍もの価値を労働者から得ることで資本を蓄積しているわけです。労働本位制の世界は商品の売買はしませんから、商品価値を問題にする必要はありません。労働本位制で問題になるのは、あくまで使用価値（有用価値）だけです。となると、労働時間が多いとか少ないとかという問題は、まったく無意味になってきます。この世界で問題になるのは、あくまでも労働に向かう動機と姿勢です。

なぜ動機と姿勢が大切かといえば、この世界では何よりも量より質を重んじるからです。量は時間によって生み出すことも可能ですが、質はただ時間だけ過ぎればよいといった労働姿勢からは生まれません。質を生み出すには、世のため人のためといった献身意識と、真心を込めてなす姿勢が不可欠だからです。それではなぜ、この世界では量より質を重んじるのでしょうか？

相対の世界において物の価値は幻でしかありません。これは相対世界における物の宿命といってよいでし

よう。しかし奉仕世界の労働者たちは、それを宿命として諦めてしまうのではなく、質を上げることで少しでも絶対的価値に近づけようとしているのです。物の価値を絶対的価値（永遠の価値）に近づけるには、質の向上は不可欠だからです。ですからこの世界の労働者は、いつも質の向上をめざして励んでいます。おかげさなにかたですが、彼らは全身全霊を込めて質との戦いに挑んでいるのです。なぜそこまで真剣になるかといえば、その戦いは自身の目的（人格形成）とも重なり合うものだからです。

そんな世界に怠け者はありません。人に責任を転化する無責任な人もおりません。そんな彼らに与えられた報酬は感動です。つまり絶対的価値・永遠の価値イコール、美、感動、喜びだからです。質への挑戦とは、この美と、感動と、喜びへの挑戦なのです。それだけに成果が実った時には、言葉で表しようのない喜びを味わうことができるのです。

量的価値が唯物的価値といわれ、この世界の人たちに嫌われるのは、どんなに量的価値を生み出しても何ひとつ美や感動に結びつかないからです。いやかえって、煩わしさを多く背負ってしまうでしょう。ですから彼らは時間を気にしません。必要な時にはやる、必要でない時にはやらない、徹底しているのです。

こうしてみると、私たちが問題にしなければならないのは、あくまでも精根込めて打ち込む労働姿勢でしょう。その真面目な労働姿勢が新しい価値を生み、また無限の価値を生むのです。」

「では物の価値はどうでしょうか？ 世の中には有用な物もあればそうでない物もあります。もしそれも同価値に見よというのであれば、それこそ味噌もくそも一緒にしてしまうことになります。」

【物の価値】

「その味噌とくそですが、あなたはどちらが貴重品だと思いますかな？」

「えっ!? そ、それは味噌だと思いますが？」

「たしかに、味噌は日本料理に欠かせない調味料として重宝されています。しかし、糞尿だって植物の栄養源になってくれるのですよ。今は石油が採れているので糞尿は見捨てられていますが、もし石油が採れなくなったら糞尿だってきつと見直されるはずですよ。事実、ついこの間まで貴重な肥料源だったのですからね。」

「でも希少性やエネルギー量からみた場合、やはり物の価値は違うと思うのですが？」

「たしかに、今の制度下においては違うでしょう。しかし、そのエネルギーは人間が作ったものではないはずです。作っていないものに価値をつけ我がもの顔で売買する、これこそおかしいのではないですか？ また希少性は、人間のご都合主義で作られた人的なもので、決して物の属性ではないはずですよ。神はすべての生き物に困らないだけの物を与えたにもかかわらず希少性が生まれるのは、あくまでも人間の私利私欲の

ためではありませんかな？」

「でも現実には、金やダイヤモンドのような希少物質が存在するではありませんか？」

「でも、その物がなかったら人間は生きられないのでしょうか？」

「生きられないことはないですが、貴重品であることは間違いないでしょう。」

「しかし、その物を貴重品にしているのは人間でしょう。私がいいたいのは、本当に生きるに必要なものに希少性は存在しないということです。」

この地球上には多くの命が生かされています。それも神が私たち生き物のために、多種多様のエネルギーや資源を用意してくれているからです。大欲さえ抱かなければ、多くの命が生きられるようになっていきます。とくに私が感心するのは、食べ物や配剤とその特性の素晴らしさです。すなわち、穀物類や根菜類の多種多様さ、繁殖の旺盛さ、栄養価の高さ、また魚類の中でも栄養価の高い種ほど手に入りやすいという不思議さです。私はこの配剤の素晴らしさに、神の愛を感じずにはいられないのです。」

「・・・」

「あなたはまだ希少価値にこだわっているようですが、人間がつくった希少価値をよく観察してみてください。これほどあやふやなものはないのですよ。」

今日高名な画家の絵が、一幅何億何十億という価格で売買されていますが、その価値は決して絵そのものがもっている価値ではないはずです。人間の欲によって、見栄によって、作り上げられた幻の価値でしかないはずです。それがなかったら生きられない、といった価値ではないはずです。あなたは、高名な画家の絵一幅と、水一リットルのどっちが貴重品だと思いますか？」

「それは？ 絵だと思えますが？」

「しかし、砂漠で孤立してしまえば水の方が役立つのですよ。よろしいですか、ここに釘があったとしても。でもこの釘は、金づちがなくては何の役にも立ちません。また金づちだけあっても、釘がなくてはこれも用をなさないでしょう。また釘と金づちがあっても、木材がなくては意味がないでしょう。高級なカメラを見せびらかし、誇らしげに周りの景色を写してみても、そのカメラにフィルムが入っていないのは何の役にも立たないのですよ。冷蔵庫もクーラーも電気がなくては宝の持ち腐れなのです。」

このようにすべての物は、条件が整わなくては何ひとつ価値に結びつかないのです。ほんものの価値とは、Aの条件下であろうと、Bの条件下であろうと、変わらない価値をいうのです。そんな価値がこの世にあるでしょうか？ つまり一時空に浮かぶ雲のようなもの、それがこの世における価値の正体なのです。とすれば、物の価値に序列をつけるのはおかしいことになる。もしそこに序列をつけるとすれば、それを作ってい

る労働者にも序列をつけなくてはならなくなり、それこそ今日のような争い多い世の中ができあがってしま
う。」

「・・・」

「よろしいですか、先程も話したように、この世は現象の世界といわれるように無常の世界です。どんな物も永遠に形を止どめることはできません。石油にしても、鉱物資源にしても、ましてや人間の造ったお金にしても、摩耗し減価していきます。つまりこの世に存在する物の価値は、一時存在しているに過ぎないということです。それも条件が変われば価値はドンドン変化していく。そんな頼りないものに価値の序列をつけ、その差を貨幣で埋めようとする。そんな愚かなことに人生をかけてよいでしょうか？ 命をかけてよいでしょうか？ 職業の価値もそうだったように、物の価値も決して無常の世界で見いだすことはできないのです。したがって、揺れ動く価値に囚われ悪いことをするなど、愚かも愚か大愚かともいえるふるまいなのです。なぜなら、永遠の心が無常の現象に傷付けられることほど愚かなことはないからです。」

「しかし、条件によって価値は変わるとはいえ、自分に利益になると思えるものに価値を求めるのは、この世で生きている人間にとって当然の感情ではないでしょうか？ 私たちの目からみれば、今の条件下において明らかな絶対的価値があるように見えるのですから、いや現実に便益を得ることができるとは

ら……。」

「たしかに効用は認めます。しかし価値となれば別の話です。なぜなら価値は非属性のもので、決してそれ自体単独で存在するものではないからです。」

「でも石油は、それ自体“燃える”という属性があるではありませんか？ いや属性のある有益物はまだまだ沢山あります。鉱物資源や植物資源の殆どがそうでしょう。」

「しかし、ただ燃えるだけでは何の価値もありませんか。いやかえって危険の方が大きいでしょう。それを有用な物に変えるには、私たちの労働力が必要ではありませんか？」

「でも自然に実っている果物は、それ自体に価値があるはずですよ。木からもぎ取り、ただ口に入れればすむのですからね。」

「その木からもぎ取る行為は、人間の労働力ではありませんか。木になっている果物を見ているだけで腹が膨れるのでしたら、その価値の属性は認めましょう。しかし果物を採るにも、魚を捕るにも、資源を掘り起こすにも、みな人間の労働力が必要なのです。すなわち物の属性を發揮させるには、どうしても労働力の世話にならなくてはならないということです。」

今日私たちは、多くの資源を手に入れることができるようになりました。しかし、昔も今と変わらぬ資源

はあったのです。その資源を上手に活用し、有用物につくり替えてきたのは、ひとえに人間の知恵と労働力ではありませんか？ どんなにその物に価値があるうと、それを有用物につくり替えなくては宝の持ち腐れだからです。

最近多くの学者が、資源やエネルギーの枯渇にたいして警告を発しています。つまり、このまま右肩上がりで消費が進めば、近い将来資源やエネルギーは枯渇してしまうだろう、そうなれば文明の火も途絶えてしまふであろうと・・・この警告はある意味では正しいでしょう。すなわち、資源やエネルギーの大量消費は環境汚染に拍車をかけ、環境面から人類を破局に追いやるだろうとの警告と一致するからです。でも資源やエネルギーの枯渇問題だけに限ってみれば、そう心配することもないのです。というのも、資源やエネルギーは昔から地球上に沢山あったし、今も沢山あるし、未来も沢山あるからです。しかし、いくらあっても人間の知恵や労働力が幼稚なうちは、それを使いこなすことができない。つまり、あってもなきに等しいということです。この言葉は、今の人間にも、未来の人間にも、そっくりあてはまることなのです。すなわち、昔使いこなせなかった資源やエネルギーが今使いこなせるようになったように、今使いこなせない資源やエネルギーもいずれ使いこなせる時代がくるということです。そうなれば、枯渇問題は解決されるということです。その意味では、今日の枯渇問題は単に資源やエネルギーのあるなしの問題ではなく、人間の知恵(技術)

と労働力の問題であるということになるでしょう。したがってここでも、本当に価値あるものは物ではなく、人間の知恵と労働力であるところに行き着くのです。これを技術革新面から見れば、労働の持ち味が一層鮮明になってくるでしょう。

今日技術革新の目覚ましい進歩により、短時間で大量の物が生産できるようになりました。これは生産コストの下落に結びつきますので、当然労働力の再生産に必要な生活材の価格は下落するでしょう。つまり、それだけ労働力の価値が安くなるわけです。平たくいえば、もし資本家に剰余労働時間を搾取されないなら、それだけ労働しなくてすむということです。

今日必要労働時間は平均三時間前後だといわれていますが、(必要労働時間とは労働者の再生産に必要な生活材をつくり出す時間)もし技術革新によってこの時間を二時間なり一時間に短縮することができたら、そして残りの余剰労働時間を社会のため自分のために有効に活用することができたなら、個人も社会もどれほど潤うことでしょう。今日の社会においてさえ、技術革新の威力は私たちに希望をもたらしてくれているのです。ましてや、これが奉仕社会という環境の下で存分にその威力が発揮されれば、今日にみる難問はすべて解決されてしまうでしょう。

これでなぜ物の価値にこだわってはならないか、職業に序列をつけてはならないか、能力にこだわってな

らないか理解されたでしょう。」

「しかし人類は、そのような制度を本気で取り入れるでしょうか？」

「必ず取り入れるでしょう。なぜなら、進化した星ですすでにその制度を取り入れ、素晴らしい社会を実現させているからです。」

「待って下さい！ 進化した星といわれますと・・・？ ではご老人は、地球以外にも人類が生存しているといわれるのですか？」

意外な話が飛びだし、私は一瞬面食らってしまった。

「そうです。宇宙には地球と同じような星が数多くあって、そこにも人類が栄えております。進化した星では、今話した経済システムがすでに根づいていて、何ひとつ争いのない世界が営まれているのです。といっても社会の仕組みは、人の意識の高さや科学の発達と共に変化してゆくものですから、終着点というものはありません。その証に、進化した星の中にも未だに経済に足枷をはめられている星もあれば、まったく経済の必要のなくなった星もあります。地球も同じように、人の心の成長と共に社会の仕組みは変わって行くでしょうから、今話した経済の仕組みも、一時的なものとお考えください。」

まさにその世界の人間がしゃべることく、老人の言葉には威厳が感じられた。私はただただ老人を見詰め

るだけだった。一体この老人は何者なのだろうと……。

「今日の地球のように、価値をいちいち秤にかけその差を貨幣などで埋め合っている、決して他の星のような理想世界は生まれません。価値の平等化が当然なものとして認められる世界だからこそ、人は欲を起すことなく真に社会に貢献できるのです。いわゆる迷いと欲は、価値にこだわるから生まれてくるのです。また比較する目からも生まれてくるのです。

『どのような能力の持ち主も、どのような環境下にある人も、法(宇宙の法)の下では平等に扱われるのだから、目に見える価値に惑わされて欲を募らせてはならない!』といった考えが人々の心に定着することによって、あらゆる格差は納得のうちに解消されるのです。私たちの目にその法がみえないから、人は価値にこだわり迷いを募らせるのでしょうか、もし愛深い宇宙の法を信ずることができたなら、決して自分のことを高く評価して高慢になったり、低く見積もって劣等感にさいなまれたりなどしなないでしょう。

本物の価値というものは目に見えるところにあるのではなく、人の心の中に不定なものとして座しており、それは人それぞれ心の使い方によって輝きを増したり弱めたりするものなのです。要するに、心の使い方ひとつで価値なきものが価値あるものに、価値あるものが価値なきものに変わってしまうということです。私たちがこの世に生まれた目的のひとつに心の修行が織り込まれているのも、こういった理由があるからです。

さて、価値は完全に葬り去られました。この価値否定は、これから話す二つの制度を否定する理由ともなるのです。その二つの制度とは、私有財産制度と貨幣制度です。この二つの制度を否定することによって、理想世界は大きく前進することになるのです。」

③私有財産のない世界

「私有財産とは何か？」

「さて、人間は自然物を何の疑いもなしに私有していますが、本当に私有できる財産がこの世にあるのでしょうか？ この地上界にあるすべての物は、私たちがこの世で生きている間一時使わせてもらっているだけで、決して私物化してはならないはずで、肉体は時が来れば地上から姿を消す、ならば肉体ある間のみ借用できれば良いのではないのでしょうか？」

人類の争いの歴史は、私有財産の争いの歴史であったといっても過言でないでしょう。現在でも親の財産分与で子供達が骨肉の争いをしている姿をみますが、これなども前言からいえば愚かな争いといわねばなりません。この世には何ひとつ私物は存在しないと同時に、自分が使用してならない物も何ひとつ存在しな

いのです。すべての物は、すべての生き物のために用意されているのですから、それを使用してならないという決まりはないからです。ただこの世は物質の世界ですから、時間と空間が重なる『ぶつかり合う』という不都合が生じます。だからぶつかり合わないよう便宜上、Aの物は誰のもの、Bの物は誰のものと、一時区別しているに過ぎないのです。にもかかわらず人間は、私物として執着を抱くからさまざまな争いが生じるのです。

海も山も川も湖も大地も、すべての生き物の共有物です。なのに地主の子として生まれただけで、なぜその土地を自分のものできましようか？ それは空気の下に生まれた生き物が、“ここからこまでは自分の空気だ”と主張するくらいおかしいことではないでしょうか？ ある人はこんなことをいっております。

“もし三人の仲間が、冬山で吹雪のため山小屋に閉じ込められたら、三人がめいめい持っていた食糧は個人の私有からはずされ、三人のものになるだろう。とすると、本来「私有」とはどういうことなんだ！”と・・・。

この人のいうように、私有という形は一時の見せかけであって、あるべき姿ではないのです。あるのは、必要に応じて使用できる権利だけです。つまり、その人が生きるに本当に必要であれば、どんな物であっても使用して構わないという使用权を、元々天賦権(天から与えられた当然の権利)として与えられているということです。なぜなら、すべての生き物は神の御手によって等しく創造された神の子だからです。その意味

において、物は必要な時に借りて使い、必要なくなったら元に返しておけばよいし、返せない場合でも、(食べ物、生活必需品など)それはそれで生きる権利として互いに許しあえば良いのです。これが生き物の、物質界において守らなければならない基本的掟なのです。私有財産を許すことによって、いかに多くの矛盾と不合理を生みだしたことでしょう。

その第一は、階級社会をつくり貧富の差を生み出したことです。

生き物の潜在意識の中には、この世の物はみな生きとし生けるものに与えられた共有物という本能的知覚が働いています。アフリカの原住民の中にはいまだにその名残があり、持たない者が持っている者から物をもらうのは当たり前となっています。動物もその意識が働いているから、余った餌を隠し持つようなことはしません。持ては持つほど欲深くなり、手放したくなくなるのは人間だけです。

第二は、社会秩序を乱したことです。

人類共通の生活空間を創造しようとしても、そこに所有者個人の不寛容な思惑が入りそれが許されない。たとえば、ここに100ヘクタールの土地があったとしましょう。もしその土地を私有に任せるとなれば、必す力の強いものが占領するようになり、占領した者の都合のよい使い方をされる。大きな家を建て、大きな庭をつくり、背の高い塀で囲み、木を植え、橋を架け、道路はまるで迷路のように好き放題に敷かれる。不動

産は動かしたいものだけに、一旦つくられるとそれが邪魔だからといって簡単に動かすわけにはいかない。こうなると、少数権力者のために理想とする社会環境は適えられなくなり、多くの人が不自由な生活を強いられることになる。今日、消防車も入れないほどの狭い住宅街がアチコチに見られますが、これなどはその典型的事例といえるでしょう。

第三は、個人主義を助長させたことです。

人間には潜在意識とは別に、五官からつくり出される顕在意識というものがありません。その動きの根は欲望ですから、どうしても個人主義に陥りやすい。私有財産を許すとその欲望は火に油を差したように燃え広がりが、個人主義を暴走させることになる。社会秩序はこうしたエゴイストによって掻き乱され、何ひとつ配在された環境作りがなされないのです。今日の地球環境の危機も、その大きな要因にこの個人主義の暴走があるのです。もし個人主義を主張したいなら、出した廃棄物も個人で解決してもらいたいものです。消費する時だけ私物化し、使用後の廃棄物を社会共有物として放っておかれたのでは地球環境はたまったものではない。

私たちは何か自分に都合の悪いことがあると、すぐに“人権蹂躪だ”“人権無視だ”と騒ぎ立てますが、その騒ぎ立てている人たちは果たして全体の人権を守っているでしょうか？ この世に自分しかいないの

でしたら好き勝手に生きたらよいでしょうが、多くの仲間と睦まじく生きていかねばならない人間社会において、自分の行動が社会にどのような影響を与えるか、といった自覚はいつも持っていないてはならないし、また持つことが人間としての責務でもあると思うのです。したがって個人の権利を主張する前に、この主張が果たして社会全体にどのような波紋を投げかけるか、また全体の福利にどのような影響を与えるか、といった公人の目を常にもち、その良否を確かめた上で主張すべきでしょう。また周りの人たちも同様に、全体権利を主張することによって個人にどのような影響を与えるか、それを強いることによって個人を窮地に追い込まないか、個人の利害と全体の利害との比重はいかほどか、といったトータル的な判断もまた必要になってくるでしょう。このように互いに相手の立場になって考えあう時、そこに素晴らしい知恵も生まれてくるでしょう。最終的には双方の『許し』がすべてを解決するのですが、この『許し』が大きければ大きいほど、平和も大きくなっていくものなのです。

このように人類の歴史は、私有財産制度を許すことによって数々の苦汁をなめてきたわけですが、人類は一向にこの過ちを改めようとしません。それどころか、ますます私有を容認する傾向にあります。なぜこれまでして人間は、私有物にこだわるのでしょうか？ もし本物の財産が何なのか知ったら、これほどまで私有物にこだわらず生きられたでしょうに……。

「真の財産とは」

では、人間が真に大切にしなければならない財産とは何でしょうか？ 土地でしょうか？ お金でしょうか？

地位や権力でしょうか？ 私たちはよく、"あの人は財産家ですよ！"とか、"あの人は大金持ちですよ！"とかいいますが、財産とはそのように目に見えるものばかりでしょうか？ 目に見えない財産、すなわち、お金に代えがたい財産もあるのではないのでしょうか？ 私は財産を次の三つに分類してみました。

①通常の財産・・・現金や有価証券、土地や建物、宝石や美術骨董品といった今の社会で有用なもの。

②身についた財産・・・技術、技能、知識といったその人の身についたもので、一見表面に現れないもの(運転技術、操作技術、加工技術、語学、芸術、スポーツ、その外諸々の知識や技能)。

③心の財産・・・人格、(不動心、努力心、忍耐力、向上心、協調心、優しさ、思いやり、心の深さや広さ、勇気など)

①の財産は社会通念上いわれている財産ですが、これは肌で実感できる一番頼りがいのある財産のように思えます。しかしよくよく考えてみると、これほど頼りがいのないものはありません。なぜなら、経済変動、社会情勢、政治の動向、戦争や天変地変によって、これらの価値はコロコロと変わってしまうからです。ま

たこの財産は物ですから、増やしたり増えたりする反面、盗まれたり焼失したり減ったりする恐れもあります。だから一番安住していられるはずの財産家が、金庫に鍵をかけ、戸締まりに神経を使い、世の動きにいつもビクつき、改革が行われるたびに現体制が崩壊しないよう必死になって抵抗するのです。この財産にしがみついている限り、人の心は休まらないでしょう。それに比べ②の財産は、その人の身についているものですから、盗難にあったり焼失したり失ったりする恐れがありません。努力次第でお金も財産も地位も思いのまま、可能性はドンドン広がっていくでしょう。しかし喜んではいられません。この技術や知識もこの世限りのもの、肉体が無くなったり破損すれば、その素晴らしい財産も失うことになります。

それでは③の財産はどうでしょうか？ これは肉体がなくなっても決して失われない永遠の財産です。人を思いやる広い心、優しい心、不動の心、何事にもくじけない不屈の闘志心、努力心、協調心、正義心などの財産は、お金で買えない貴重な財産です。私たちは、肉体の死が万事と思うから③の財産を軽んじます。人間が永遠の存在だと知ったら、うかつな扱いはできません。

さて人間が永遠を求める旅人なら、私たちの求める財産は永遠の価値を秘めた③の財産でなくてはならないでしょう。金持ちがしがみついている財産は、不安定極まりない財産ですから、一日も早く③の財産獲得に転換してほしいものです。人間はこれまで、失う財産を追い求め、多くの争いと悲劇を生み出してきました

た。今日の混迷も、この一点にあるといって過言でないでしょう。財産のために人を裏切り、陥れ、欺きあう、これは財産が物だから起こる悲劇です。もしこれが物でなく、②③の財産なら、この悲劇もずっと少なくなるはずですよ。」

【資源とエネルギー帰属問題】

「前述したことを念頭に置いて、現在各国に帰属している資源やエネルギーはどうすべきか？ ということについて考えてみることにしましょう。」

この世に私物は存在しないといいました。ならば資源やエネルギーも、一国に帰属させるべきではないでしょう。つまり地球上にあるすべての資源やエネルギーは、全人類の財産として全人類の為に使うべきではないでしょうか？」

「でも、元々自分の国にあった資源やエネルギーを、なぜ他国民のために使わなくてはならないのでしょうか？」

「では質問しますが、その資源やエネルギーはその国の人たちが作ったのですか？ その民族が誕生する以前から、もともと自然物としてそこにあったものではありませんか？ それをなぜ、その国民だけのもの

のにできませんようか？」

「しかし、先住民族に帰属権があるのは当然ではありませんか？」

「先住権の主張ですか。それでは貧土の国に生まれた人たちは、ただ運が悪かっただけとおっしゃるのですか？ 豊かな地に生まれた人は一生豊かに暮らし、貧しい地に生まれた人は一生貧しい生活に甘んじなくてはならないのでしょうか？」

「それは仕方がないと思います。もし資源やエネルギーが欲しいなら、一生懸命働いて買い取るしかないでしょう。」

「もし買い取るお金がなかったら、その国の人たちはどうするでしょう。死ぬわけにいかないから、きっと豊かな国を侵略しようと考えてでしょう。そうなると、戦争になり多くの犠牲者を出すことになる。」

「それでは、ご老人は資源をただで分け与えろとおっしゃるのですか？」

「どのような国であろうと、何か役立つものがあるはずですよ。たとえば、技術の移譲とか人的サービスといった目に見えない財産が、それを交換することだってできるはずですよ。」

「もし、それさえもない国だったらどうするのですか？」

「気持ちをいただくことです。気持ちをいただいた上で物を分け与えることです。」

「見返りがなくとも分け与えろとおっしゃるのですか？」

「そうです。たとえ見返りがなくても、困っている人たちを助けるのは人道上当然ではありませんかな？」

「しかし、その国の資源だっていつまでもあるわけではありません。だったら、できるだけ子孫のために残して置きたいと思うのは人情ではないでしょうか？」

「子孫のために？」

「ええそうです。」

「そこがおかしいのです。よろしいですか……。」

先程もいったように人間は永遠の存在です。つまり、輪廻転生を繰り返す永遠の生命体、それが私たち人間です。その永遠の命を持つ私たちが、一国だけの肉体子孫にこだわるのはおかしいではありませんかな？ 私たちはある転生ではA国に生まれてA国人の肉体を持ち、ある転生ではB国に生まれてB国人の肉体を持つといったふうに、色々な肉体に宿って転生を繰り返しているのですよ。ならば、すべての肉体子孫に愛情を注ぐのが道理というものではないでしょうか？ なぜなら、次生自分がどこに生まれるか分からないからです。

たとえば、今あなたは資源豊かなA国に生まれ、指導者となって裕福な暮らしをしていたとしましょう。

A国の隣には貧しいB国があつて、時々資源援助の申し込みがあります。しかしあなたは、貧しい国の要求に耳も貸さず少しも資源を分け与えようとしません。それどころか、侵略から身を守るため多くの予算をつぎ込み軍備の増強を図っています。そんなあなたの人生は百年足らずです。いや余りにも贅沢に親しんだため、六十年しか生きられませんでした。あなたは短い一生を終え、意識界へ帰って行きます。次生あなたは、B国に肉体を持ち再び指導者となりました。彼は自国の余りの貧しさに何とかしなければと思ひ、豊かなA国に資源を譲つてほしいと申し出ました。しかし資源を譲ることは国の決まりでできないと無下にも断られました。(その決まりは、自分がA国の指導者の時に定めたものであつた)そこで彼は、ひもじい思いで一生を過ごさなくてはならなかつた。

こう考えると、あなたは二つの転生を通じ楽と苦を体験したことになり、その総和は0でした。もしA国の指導者であつた時に、貧しい国を助ける援助法を法制化していたなら、B国に生まれた時ひもじい思いをせず生活できたはずですが、贅沢もできなかつたが、ひもじい思いもしいですんだ。総和は同じ0ですが、一方では暖衣飽食によって命を縮め、一方では飢えによって命を縮めた。一体どちらが賢い生き方だったのでしょうか？ A国人も次生B国に生まれなるとも限らないし、B国人も次生A国に生まれなるとも限らないのですから、資源を偏らせるより、人類全体の財産としておいた方が利口ではないでしょうか？」

人類が輪廻転生を繰り返す生命体であるとすれば、たしかに理屈は通るが……？

「もう一つ、私たちは国境線を作ることで大損していることを知らねばなりません。もし国境線を作らず、地球上のすべての資源を人類全体のものとして扱うなら、人類はみな裕福に暮らせるはずです。」

「どういうことですか？」

「わかりませんか？ あなたは自分の国の資源だけ自分の物にするのと、地球上のすべての資源を自分の物にするのと、どちらが裕福に暮らせると思えますか？ 地球上のすべての資源を自分の物にすることで、すね……。では人類は今、そのようなことをしていますか？ ここからここまでは自分の国の資源、ここからここまではあなたの国の資源、と分けているではありませんか？ 国境線を設けなかったらすべての資源を自分の物にできるのに、国境線を設けているため、地球上では常に資源の奪い合いや領有権の争いが起きているのです。」

たしかに、すべての資源を全人類の財産として扱えば争い事はなくなるだろう。また貧しい者もいなくなるかもしれない……!?

「今後科学は飛躍的に発達します。そうなれば、エネルギーも資源も錬金術まがいに手に入るようになります。(理想社会が浸透し人の心が整えば、科学は一段と発達する)そうになると、私有物とはなにか、国有物

とはなにか、といった考え自体まったく無意味になってきます。つまり、空気のように自由にエネルギーや資源が手に入るようになれば、これは私のもの、これはあなたのもの、といった区分けが不要になってくるというわけです。

さて、私有財産にこだわる事の愚かさを論じてきましたが、ご理解いただけましたかな？ たしかに、生きていくためにはある程度の物は必要でしょう。しかし、それも肉体ある間かぎりです。どんなに沢山の物を持っていても、あの世に持ち帰るわけにはいかないからです。それに、次生どこに生まれるか分からないとすれば、肉体系子孫に財産を残す姑息な考えも捨てざるを得ないでしょう。」

④貨幣のいらない世界

「貨幣制度の弊害」

価値の消滅は、貨幣の存在を否定する理由になると老人はいうが、物の配分にはやはり貨幣は必要ではないだろうか？ 私はこの疑問をぬぐいきれないでいた。

「経済とは『配分の哲学』であるといわれるように、経済を語る時にこの配分問題を避けて通るわけには

いきません。今日この配分は資本主義経済、つまり適者生存（優勝劣敗・弱肉強食）という最も原始的な手法によって行われているわけですが、その中心的役割を担っているのがこの貨幣制度なのです。それでは、貨幣はどうしてもなくてはならないものなのか、機能に注目しながらその存在意義を考えてみることにしましょう。

貨幣は太古の昔より私たちの生活にさまざまな便宜をもたらしてきましたが、貨幣にまつわる人間ドラマは決して楽しいものばかりではありませんでした。“金が敵の世の中”といわれるように、人生劇場で演じるテーマの殆どは金にまつわる悲劇であり、その悲劇は時代を問わず繰り返し返されてきました。それではなぜ、貨幣が必要なのでしょう？ それにはまず、貨幣がどんな働きをしているか知らねばなりません。

貨幣は次のような機能を持ちます。

- 一、交換価値を持つ
- 二、価値の尺度を表す
- 三、支払いの手段である
- 四、価値の貯蔵の役目をする
- 五、利潤を得る手段に利用される

六、あらゆる権利の決済手段あるいは交換手段として利用される

これを見ると貨幣は、私たちの生活に欠かせないように思えます。しかし、貨幣には次のような欠陥があります。

一、欲望を煽る道具となりやすい。

人を殺したり、傷つけたり、盗んだり、欺いたり、犯罪には必ずといってよいほどお金がからんでいる。これは貨幣が物だから起こる悲劇である。

二、正当な手段によらず、単に貨幣を操作するだけで利益を得んとするよこしまな心をつくってしまう。

ひたいに汗して働くところに価値があるのに、ただ金を動かすだけで利益を得ようなど、卑怯者、怠け者のやる所業である。これでは何に一つ肝心なものが身につかない。賭博・宝くじ・商品取引き・株式売買・為替取引などマネーゲームに熱中するかぎり、世に悲劇がつきまとうだろう。

三、焼失したり、破損したり、失う恐れがある一方、偽金をつくるうま味も存在する。

貨幣を紛失したり焼失してしまえば、ひたいに汗して得た労働対価がむなく消え去る矛盾がある一方、偽金を造って勞せず巨万の富を得る不合理もひそんでいる。

四、ひとたびインフレーションが襲えば、貨幣価値はまたたくまに失われる。

真面目に得た労働対価をこのようなことで失ってしまうなど、本来あつてはならないことである。しかし、貨幣本位社会である限りこの矛盾はいつもついて回り、我々を不安におとしめるのである。本当に価値あるものなら、どんな事態が起ころうと減ったり失ったりするものではないだろう。その意味でも、貨幣は本物の価値あるものとはいえないのである。

五、貨幣の退蔵は不況を呼ぶ。

貨幣の回転が早くなれば景気は良くなり、鈍れば悪くなっていく。つまり何かの原因で消費意欲をそがれば、回転は鈍り経済は停滞へと向かっていく。その原因は多々あると思うが、現在のように物の生産が容易になった社会では、殆どが庶民のメンタルなものから引き起こされるといって良いだろう。最近では、それを打破しようと政府自らが景気振興を図るようになったため、戦前のような大恐慌は少なくなつたが（公共投資や企業への補助、産業基盤の整備、社会福祉などの財政投融资）それでも景気の波はうねっており、それによって生みだされる失業も、インフレも、詰めれば貨幣弊害のひとつなのである。

六、貨幣は『物』であるだけに偏りが起こる。

発展途上国や後進国などの債務問題がとりざたされているが、我々の周りをみても、お金は力の強い者の

ところにあつまり、弱いところにはあつまらないという欠点を暴露する。これはお金が『物』だから起こる欠点である。物は念の強いところへ引きよせられる法則が働き、貧者は富者に押さえ込まれるという大きな不公平を生みだす。大国は人道主義を唱えながら、弱肉強食むきだしの経済戦争をくり返しているが、その結果はあきらかで、小国は戦いに負け莫大な債務をかかえ込むことになる。そこに人道精神があるといえるだろうか。これも、貨幣に縛られた限定経済の実態である。

七、通貨の増大(経済成長)は環境を悪化させる。

通貨の増大は消費の拡大であり、また経済成長を意味し国民が富むことでもある。たとえばインフレを考慮しないで、闇雲に消費をあおり通貨の回転を速めればできないことではあるまい。その見返りとして国民は富み、見掛けは豊かな社会を築くことができよう。しかしその豊かさは、自然の犠牲の上に成り立っているのである。

八、物である紙幣や硬貨は、印刷したり加工したりまた保管の手間が必要である。

大蔵省の印刷局で印刷される紙幣は、一日当たり二千五百億円、一年で約七十兆円だといわれている。近年紙幣の発行残高、つまり市中に出回っている紙幣は約四十兆円前後といわれているが、これを積み上げると富士山の約百八十五倍、六百九十キロメートルにも達するというから驚きである。(平成五年現在)これだ

けの紙幣を印刷し管理する手間は一体いかほどであろうか？

九、表現できない価値も貨幣によれば可能となり、これが真の労役を踏みにじってしまふ。

江戸時代に不作で困窮した農民は、娘を売ってお金を作ったといわれる。いわゆる人身売買である。これなどは、実際表せるはずのない価値を無理やり金で表した典型的事例であろう。最近では暮らしに困らなくても、平気で体を売る若い女性が増えているといわれるが、これなども実情は違っても同列にかかげられよう。

また金さえ出せば、学歴や肩書やはたまた名誉までも手に入れられるという、不見識極まりないことがまかり通っているようだが、一見便利なお金の効用も、ここまでくると罪つくりの道具としかいいようがない。ところで最近、善意をお金で表そうという傾向があるが、そのお金の出所が不純であっても形としての善意はなりたち、金額の大きさによって世間もその人を認め、新聞も善意者としてほめたたえる。こうなると身を尽くして施す陰の小さな善意など、どこかに吹き飛ばされた形となり、“長者の万灯より貧者の一灯”などの諺も影の薄いものとなってしまう。

“お金は出すが汗は出さない”では、本物の善意とはいえない。誠の善意とは、汗を流して尽くす行為というのである。(汗して働いたお金の寄付は立派な善意となる)。

また生命保険などのように、命の価値を無理やりお金で表すのも大いに問題がある。なぜなら大金を受け取ることに、その後の人生を狂わす危険性を作ってしまうからである。何度もうのように、お金はひたいに汗して勝ち得るもので、決して棚からボタモチ式に得るものではない。貨幣がエネルギー貯蔵の役目をするとなれば、その反作用によってシッペ返しを受ける危険性は大となろう。このように、貨幣は眞の労役を踏みにじってしまうのである。

一〇、貨幣を用いることによって無用で雑多な職業が生まれてくるが、それが更に社会を硬直化させてしまう。

金貸し業、銀行、生命保険会社、損害保険会社、証券会社、不動産売買業、さらにその紛争を処理する司法書士、弁護士、検察官、裁判官など、本来無用の職業が花形職業として登場し、損得に揺れる社会にドツカリと腰を据えることになる。これらの職業は資本主義社会特有ともいえる存在であるが、この活躍の場が増えればふえるほど社会は混迷の度を深めていくのである。

一一、貨幣はあらゆるつながりを分断してしまう。

昔から金の切れ目は縁の切れ目といわれてきたように、貨幣は人と人のつながり、人と社会のつながり、人と国家のつながりを断ち切ってしまう。つまり、何事もお金によって解決できる世の中では、人の誠意と

か、真心とか、情味といった心を育てないのである。

〔貨幣制度を撤廃する〕

このように貨幣は、人の心を卑しくし多くの犯罪を生み出す厄介物となっているわけですが、どうしたとか人間はこの貨幣を手放そうとしません。どうも私たちは、貨幣というものが元々この自然界にあり、どうしても使用しなければならぬような思い込みをしているようですが、これは人間が社会生活を営む中で必要に迫られ造られた純に人的なものなのです。ですからもし無くせるなら、一日も早く無くすべきなのです。もし貨幣がなくなり、一切の損得勘定ができなくなれば、人々の欲望は沈静化することでしょう。

ではどうしたら、この社会から貨幣を無くすことができるのでしょうか？　いうまでもなく、すべての価値が無くなったときでしょう。すなわち、

一、すべてのものがタダになったとき。

二、比較衡量する必要がなくなったとき。

三、損得や利害が生まれなくなったとき。

もっとも、すべてのものがタダになれば比較衡量する必要もないし、損得や利害も生まれなわけですか

ら、一と二と三は同じと考えてよいでしょう。

では六つの貨幣の職能のうち、価値尺度機能と交換価値機能に注目して下さい。今日貨幣が必要なのは、違う品物の価値あるいは違う労働力の価値(サービス、アイデア、技術も含む)を共通単位で測り、その差異を埋める必要があるからです。たとえば(A)という人が作った洋服と、(B)という人が作った靴下の商品価値は、今日の社会常識では明らかに違いますから、それを等価交換するわけにはいきません。でも貨幣に置き換えることによって、それができるのです。貨幣にはこのような価値尺度機能と交換価値機能があるわけですが、先程から話しているように、もしどんな物もどんなサービスも等価値なら、つまり純粋に奉仕労働力から生まれた物なら、価値はすべて同じになるので測る道具(貨幣)は不必要になってくるはずです。すべてが同じ重さなら測る必要がないので秤がいらないように、すべての物の価値が同じなら、それを貨幣という秤にかけて測る必要はないということです。しかもその物やサービスが公的市場で扱われるなら、そこにもう貨幣などの介在物は必要ないでしょう。」

「それでは、価値の貯蔵は何がするのでしょうか？」

「価値の貯蔵が必要ですか？」

「そうです。私たちは貨幣を貯蓄することによって、必要な時に必要な分だけ物を買取ることができる

のです。もし貨幣がなければ、その役目は一体何がするのでしょうか？」

「なぜ価値の貯蔵が必要でしょうか？ 食べる物も、着る物も、住む家も、医者にかかるのも、教育をうけるのも、旅行をするのも、電気、瓦斯、水道、すべてタダなのですよ。それも、欲しい時にいつでも手に入れられるのですよ。そのような社会に、価値の貯蔵が必要でしょうか？」

私たちには、無限の価値を秘めた労働力という財産があるではありませんか。それは“打出の小槌”のように、なんでも生み出す財産なのですよ。その“打出の小槌”を持っている私たちに、なぜ貨幣が必要でしょうか？」

残りの貨幣の機能、つまり支払いの手段、利潤を得る手段、権利の決済手段といった機能は、資本主義社会ならではのものですから、無くてもなんら問題はありませんまい。」

「では、欲しいものをどうやって手に入れるのですか？ 貨幣がなければ買うこともできないではありませんか？ それともご老人は、物々交換か配給制度にでもしようといわれるのですか？」

「いいえ、物々交換も配給制もいらぬ、実に理想的な配分システムがあるではありませんか？」

「理想的な配分システム？」

「そうです。あなたは家で食事をする時お金を使いますか？」

「私が稼いだお金で食べるのに、どうしてお金が必要でしょうか？」

「それでは、お子さんから食事代を取りますか？」

「いいえ、家族の一員ですからお金など取りません。」

「理想的な配分システムとはそれなのです。」

「えっ!？」

⑤自由取得制度

「それでは貨幣も用いずどのように配分するか、いよいよその異色ともいえる配分システムの核心に触れることにしましょう。

大自然の生態系をみて感心させられるのは、我が身を犠牲にして他の生き物を生かす捨て身の精神、つまり滅私奉公の姿です。この精神が法のもとに脈打っているから大自然の秩序は保たれ、生命の循環も絶えることがないのです。すなわち、一見相い食む弱肉強食の醜い姿の中に、素晴らしい秩序の束ねが息づいているということなのです。

“人間は社会的動物である”といわれるように、人間社会は色々な人が寄り添い助け合うことによって成

り立っています。しかし、資本主義社会における助け合いは真心から生まれたものではなく、個々人の利害や損得の投げあいの中から生まれた不純な助け合いにしか過ぎません。すなわち、私的な労働力が損得勘定を背景に個々バラバラに積み上げられ、社会的労働力として運用される中から生まれた、結果的な助け合いに過ぎないということです。奉仕世界では、それを真心をもって表せる土壌作りに成功しました。つまり、『互恵』『犠牲(奉仕)』『少欲知足』の三つの精神を社会の中心に据えることで、何の強制力(権力や資本力)も使わず経済を循環軌道に乗せることができたのです。

経済を循環軌道に乗せるという意味は、私たちの労働力は切り放された存在ではなく、循環して渡り歩く社会的労働力であるという意味です。特に、利害や損得から解放された奉仕労働力は、途中で何ものにも邪魔されないだけに、速やかに『結果・成果』として自分のところに帰ってきます。それだけ張り合いも緊張も責任もあるわけですが、もしこの奉仕労働力を社会機構に完全に組み込むことができれば、すべての生活必需品を自家消費感覚で使用して良い！ といった制度も異端で無くなってきます。自分が作ったものを自分が使うのに、誰にも遠慮はいりませんからね……。これがこの世界の配分精神なのです。つまり配分は、本人の自由意志に任せた自由取得制度で良い、すなわち必要な時に、必要な量だけ、自由に持ち帰って良い！ という制度がこの世界の配分システムなのです。これなら、貨幣も、物々交換も、配給制も、必要ないでし

よう。」

「それじゃ、泥棒と同じではないですか!？」

「自分の物を持ち帰ることが、どうして泥棒になるのですか？」

「たしかに、自国民が作ったものを自国民が持ち帰るのであれば問題無いでしょうが、他国民が持ち帰るとなればこれは別問題だと思います。」

「でも自国民だって、他国へ行って取得することがあるのですよ。これはお互い様なのです。」

「そうなると、持ち帰る人の心構えが問われそうですね？」

「そうです。この制度の発想の原点は、人の心を敬い信ずるところから出発していますから、やはりそこらへんが問題になってくるでしょう。しかし、食べるものにしても、着るものにしても、住む家にしたって、質素な生活に甘んじる限りそう大差は出てくるものではないでしょうから、基本的な生活材に限ってみればそう案ずることもないでしょう。『取得』という言葉を使ったのも、すべての生活材は『自家消費のため!』ということを強調したかったからです。つまり自分の家で作ったものを、自分の家族が消費する感覚ですね……。」

家族の物に欲を募らせる人はいないでしょうからね。とはいえ、生産調整の必要性から、取得内容を報告

する義務は徹底させねばならないでしょう。

「でも人の良心をあてにして、本当に配分秩序が保たれるでしょうか？ 世の中には、強欲者もいれば偽る者もいます。良心の塊みたいな人ならともかく、不正直な者は報告義務を怠るばかりでなく、いくらでも持ち帰ってしまうでしょう。たとえ正直者でも、報告義務を忘れることだってあるはずですよ。それでは、この制度は成り立たないのではないのでしょうか？」

「沢山持ち帰ってどうしますかな？ 貨幣があれば一儲けすることもできましようが、貨幣のない世界で多くの物を持つことは、厄介を多く背負うことになるのですよ。

ここに三人の人がいて物が四個あったとすれば、一個余ってしまうことになる。すぐに使うのだったら問題は無いが、使わないとしたら、保管場所もあるし保管の手間もある。生ものは腐りやすいから、保管には余計に神経がいるでしょう。必要な時いつでも自由に取得できる社会で、なぜ神経を使ってまで余分な物を持つ必要があるでしょうか？ 多く物を持っていなければ安心できないのは、信頼のない社会で生きている人間だけです。次のように考えれば、その不安も解消されるでしょう。

たとえば食糧なら、自分の食糧保存庫が市場にあって、そこで仲間が自分のために保管してくれている。少々面倒ですが、必要なときに市場に出掛け自由に持ち帰れば良いのです。できるだけ余分な物を所持しな

いよう心掛けるのが、この世界に生きる人たちの暗黙の了解事なのです。たしかに、行き渡らないほどの品不足ならあなたの心配も領けませんが、いつも品物が豊富で、いつでも自由に持ち帰れる環境が整っていたら、誰が余分な物を持ち帰ろうとするでしょうか？ たとえ食べたい物ががちあって品不足になったとしても、明日まで我慢すればすむことです。信頼の行き届いた社会なら、その心の余裕さえ生まれるものです。

石油ショックの時、流言飛語に惑わされた主婦達がトイレトペーパーの買いだめに走ったことがありましたが、品不足になったのは、一儲けを企んだ業者が売り惜しみをしていたからでした。隠しておく方も卑劣なら、買いだめに走る方もまた愚かといわねばなりません。人の心の弱さといえはそれまでじゃが、これは資本主義経済に対する信頼のなさが引き起こした、笑い話にもならない事件でした。真にその経済に信頼があるなら、決してそのような混乱は起きなかつたでしょうに……。」

「ご老人がいわれるように、すべての人が良心に恥じないよう一生懸命働くのでしたら、この制度は本当に素晴らしいと思います。でも世の中には、怠け者もずる賢い人もおります。そういう人たちは遊びながら食べたいのです。これでは配分の正義がまかり通らないのではないのでしょうか？ 一生懸命働く者は裕福に怠け者は貧乏に、これは自然の摂理だと思えます。たとえばここに、Aという人とBという人がいて、この二人に同じ量の芋を分け与えたとします。勤勉家であり努力家でもあるAは、もらった芋をみな食べるので

はなく将来に備え増やそうと考えました。荒れ地を開墾し田畑をつくり、そこに種芋を植えました。その努力が実って、Aはたくさんの芋を手にすることができました。一方Bはもらった芋をみな食べてしまったので、すぐに食べるのに困ってしまいました。そこでBはAに芋を恵んで欲しいと申し出たのですが、この場合AはBに芋を分け与える必要があるでしょうか？ 誰もが、いつでも、ただで、欲しい物が手に入る社会とは、怠け者に芋を恵んでやるようなものです。果たしてこのような配分システムが、正しいといえるでしょうか？」

「結論からいしましょう。どんな事情があろうとも、困っている人を助けるのは当然です。ただしこの救済方法には、三つのやり方があると思います。

一つは、Bがまったくの無能者の場合です。この場合は無条件で助けてやらねばならないでしょう。何せ、能力がまったくないのですから仕方がありません。

二つ目は、能力はあるが無知なため、どうしたら最善の生活が営めるか分からない場合です。この場合、物を与え当面の生活を支えてやる一方、どうしたら最善の生活が営めるか教えてやることです。これなら一度目は失敗しても、二度目からは立派に自立できるでしょう。

三つ目は、何もかも承知の上で、ただ働くのが厭だから何もしない場合です。

この場合は黙って物を分け与えてやることです。何せ、人生の目的は何か？ 人の生き方はどうあるべきか？ どのようにしたら最善の生活が営めるか？ すべて知った上での怠惰ですから、どう諭すこともできないでしょう。でもこのような人は、一人もいないといって良いでしょう。なぜなら、本当に人生の目的を知った人なら、決して怠け心など起こさないからです。怠け心を起こすのは、やはり無知ゆえです。つまり人がこの世に生まれて来た理由、努力することの尊さ、働く意味などが分からないから怠け心を起こすのです。したがって、怠け者のためになぜ働かねばならないのだと愚痴をこぼす人や、楽ばかりを追い求める人には、人生の意味をしっかりと教えてやることです。要するに、『人助けは人の為だけにあらず、いつの日か我が身に返らん』という真理を教えることです。」

「情けは人のためならず、というわけですか？」

「そうです。ですから、愚痴も文句もいわず黙々と働いている人は、自分の為に働こうが怠け者の為に働こうが、努力に対する応報に色分けのないことを知っているから、決して怠け心など起こさないので。あの制度の欠陥などは、知恵を絞ればどうにでも解決できる問題です。」

「しかし、すべての人に行き渡るだけの物の確保ができるでしょうか？」

「今日世界の特定地域で物不足が起こっているのは、国の経済政策の失敗か政治的混乱が原因です。もし

何百万何千万という軍人を、あるいは売るため儲けるために動いている人たち（非製造労働者）を、生産過程に有効につき込むことができたなら、そして今日の工業技術を持って円滑に生産活動が行われたら、この地球は物で溢れかえるでしょう。」

「でも、高価な品物、自己顕示欲をくすぐる品物、流行品、あるいは美味な食料品などに人気が集まり、常時不足する品物が出てこないでしょうか？ またその逆も考えられると思いませんか？」

「全く無いとはいえないでしょう。しかし、消費統計や生活アンケート調査を進めるにしたがい、人々の趣向も把握でき、極端な品不足や余剰品のこと、なくなっていくでしょう。今日でも美味な食べ物に落とし穴があるのは知られておりますが、今後その正体はつきりするにつれ、グルメ狂といわれる、美食家や大食家は減っていくでしょう。これは単に食べ物だけの話でないことも、人は知るようになるでしょう。」

「しかし食物には腹一杯があっても、着るものや身を飾るもの、あるいは電化製品や家具調度品といったものには腹一杯はありません。自制心のある大人といえども欲に誘われ、沢山持ち帰るのではないのでしょうか？ また自製のきかない子供たちは、きっと好きなように持ち帰ってしまうでしょう。」

「たしかに、人の欲望を制御することは難しいかも知れません。でも奉仕社会は、あえてそれに挑戦するのです。奉仕社会は、完璧なほど自由を重んじます。それだけに自由には、対等の責任がのし掛かってきま

す。当然責任のとれない子供たちは、自由の行使は制限されるでしょう。つまり、必要な物は親が与え、子供たちに自由取得を許さないのです。今でも子供に渡す小遣いは、成長の度合いによって親が調整しているはずで、それがなされない子供は、どうしても曲がった道に足を踏み入れてしまう。だから奉仕世界では、親と社会が一体となって子供たちを見守るのです。」

「では取得が許されるのは、大人になってからですか？」

「十五歳以上になれば許されて良いでしょうが、これも我が子の成長度を見て親が決めるべきでしょう。これは大人であっても、同じ考えをもって対処すべきでしょう。(責任能力の欠落している大人たち)とはいえないこの世界の人たちは、“贅沢は敵”が身に染みているし、“欲望の正体”も知っているのです、決して無謀な取得には走らないのです。要するに、無謀な取得は人の心を腐らせ、環境にも悪影響を与え、しいては自分の労働にも負担を掛けるということをよく知っているのです。」

「でも中には、物欲に誘われ無用な消費に走る人も出てくるのではないのでしょうか？ そんな人たちの罰則などは用意されているのでしょうか？」

「奉仕世界には罰則も罰する人もいません。だが一番厳しい良心という法の番人がおり、行為に対する応報(原因と結果の法則)という処罰があります。この世界の人々はそれを何よりも恐れるから、無謀なふる

まはしないのです。」

「でも人の良心をあてにして、本当に社会の秩序が保たれましょうか？ それは理想ではありますが、現実とは程遠い考えだと思います。」

「もっとも、今日のような貨幣本位制の中でやれといっても無理でしょうが、欲の空回りする社会なら、きつと現実味をおびてくるはずです。」

「欲の空回りする社会？」

「貨幣も私有財産もない世界では、欲を起こしても空回りするしかないから、その欲はきつと良い方向に、悪に強きは善にも強し」ということになって、良きものは一層、良きように展開していくのです。

人の心は元々善ですから、良い制度の中では善が光り輝くしかありません。人の心はそう見捨てたものではありません。」

老人は確信に満ちた笑みを漏らしたが、本当に人の心は見捨てたものでないのだろうか？ たしかに、人類史上このような制度を取り入れたことはなかった。だからやってみる価値はあるかもしれないが、しかし？・・・。

「先程もいったように、この制度の発想の原点は人の心を信じ敬うところから出発しています。したがっ

てこの世界の人たちは、人を信じ自分を信じています。そんな人たちが、常識外れの物を取得するはずはないし、無謀な消費に走るはずありません。あなたが私の話を信じられないのは、私の世界に今の醜い世界をダブらせて見るからです。」

「ご老人は人の心は善だといいますが、今の世界を見ると、どこにその善が見えるでしょうか？ 他人を陥れてでも欲望を満たしたい。ライバルの不幸を見てはひそかに喝采を送っている。他人の不幸を楽しみの種にしている。そのような人の多い社会に、仏心をあてにする制度を導入しようなど無謀ではないでしょうか？ また成功するとも思えませんか？」

「しかし、他の星の理想世界も一夜にしてなったわけではありません。地球と同じ醜い世界から徐々に脱皮し完成されたのです。」

地球においても、理想の壁を乗り越える苦難の日々は続くでしょうが、今もいったように、人の心はそう見捨てたものではありません。磁石が北を指すように、制度さえ整えばきつとまともな向きを示すようになるでしょう。労働本位制の真価を知れば、どんな人だっためのり込む世界なのです。」

⑥ 奉仕社会における労働意識

「その奉仕労働ですが、誰もが希望の職業に就けるのでしょうか？」

「いくら自由であっても、自由のぶつかり合いがあつては混乱します。だから、自由をより自由にするルールは必要でしょう。」

「やはりルールはあるのですかね？」

「無論あります。もしまったくないとすれば、それは自由世界とはいえないでしょう。好き勝手な生き方は、信号のない交差点を暴走するようなもので危険極まりありません。キッチリしたルールが必要なのは、宇宙の様相を見てもわかるとういものです。ただ、今日の世界と奉仕世界のルールの相違点は、強制力を与えるのはあなた自身であるという点です。」

「それでは、就職はどのように行われるのでしょうか？ 就職試験のようなものがあるのでしょうか？ また、どこまで自分の希望が適うのでしょうか？」

今日の世界では、生活の為に厭な職業でも就かねばならないが、奉仕社会でも同じなのだろうか？

「この世界の労働に対する基本的考えは、自分のできる仕事を無償提供することです、自分好みの仕事場で好き勝手に働いて良いというものではありません。」

奉仕国家には何万もの労働機構が存在しますが、病人や怪我人、あるいは一定の年齢層を除いたすべての国民は、その労働機構のどこかに所属し働くことになっています。当然そこには、現業系労働者、技術系労働者、事務系労働者、研究開発系労働者、管理職系労働者など、その職種の適人者たちがそれぞれの職場で活躍することになるわけですが、その適職を決定するのはやはりその人の能力です。能力を見極めるためには、やはりペーパー試験や実地試験などの適性試験は必要でしょう。」

「それでは、志望しても適わない人が出てくるのですかね？」

「それはどんな社会でも同じでしょう。能力を無視して就業させたら、他人に迷惑をかけるばかりか事故にもつながりかねません。その意味では、職業選択は今以上に厳しくなるかもしれません。」

「それでは、三K(きつい、汚い、危険)の職種には誰も就きたがらないのではないのでしょうか？」

「どんな時代でも、楽な仕事、奇麗な仕事、華やかな仕事に就きたいのは人情でしょう。だからといって、みんなが三Kを嫌っていたのではこの社会は成り立ちません。」

「ではどうするのですか？ 今日試験地獄も、突き詰めればここに起因しているはず。一流大学を目指すのも、良い職業に就きたいため、良い会社に入りたいためなのです。」

「先程もいったように、奉仕世界は完全能力主義の社会ですから、ここでも就職競争は避けられないでし

よう。どうしても希望を通したいなら、人より努力して勝ち取る以外ないでしょう。これはどんな世界であっても同じことです。そこで希望が適わなかった者は、第二、第三の希望職種に切り替え再挑戦しなければならぬわけですが、この世界ではその舞台が何度も用意され、しかも公明正大に行われますから、希望に燃える若者の力量を存分に試すことができるのです。こうしてトコトン納得するまで就職活動が行われ、次第に労働力の均衡が図られるのです。」

「働かなくても生活に困らない、就労も自由、そんな社会で、果たして厭な仕事に就く人がいるでしょうか？」

仕事をせず、のんきに暮らす人が必ず出てくる。いや、そういう人たちがばかりになってしまいかも知れない。

「あなたならどうしますかな？ 仕事が厭だからといって、何もしないで遊んで暮らしますかな？」

「さあ？ 私は三日も休むと落ち着かなくなってくる方ですから、とても遊んでなどいられないでしょうが、中にはこれ幸いとばかり遊んで暮らす人も出てくるのではないのでしょうか？」

「そうですね？ 人は短期間なら遊んでいられますが、一生となると、苦痛になるものです。人間は遊んでいられないようにできているのです。特に、小さな時から人間の本性と人生の目的を教育された

者には、遊ぶ暮らしは拷問にも匹敵する苦痛でしょう。」

「しかし、地を這う劣悪な環境で働いている人たちは、みな生活に追われ仕方なしにやっているのです。もし働かないですむなら、誰が厭な仕事に就くでしょうか？」

「今日の技術革新は、労働時間を短縮し力仕事や汚れ仕事あるいは危険な仕事を機械に振り向け、人間を三Kから解放しつつありますが、今後それはますます進み、近い将来デスクワークと変わらぬ職場を提供するようになるでしょう。現在でも金に糸目をつけなければ、どんな劣悪な仕事場もオフィス並に変えられるといわれますが、奉仕世界はそういった下の方から解決されるのです。その時三Kは過去のものとなり、どんな仕事も喜んで就けるようになるでしょう。」

「しかし、どんなに職場の環境が改善されても、やはり厭な仕事には就きたくないものです。そうなると、社会機能に支障が生じてくると思うのですが？」

「この世界が浸透するにつれ、汚れ仕事に自ら飛び込んで人格を磨こうという人たちが増えてきますので、そのような心配はいらないと思いますが、創成当時にはやはり何らかの手を打つ必要はあるかもしれません。そこで、＂若いときの苦勞は買ってでもせよ！＂という格言を取り入れ、学校出たての若者を三年間厳しい労働環境に駆り立てるのです。つまり、徴兵制のようなものですね。徴兵制は人殺しの勉強をするわけです

が、ここでは厳しい仕事を通して人格を磨く道場にするわけです。三年くらいなら我慢できるでしょうから、これはある程度強制的でもかまわないでしょう。」

「繰り返しになりますが、働かないでも生活できる世の中で、本当に厭な仕事に就く人がいるのでしょうか？」

「人は働かないでいられないようにできています。たとえ一生遊んで暮らそうと心に決めた人でも、月日の経つうちに良心に急ぎ立てられ、きっと働きに出るようになるでしょう。」

「たとえ仕事に就いても、厭な仕事に情熱が傾けられるでしょうか？」

「あなたは、今の仕事に情熱を傾けておりますかな？」

「えっ！ そういわれれば耳が痛いですが、自分なりに一生懸命やっているつもりです。」

「今日就労は、安穏な生活を送るための手段になっていますが、奉仕世界ではそんな安っぽい目的は、これっぽっちもないのです。彼らは労働を通じ、職場の人間関係を通じ、己の人格を磨き同時に社会に貢献しようと懸命です。」

「でも今の地球において、それは夢物語りにしか過ぎません。私には、どうしてもすべての人たちが働きにでるとは思えないのですか？」

「人間というものは不思議な生き物で、はっきりと目的が示されれば損得を度外視した行動を取るもので

す。特に与えられた責任が社会的なものであればあるほど、立派にやり通そうとする気概を持つものです。いや社会的責任だけでなく、どんな小さな責任であろうと与えられたと感じたら、なぜか義侠心的なものが沸き上がってきてジツとしていられなくなるものです。消防士が危険を顧みず火の中に飛び込むのも、警察官が凶悪犯に立ち向かうのも、これみな責任感からでた義侠心の現れです。もしあなたの労働が、社会のためになくはならないものだとはだされたなら、果たしてノンビリと遊んでいられるでしょうか？ それも小さな時より人間の本性を教育された者ならば、とても遊んでなどいられないでしょう。」

「しつこいようですが、世に刃向かう者は必ずいるものです。そんな人たちにはどう対処するのでしょうか？」

私はしつこいほど食いがった。「怠け者のいない世界」など、私の頭では描けなかったのである。

「あなたはとも、今の資本主義社会の厳しい労働条件を念頭に心配しているようですが、この世界の労働はスポーツでもやるくらい気楽な気持ちで就くことができるのですよ。勿論、厳しさがなければありません。でもその厳しさも、ときめきの厳しさ、希望の厳しさ、喜びの厳しさなのです。やる時には徹底してやりますから、労働時間が今より多くなる場合もあるかもしれませんが、時間的拘束があるわけではありません。(職種によってはある程度の時間的拘束は必要)普通労働時間は、三、四時間、もちろん週休二日

制は常識です(初期の理想世界)。それでも遊んで暮らしたいと思うなら、そんな人は放っておいたら宜しいではありませんか。何も強制してまで働いて貰わなくてよいのです。」

「なぜ強制しないのですか？」

「人類史における不幸の大半は、労働が不当に扱われたところにあつたのです。奴隷制度、封建制度、共産主義制度、資本主義制度、これみなそうです。したがって、そのような過ちを二度と犯してはならないという戒めから、奉仕世界では就労する、しないは本人の自由意志に任せるべきとしたのです。もし、働かざるもの食うべからず」の大原則を貫こうとすれば、次のような矛盾が必ず生まれるでしょう。

怪我人や病人の就労免除は、どんな世界においても同じでしょうから、もしこの大原則を貫こうとすれば、真の病人を職場へ追いやる過ちや、病状判断の難しさから回復した者まで遊ばせる間違いを犯すでしょう。また厭がる者を強制労働させるとなると、人権問題にもなりかねません。それこそ、奉仕世界の基本理念を揺るがすことになります。だから、働く、働かないは、本人の自由意志に任せるべきとしたのです。

今日社会秩序がまがりなりにも守られているのは、国家権力を前提にした法の秩序があるからでしょうが、その法の乱用や誤用によってどれほどの人たちが間違つた裁きを受け、どれほどの人たちが人権侵害をうけていることでしょうか。人間は間違いを犯します。そんな人間が、どうして人を裁きましょうか？ 人は人を

裁けません。裁けるのはその人自身だけです。つまり、良心だけが人を裁けるのです。」

「それでは、怠け者や不正を働いた者を野放しにせよとおっしゃるのですか？ それで社会の秩序は保たれましようか？」

そんなことを許したら社会は荒れ放題、この世は悪者の天国になってしまうだろう。私は老人のいうことが納得できなかった。

「あなたは今の社会像をそのまま私の社会に重ねるから、そういった意見が出てくるのです。もし貨幣が存在せず、物の生産が潤沢に行われ、収得が自由で、人間の本性を知らされた社会なら、そのような意見は出てこないはずですよ。たしかに、今の社会から一足飛びという分けにはいきません。でも奉仕世界の器作りが進み、真の教育が浸透してゆけば、必ずそのような社会になるはずですよ。子供のころから人間の本性と人生の目的を教え込まれた者が、悪いことをするはずは無いし、怠け心を起こすはずも無いのです。あなたが人間性悪説を頭から離せないのは、今の濁世にドリと浸かっているからです。」

⑦ 競争は必要か？

しかし、奉仕経済の柱となっているのは計画経済だろうから、競い合うことが少なくなるだろう。そんな

世界に進歩はあるのだろうか？ そんな疑問がふと私の脳裏をかすめた。

「それでは競合のない社会で、人間は一体何を目標に努力すればよいのでしょうか？」
私は、ここぞとばかりに突いた。

「努力する目標がない？」

「平等で格差がなく、生活に困らない社会で、もし職種や職階にこだわらない生き方をするのであれば、あとの目標が残るでしょうか？ そこに何の奮起が期待できるのでしょうか？」

「あなたには家族はありませんかな？ 子供はいませんか？ 人生の目標はありませんかな？ 国民としての責務を感じませんか？ 人類としての大義を感じませんか？」

「はあ・・・？」

「夫婦仲よく手を取りあい子供を立派に養育する。人格を極め負わされた使命をまっとうする。人のため社会のために働く。理想世界を築き人類の進化を押し上げる。そんな崇高な目標があるではありませんか？ 今の私たちの目標は、そんな崇高なものですかな？ あなたが考えている競合とは、利己心を満足させる貧しいものではないのですかな？」

「・・・」

「人間同士の競合なんて安っぽいものです。あなたが本当に競わなければならぬ相手は、あなた自身ではないだろうか。つまり、あなたの心です。その心は、この世のどんな相手よりも手ごわいのですぞ?」

「でも、目に見えない心を相手にするより、目に見える人と競い合う方が手っ取り早いのではないのでしょうか。その意味では、資本主義世界はそれを適えてくれる格好のシステムだと思えます。その点奉仕世界は、社会主義世界のように計画経済が基調のようですから、どうしても競い合いが少なくなると思えます。そんな社会では、個人の特性は社会の中に埋没してしまい、画一的なロボット人間ばかり出来てしまうように思います。事実社会主義世界が崩壊したのは、この人間味のない計画経済が原因ときいております。」

「ちょっと待ちなされ、社会主義が崩壊したのは、人の心を無視した唯物主義がもたらしたもので、決して計画経済が原因ではありませんぞ!」

「ご老人の提唱する世界は、配分の違いや貨幣が存在しない違いはあっても、その根底をなしているのは計画経済と無競争システムではないでしょうか? 社会主義が崩壊したのは、計画経済と無競争がもたらした労働意欲の減退にあったはずですよ。品質においても、性能においても、生産性においても、西側諸国とは比べようのない劣悪さです。またオリジナリティーが無視された画一的品々は、人間の精神的個性まで失わせています。」

「勘違いしては困ります。配分の技術的未熟はあったにしても、社会主義が崩壊した真の原因は、人の心を無視した、まったく物でしか存在価値を認めない唯物主義（スターリン型社会主義）がもたらしたのです。彼らは公平な配分を口にしながら、自由を無視した不公平極まりない社会を作ってしまった。強大な権力を傘にきた官僚制度は、人民から夢と希望を奪い、そこに蔓延した、わいろ、ごまかし、追従、盲従、怠惰や日和見主義が、社会主義を崩壊へと追いやったのです。

あなたはオリジナリティーがなくなり、画一的なロボット人間ばかり出来てしまうと心配するが、私にいわせると、奉仕世界こそ個人の特性を最大限に生かしながら、なおかつ創意工夫の発揮できる世界だと断言できる。本来企業家や労働者は、いかなる時も“人の為に”“社会の為に”尽くす気高い目標をもっていないければならない。なのに企業家は、儲けることを最大の目的としている。労働者にしても、人より多くの報酬を得たい！ 物質的豊かさを謳歌したい！ 職場での地位を上げたい！ といった至って貧しい目的です。社会主義に至ってはどうでも良い、ただその日を無事にすごせたら良い、といったマンネリズム的墮落精神です。それでは社会が良くなるはずがない。

奉仕社会の第一義は、人のため生きとし生けるもののために人々が手をつなぎ、下から盛り上げていくことです。したがって奉仕社会では、各人の自主的行動に期待が委ねられ、特色ある労働成果が期待できるの

です。たしかに生産量などの枠決めはあるにしても、その内容はより高質性が要求され、より良い品作りの研究は寸暇をおしんで行われるでしょう。ましてや単純労働ともなると、その単純さの中により一層の味つけと飾りつけがなされ、マンネリ化の打破と労働意欲の増進が図られるでしょう。なぜそう断言できるかといえば、時間の余裕と恵まれた職場環境の下で、売上増強も利益追求もいらぬ労働者のめざすものはただ一点、品質の向上にあるからです。“職人馬鹿”という言葉がありますが、良い意味でそれが発揮されるのです。こうなると労働者は、技術の改善や品質の向上に全力をかたむけられるし、技術者や科学者も、人類の崇高な目標を目指して研究にうち込めましょう。また医者も教育者も政治家も、純粋に国民の幸せを願って献身できるでしょう。”

「でもご老人は先程、“利便や快適は人を墮落させる敵である”とおっしゃったではありませんか。なのになぜ、品質の向上が必要なのでしょうか？」

「私は単に五感をくすぐるもの、好奇心をそそるもの、そんな不真面目なところに技術革新を使ってほしくないといったのであって、品質の向上を図るなどはいっておりませんぞ。『質の追及』は人生の目的とも一致するのですから、大いにやったらよろしいのです。”

「質の追及とは、具体的にどのようなことでしょうか？」

「今日の経済でタブーとされている完全品を作ること、これを質の追及といっているのです。たとえば、一生使える鉛筆とか、壊れにくい電化製品とか、破れにくい衣類といった質の追及ですね。この種の追及も大いに意味ありますが、質追求の本当の目的は物質を征服することにあるのです。たとえば、永遠のエネルギーをくみ取ったり、次元の扉を叩いたり、時間と空間を征服するといったもの、あるいは、幸せ・感動・安らぎ・美といった絶対的価値をつかみ取ることです。」

しかし、自分との戦いだけで人間は本当に成長できるだろうか？ スポーツをはじめあらゆる技術の向上は、競い合いの中でこそ成し遂げられるはず。今の社会はまさにそうだから、著しい進歩を遂げてこられたのではないだろうか？ たしかに、試験地獄や企業摩擦などの弊害もあったが、それがあつたればこそ人は勉学に励み、企業は努力し、国家は奮励し、発展してこられたはず。生ぬるい湯の中で、人は本当に成長できるだろうか？ 私は首を傾げないわけにはいかなかった。

「あなたのいい分だと、“戦争が科学を発達させた”という理屈と同じになりますぞ！」

「えっ！」

またまた心を読まれた驚きに、私はドギマギした。

「たしかに競い合いによる成長は、この世界ではある時期必要じゃろう。あなたがいうように、これまで

競争社会が人や国を成長させたかもしれないが、いつまでもそのような他力に頼ってはいけません。人の成長というものは、ある時期を過ぎれば内的なもの、つまり、自分の心を競合相手としなければならぬからです。人間は自らに甘い、だから規則をつくって、監視人をおいて、強制的にしたがわせようとする。法律や社則などはその代表的なものでしょうが、これを頼りにしている限り、人の進歩は、たかがしれています。競争し合わなくても、規則で尻を叩かれなくても、自らの意志によって自らを律し、発展的行動につなげてこそ本物の大人といえるのです。他人の目を気にし、規則だからしかたなくやる姿勢では、いつまでたっても幼子から脱皮できないじゃろう。

奉仕世界では、規則は申しわけ程度にしかない。律するのは自らの強い意志であり、それを行動につなげるのも自らの意思です。これが本心をもってできた時、自己完成に大きく近づくことができます。これは、人間の本性が理解できれば、分かることなのじゃが……。」

はたまたま老人は、話をそこへ持っていった。

しかし計画経済下では、仕事は自分が作るのではなく上から与えられるのではないだろうか？　そこにどうして、個人の味つけができるだろうか？

「今日のような競合盛んな社会にあっても、仕事は人から与えられるものだと勘違いしている者は、意外

と多いものです。先日知人からこういう話を聞かされました。彼は駅長をしていることもあって、さまざま
な人間像を見せつけられるといっております。駅には沢山の清掃員が派遣されておりますが、その殆どが
中老年の男女だといえます。彼らは、片手にホウキ、片手にチリトリをもって駅構内を清掃していますが、
清掃する先から心ない人たちがタバコの吸い殻を放っていくといえます。それも鼻先でやられるらしいので
すが、彼らは腹もたてずに落としたり吸い殻を黙々とひろっていきます。ひどい者になると、チューインガム
まで吐き捨てていくそうです。あまりにひどいので、彼は注意したそうです。ところが返ってきた草が
またひどい。

“何をいうんだ！俺たちは清掃員に仕事をつくってやっているんだ！有り難がられても文句をいわ
れるいわれはない！”と、・・・。

彼は清掃員に同情して、“困ったものだね、君たちも良く我慢をしているよ”といったところ清掃員は、
“彼らのいう通りですよ、駅が奇麗だったら私たちの仕事は上がったりですからね、ハハハハ”と・・・。
それを聞いた彼は、しばし言葉が出なかったといっていた。そして、何が正義か不正義か分からなくなっ
てきた、とこぼしておりました。

最近いわれることですが、濫費がなければ経済が停滞し失業者が増える、だから濫費や浪費も大切な経済

行為だと・・・。これなども仕事を作ってやっているという屁理屈に通じている考えでしょう。ともあれ私たちの仕事は、決して人から与えられるものではありません。いかにしたら社会に貢献できるか？ 何をしたら人のためになるのか？ といった公役に服す精神で自ら仕事を見つけ出し、それを価値あるものへとつなげなければならぬのです。たとえ与えられた仕事であっても、ただ機械的に消化するのではなく、常に創意と工夫をこらして、新しい発見と喜びを生まなくてはならないでしょう。」

⑧ 経済を意識的にコントロールする

「あなたは、計画経済とか計画社会という言葉を嫌っているようですが、社会を意識的にコントロールすることはとても大切なことなのです。その理由を述べましょう。

私たちは何かプロジェクトを起こす時、まず企画し、立案し、その立案に基づいたプログラムを設定して実施に移ります。また終わった後も、どのような成果が収められたか分析し、将来にそなえ資料を作成します。こうして、企画―立案―実施―結果分析、といった一連の作業を通じて人間社会は進歩していくわけですが、これはすべて意識的に行える、いわゆる能動的なものです。間違いない未来を開拓するには、この意識的ということがとても大切なことなのです。私たちの行動が意識的に行われているように、社会運営も

意識的に行われなくては正しい目標に近づくことはできないでしょう。このことからいえるように、意識的にコントロールできる仕組みこそ、間違いない未来を切り開く唯一の方法なのです。ところがどうでしょう。資本主義は意識的にコントロールできる仕組みじゃろうか？

資本がすべてを支配する世界において労働力は、一つの商品という形を取ります。またそこで生産された物も、一つの商品という形をとります。ここでの商品は、使用価値という側面よりも交換価値という側面を重視されるがゆえに、市場経済独特の運動法則によってその姿が不透明になっていきます。そこに資本家の成算や、労働者の要求や、消費者の欲望が複雑にからみあうと、その姿は一層不透明になっていきます。そのベールをはがすために経済学の研究がなされるわけですが、いかに研究しようともこのつかみどころのない生き物の正体を解明することはできません。現に、インフレ、デフレ、財政赤字、貿易赤字、格差、失業、貧困、などの問題が起こっているのは、人間がこの経済を解明しきれていない証でしょう。もうこの世界での人間関係は、単なる表面上のものにしか過ぎず、損と益・利と害の関係、上(豊かさ)と下(貧しさ)との関係、煎じつめれば、人と貨幣の関係に収斂されていくのです。

その世界は、意識的にコントロールできない世界です。利潤を追及し資本を膨らませ、利潤を追及し資本を膨らませる行為が、必然的法則として社会を縛っていきます。そんなところに正義も道義もありません。

たとえば、資本主義社会において物をつくる動機は儲け以外ありませんから、売れると思われるものはどんな悪的(法律に触れない)なものでもつくられます。今日の商品が好奇心をあおるもの、快適なもの、便利なものが主流となっているのも、こういった利益優先が動機となっているからです。そのために故事伝来の文化が廃れたり、尊ぶべき習慣とか風習といったものが退廃したり、人々の心が毒されるといった弊害が生じているのです。

奉仕社会における計画経済の良いところは、意識的にコントロールできる点にあります。

つまり、

- 一、人々の嗜好の把握が意識的に可能
- 二、生産調節が意識的に可能
- 三、平等な配分が意識的に可能
- 四、労働量の調整が意識的に可能
- 五、物資の流通調整が意識的に可能
- 六、環境調整が意識的に可能

七、資源やエネルギーの調達が意識的に可能

八、労働意欲を堅持させることが意識的に可能

私たちがこの世に生を受けたのは、一重に人格(魂)を磨きこの地上界に理想世界を築くためでした。そのために経済は必要だったのです。ところが、手段であるはずの経済活動に人生の目的が転換してしまい、肝心の人格を磨くといった目的がおろそかになってしまったのです。したがって、優勝劣敗現象・弱肉強食現象といった動物まがいの闘争が展開されるようになり、弱い者が虐げられる不都合が生じてきたのです。瘦せ細った子供たちの死を見る時、なんと人間は罪深いことをしているのだと怒りを感じずにはいられません。この世界に物は溢れているのです。その物が万遍に行き渡らないのは、あくまでも意識的に行えない経済の仕組みにあるのです。

もう一つ計画経済の良いところは、人々の長短期的な指向に報いる万能性をもっているという点です。また途中で方向転換したい場合も、即座にできる自在性をもっているのもこの仕組みの良さでしょう。ただし、何事も意識的にコントロールできる反面、ひとつ間違えば次のような危険性もひそんでおります。

- 一、独善的専制政治の懸念
- 二、労働意欲の減退化
- 三、偽善の蔓延

一は、民主主義さえ成熟すれば克服できる問題でしょうが、二と三は人の心を相手にしなければならぬだけに少々厄介です。しかしこれとて、進化の追隨に人類は必ず克服してしまうでしょう。」

「しかし計画経済というと、どうもソビエト共産主義を思い出しあまり良いイメージがもてないのですか？」

「しかし今日の日本も、自由経済大国といわれながら社会主義的色彩を濃くみせているではありませんか。いわゆる、修正資本主義あるいは社会主義的資本主義といわれるものです。つまり、国家が行政指導という名目でさまざまな制約を設けたり、『経済何ヶ年計画』といった経済方針をうち立て市場経済に方向性を与えているのは、明らかに社会主義的動きだからです。また最近では、私的独占資本の解体によって企業が社会共同体的な形に変わりつつありますが、これも社会主義的といってよいでしょう。つまり所有と経営の分離、経営への自由参加、そして労働組合の経営への参画が、企業を社会共同体的存在におし上げているので

す。このように自由経済を望む中にも、社会秩序を保持する意識の介入が働いているのです。

それではここで、これまで地球上で採用されていた社会主義社会と、私の提唱する奉仕社会との相違点を比べてみることにしましょう。その違いがはつきりするはずです。

「これまで地球上で行われていた社会主義社会」

- ・ 生産手段の公的所有
- ・ 労働力は個人の財産
- ・ 計画生産経済
- ・ 能力と労働量(質と量)に準じた配分
- ・ 貨幣制度あり
- ・ 一党独裁による専制政治
- ・ 人権を無視した不自由な世界
- ・ 官吏と国民の区分けあり
- ・ 国民の目的と使命が不明

- ・ 唯物的教育

〔私の提唱する奉仕世界〕

- ・ 生産手段の公的所有
- ・ 労働力は社会的財産
- ・ 計画消費経済
- ・ 能力と労働量に左右されない平等な配分
- ・ 自由収得制度(貨幣なし)
- ・ 国民主権を根底にした民主政治
- ・ 人権が保障された自由な世界
- ・ すべての国民が官吏
- ・ 国民は目的と使命を悟っている
- ・ 宇宙法を理解させた唯心的教育

一般的に計画経済は、生産性や多様性において資本主義経済より劣るといわれています。たしかに、そうなのかもしれない。しかし、私たちは儲けるため、財を増やすために生れてきたのではないのです。何度も言うように、人格を磨き、この地上に理想世界を築くために生まれてきたのです。その目的の前に、生産性や多様性がどれほどの価値があるのでしょうか？ むしろ質の向上ということになれば、市場経済よりも計画経済の方がはるかにくみしやすいでしょう。人生の目的は人格向上にあり、それは労働に対する熱意や努力や工夫といったものと重なるものだからです。したがって、人生の目的に熱心になればなるほど労働に対する熱意も高まり、それが質の向上をどこまでもおし上げるのです。」

「くどいようですが、どうも指令型社会という不自由を強いられるようで良いイメージがもてないのですが？」

「あなたは大変な誤解をしているようです。この世界は決して指令型社会ではありません。国民主権が尊重され、国民の意向が正しく反映される民主的な社会です。それに本当の自由は、放逸な自由の中にはないのですよ。自由・自由と息巻いているアメリカも、その放逸な自由ゆえに、世界一の犯罪大国といわれているではありませんか。家に鍵をかけ、銃を持ち、自分の財産と命を守らなくてはならない。また都会の裏道は歩いてはならないといわれるほど、危険は身近なものとなってしまいました。世界一治安がいき届いてい

る日本でさえも、最近では深夜にコンビニが襲われる、マンションに強盗が押し入る、銀行が襲われる、住宅街で拳銃が発射される、などの事件も珍しくなくなっていました。これらの治安問題もさりながら、経済問題においては一層深刻でしょう。商取引規制や貿易規制など、いまや規制花盛り時代となっていました。ところが、これも放逸な自由経済なるがゆえの障壁といえるでしょう。どちらも放逸な自由を求めるあまり、かえって不自由を強いられているのです。これは、自由の大棒をきつちりと押さえていないために生じた弊害なのです。これは次のような譬えで表現できますでしょう。

『自由が目覚めた馬(人間)たちは、なにものにも束縛されない自由な放牧地を望みました。そこで彼らは、囲いも柵もない自由な天地を広い原野の中に求めたのです。ところがしばらくすると、あまり放逸な自由を得たゆえに自由のぶつかりあいが生じ、多くの問題が持ち上ってきました。そこで仕方なく彼らは、対処療法的に野原に柵を巡らせ自由の衝突をさけようとしたのですが、次からつきへと問題が持ち上がってきたために、柵はそこらじゅうに張り巡らされるようになり、いまや柵の扉を開けることに多くの労力を費やさねばならないほどになったのです』

このように放逸な自由を望んだ馬たちは、不自由な世界に身を縮めて生きなければならなくなったわけですが、少々不自由でも囲いのある放牧地を望んだなら、その中で大いに自由を謳歌できたことでしょう。』

柵とは、資本主義社会や社会主義社会（法律や規則で縛られた社会）であり、囲いとは、奉仕社会（良心が自らを縛る社会）のことです。

この囲いは、あなたが思っているような不自由な囲いではありません。民主主義も行き届き、人権も大いに守られ、教育の自由も、労働の自由も、居住の自由も、取得の自由も、何もかも資本主義社会より自由な世界です。ただひとつ不自由に見えるのであれば、経済の営みが意識的に行われている点だけでしょう。しかしこれだって、慣れてしまえばそう堅苦しいものではないのです。またこの社会は、労働者イコール官吏イコール国民イコール主権者ですから、問題提議は下からなされ、それがまた下によって試行されるといった自由があります。それだけに国民一人ひとりの意向が反映されやすく、それが均整のとれた社会繁栄を約束するので。

さてここまで、奉仕世界の柱といふべき奉仕経済について語ってきました。実にユニークな経済システムだと思われるかもしれませんが、経済とは本来このように、人が意識的にコントロールできる簡素なものでなくてはならないのです。いや経済ばかりではない、あらゆる仕組みは簡素簡潔でなければなりません。

なぜ人は複雑多様を好むのでしょうか？世の中が複雑怪奇になればなるほど、混迷の度は深まっていく、これは歴史が証明するところです。いってみれば今日の社会は、機械時計のようなものです。たしかに見掛

けは頑丈そうにみえますが、一旦故障すると手に負えません。あちらを取り替え、こちらを付け足し、しまには何がなんだか分からなくなり、バラバラに解体しなければなりません。

その点、奉仕社会は日時計です。少々辛抱はありますが、日時計は故障がありませんから安心です。単純明快、矛盾なし。これが奉仕社会の誇りなのです。ではなぜ多様化は悪なのでしょうか？ それは、利害得失の絡みが多様化をもたらすからです。言い換えれば、欲望が多様性を助長するのです。近年多様性がもてはやされておりますが、これは人の迷いの深まりを意味し、決して喜ぶべきことではないのです。

社会は経済の背に乗って進展して行くといわれますが、もし奉仕経済が導入されたら、政治や教育や福祉などの社会制度はどう変わって行くか？ 次に考えてみることにしましょう。」

(2) 奉仕国家

一、国家の形態

「今日の地方自治体の最小単位が村なのに対して、奉仕国家の最小単位は人口数十万人を抱える都市です。(人口が少ない場合は村国家・村社会になる)これを都市国家と称しますが、この都市国家の特色はそれ自体が一つの国であり、独自の憲政を保ち、独自の行政形態を持っている点です。そしてそこでは、自力の供給を原則とした自給自足体制が整えられ、地方色豊かな独特の生活基盤が築かれています。」

今日地方政治は、中央が地方の実情にあわない政策を強引に押し進める形で行われていますが、奉仕世界はその土地の気候風土や人の気質や特性といったものを尊重し、それに即した地方自治が行えるようあらゆる権限を都市国家に委譲してあるのです。」

「それは、立法、司法、行政、の三権を持ちあわせた独立国家を意味するのでしょうか？」

「有機的細胞国家とも呼んだらよいでしょうか。」

「有機的細胞国家？」

「つまり、都市国家群と国家（中央国家）の関係は相即的な関係となり、都市国家群同士は網状の神経を伸ばして堅く手をつなぎあう、いわゆる兄弟姉妹の関係にあります。中央国家はその中心にあつてしっかりと情報の手綱を握り、都市国家群を率いているのです。これを人体に例えれば、頭脳は中央政府であり、都市国家群は諸器官と見立てることができるでしょう。

諸器官は色々な気質や特性を持っており、その特性の上に独自の生活機能を維持しています。爪は爪としての気質を、毛は毛としての特質を、皮膚は皮膚としての特性を發揮し、体全体の健康維持に寄与しているのです。つまり、爪は爪の主権の下にその地域の実情にあつた働きをし、毛は毛の主権を持って独自の働きをしているから地域の秩序が保たれ、また体全体の健全な営みも可能なのです。もし中央国家がすべての指令を出そうものなら、それこそ地方の実情に合わない強引な働きを強いることになり、必ずや局所的病を引き起こすでしょう。そうなれば、いずれ体全体も病気になるでしょう。」

「では、今日の都道府県という単位はなくなるのですか？」

「さよう、都市国家（村国家）が国の最小単位となるのです。この方が国民の意向をまとめやすいでしょう。」

「でも地方が大切だからといって、地方の思うがままに政治を任せておいたのでは、国全体の秩序は保てないのではないのでしょうか？」

「もちろん、脳(中央国家)は脳としての大切な役目はあります。たとえば、都市国家の正しい行動規範を定めること、すなわち、

・ 国法の制定

・ エネルギーの適性開発・適正生産・適正配分・適正消費の規範を定める

・ 基本的な労働規範・社会規範・生活規範を定める

・ 基本的な教育方針を定める

などが脳(中央国家)の主な役目です。

ガン細胞の異常増殖は、地方が中央に対して起こす反逆行為のようなものですが、これとて脳(中央)が地方の実情を理解し思いやりある政治を行ったなら、決して起こることではないでしょう。ガン細胞の異常増殖は地方を破壊し、結局中央の命まで奪ってしまうわけですから、中央と地方の関係は相身互いの関係、運命共同体の関係にあるといえるでしょう。要するに庶民生活に直接影響を与えるのは、中央政府ではなく地方政府だということです。インフラにしても、地域開発問題にしても、エネルギーや環境問題にしても、直

接影響を受けるのは地域住民であり、それを処理してやれるのも地方政府なのです。特に多民族国家は、宗教や、慣習や、考え方や、文化などが違うわけですから、それを一つの枠に押し込めればどうしても反発が起ころ。」

「それではご老人は、民族ごとに国家を作れとおっしゃるのですか？」

「そうではありません。中心核がなくてはバラバラになるから国家は絶対必要ですが、あまり中央の権限を大きくすると、地方の特色が失われかねないばかりか、住民の創意工夫といったものや自立精神まで骨抜きにしかねない。だからできるだけ権限を地方に移譲し、自由な政策が立てられるようにすべきだといっているのです。そうすれば地方に活気をもたらずばかりでなく、国家もスマートな体型を維持できるでしょう。」

そもそも愛国心とは、自分が直接所属する身近な団体、つまり、村・町・都市、といった地域を愛するところから生まれたもので、最初から国家に思いを寄せたものではなかったはず。祭りひとつ取ってみても、自分が直接参加できる町内祭りは一緒に楽しむことができるが、国家的祭りはどうも他人事になってしまう。これは、距離的隔たりが大きいからです。ですから住民の政治向心力を地方都市域までと捕らえ、ここに政治の中心軸を据えるべきなのです。地方独自の文化も、そういった中から必ず育まれるでしょう。『地方分権政治』これはもう時代の要請なのです。

二、都市国家の使命

そもそも奉仕世界における都市国家は、『都市市民の生活は都市市民自らの手によって守り、できるだけ中央国家の手を煩わさないようにする』といった前国家的発想から生まれたものです。したがって、そこに独立国家としての固有の権能を持った政治形態を求めるようになるのは当然でしょう。つまり地方という諸器官の正常な機能維持には、地方の実情にあった政治が行われるべきであり、それは国家の安定にも寄与するものであるから、できるだけ地方の働きを萎縮させない配慮が必要としたところから、国が持っていた許認可権限や事務権限をすべて地方に委譲し、更に立法権（人類基本法あるいは国法に抵触しない範囲で）も委譲して独立国家としての権能を高めたわけです。こうして見ると、どうも国家の権威が失墜したように見えますが、地方の政治が円滑に行われ地域の人が幸せになればそれが国家の権威ともなるのですから、都市国家を準国家的存在として認めるのは、何も国家の品格や権威を失墜させたことにはならないのです。

その都市国家の役目を要約すると、次のようなものになるでしょう。

- ① 奉仕議員を国会に送り、中央国家の体系を固める。
- ② 都市国家の融和を国の内外へ結ぶ。
- ③ 正しい情報の提供により、国民の意思・社会の意思・国家の意思の統一を図る。
- ④ 都市国家間の融和・協調・相互扶助を図り、相互の生活基盤を確かなものとする。
- ⑤ 国際協力を通して人和の輪を広げる。
- ⑥ 国民の奉仕労働力を有意義に活用し、有機的な都市生活機能を完成させる。
- ⑦ 徳育を通して人心を輝かせ、法教育によって人格を向上させる。
- ⑧ 文化交流の促進を図り、特色ある風土の上に理想の文明を築きあげる。
- ⑨ 自然の循環機能に即したエネルギーの安定供給を図り、自然との共生を確かなものにする。
- ⑩ 徹底した環境保護を行い、地球生命の大意に報いる。
- ⑪ 法科学の振興を図り、人類悲願の使命を達成する。
- ⑫ 福利の増進を図り、人生修行道に明りを灯す。
- ⑬ ほど良い娯楽を提供し、家に、街に、国に、地球に、笑いの声を響かせる。

人間は一人で生きられないようにできています。これは、一人で人格を磨くことは不可能との配慮から、神は人間を肉体的にか弱くつくられ、集団で生活するよう仕向けたからです。人間社会はこのように、必然的用途によって生まれたわけですが、その人格を磨く舞台を奉仕世界では、都市国家という形で実現したわけです。人類の目的がはっきりしている以上、都市国家の役目もそれに沿うのは当然で、それが前述した役目です。もちろん各都市国家の特色が、この役目の中に盛り込まれるべきですから、ここで述べた役目はあくまでも標準的な目標と想ってもらいたい。

都市国家の特色といえば、これは非常に深い意味合いが込められています。つまり都市国家の色、匂い、肌触り、これが人々を引きつけ引き離す要因となるからです。したがってその住民たちの色、匂い、肌触りも、必然的に似通ったものになるのは避けられませんまい。（類は類を呼ぶ法則により）こうして都市国家は特色ある様態を育むこととなり、それがまた住民の転入転出にも微妙な変化をもたらすのです。」

三、都市国民の資格

「それではここで、国民の資格について述べましょう。

新生児が誕生し、届がなされた時点で、都市国民としての資格が与えられるのはいうまでもありません。また国民が他の都市から他の都市へ転入転出する場合も、正式な申し込みがなされれば何ら問題はありません。外国への移住も外国からの移住も同様です。ただしこの場合、正式国民としてあるいは正式都市国民として認められるには、原則として何等かの職業に就いていなくてはなりません。

この制度の趣旨は、どの国にもどこの都市にも所属しない無籍者や無国籍者を存在させてはならないという配慮から、全世界共通の決まりとしたのです。よって現在のように、流民や浮浪者あるいは戸籍上の不明者は全く存在しなくなります。」

「蒸し返して申し訳ありませんが、国民の中には浮浪者となって自由に食べ物を手に入れ、自由に生活する者も出てくるのではないのでしょうか？」

「等しく教育の機会が与えられ、等しく家が与えられ、等しく生活必需品が与えられるのに、それを放棄してまで浮浪者になる者がおるだろうか？」

「では、気候のよい国、環境のよい国に人が集まるといって、居住地の偏りは起こらないでしょうか？」

「今日の難民移民問題は、生活不安から止むに止まれず起こっている経済難民が殆どです。誰が故郷を捨てたいと思うでしょうか？ 誰が国を離れたいと思うでしょうか？ 盆や正月にあの混雑をおして故郷に帰るのも、死んだら骨を故郷の地に埋めて欲しいと願うのも、やはり生誕の地が恋しいからです。故郷というものは、それほど人の心を掴んで離さないものなのです。奉仕世界が浸透し生活が安定した暁には、旅行はともかく、国を離れようと思う者はまずいなくなるでしょう。先程もいったように、肌にあった故郷というものは、何物にも代えがたい宝ものなのです。色、匂い、肌触り、この慣れ親しんだ波動から、どうして逃げ出したいと思うでしょうか？」

四、奉仕国家の政治

「政治とは何でしょうか？」 『政』とは『国を治めること、あるいはまつりごと』、と辞典に載っておりませんが、『政』とは、“整”なのです。人心を整え、物を整え、環境を整えることです。『治』とは、自然を生かし上手に活用してゆくことです。昔から“治山”“治水”は国を治める不可欠な要素といわれてきました。だが正にその通りで、人間が自然と共存共生できたら豊穡はもとより、彼らから有意義な生き方を教わるでしょう。したがって『政治』とは、人心を整え、物を整え、自然と相和し、住み良い社会環境と自然環境を調えることなのです。

さてそのような政治を望む中で、奉仕国家は都市国家という独特の政治形態を作り上げました。先程も説明したように奉仕国家の特色は、中央集権の色合いを排除し、地方重視の政治を採用していますから、中央国家は都市国家を裏支えする脇役に徹し、主役は都市国家が演じることとなります。とはいっても、行き過ぎがあつてはならないので、中央国家は情報の手綱を後方で握り、いざというとき伝家の宝刀が抜けるよう監視に怠りがあつてはなりません。また都市国家は、都市国家間同士の協力なしに成り立ちませんから、相互の交流が頻繁かつ多岐に渡って行われるでしょう。もちろんこれは国内に止どまらず、世界のあらゆる都

市国家間においても、姉妹提携、情報交換、技術協力、人的交流、労働協力といった独自のつながりを保つことになるでしょう。」

「自律した民主主義」

「“生産手段は、権力を集中させることによってしか生み出せない”との世迷い言は、人類の歴史がつくった幻想です。生産手段などは、奉仕精神さえあればどこからでも引き出せるし、どうにでも生み出せるものだからです。もっとも人それぞれの欲求は様々ですから、どれだけの生産手段をどの生産部門にどれだけ配分し、そこにつき込む資源をどこからどれだけ調達し、どのような物をどれだけ生産し、どのように配分するかといった意志決定者は必要でしょうから、その存在は否定しませんが、それは資本家や権力者でなくとも良いはずなのです。民主的に選び出された指導者の下に行政機構を作り、皆が納得できる生産や配分はいくらでもできるはずだからです。」

『人類が発見した最大の功業は民主主義制度である』といわれるように、平和を目指す人類にとってなくてはならないものが民主主義制度でしょう。特に奉仕世界においては、民主主義の熟成度はどんな世界よりも要求されるでしょう。なぜなら、人を動かすのは権力でも武力でも金力でもない、国民一人ひとりの良心

だからです。その民主主義も、今日の民主主義とは少々違ってきます。今日の民主主義は主権が国民にあるというだけで、その内実を人の心に求めていません。つまり、外圧(規則あるいは利害や損得)に依存しているのです。しかし奉仕世界の民主主義は、内圧(良心)を母体に行っています。この違いは天と地の差があるでしょう。

さて、都市国家を基盤とする国体においては、市民一人ひとりの政治に対する関心は高くならざるを得ないでしょう。なぜなら、完全なる地方分権制度が導入された都市国家においては、その組織自体が一つの国家としての役割を果たすからです。したがって、都市国家の政治動向が直接市民生活に影響を及ぼすという切迫感と緊張感が、市民に政治参加の重要性を認識させるのです。熟成した民主主義が国民の手に掌握され、かつ血の通った奉仕経済が駆動力となれば、もうそこに何の不安も不都合も生まれません。

ただひとつ弱点があるとすれば、人々の良心が何らかによって毒され、民主主義が大きく歪められた時でしょう。しかしそれさえも、成熟した労働本位制の下では一時の現象であり、はやり病が治るがごとくすぐに正常化してしまうでしょう・・・。

さて民主主義が正しく運用されるには、やはり主権者である国民自らが政治の最終決定権を持つことが大切でしょう。その主権行使の場はやはり選挙です。したがって選挙は、国家の死命を決する重大行事となり

ましよう。

都市国家議会は都市国民が選んだ奉仕議員によって運営されますが、都市行政は都市国民が直接選んだ都市国政総理大臣(都長)の付随機関である行政庁がこの職務を遂行することになります。この奉仕議員も都長も、職域選挙という予備選挙によって選ばれた資格者の中から、都市国民全員の直接選挙によって選出されます。私が職域選挙という予備選挙を重要視するのは、『国を治め指導していく者は哲学者でなければならぬ』というプラトンの哲人政治論に共鳴するところがあるからです。たしかに、多数決による民主主義政治は安全運転の代表かも知れないが、それだけに目先の安全ばかりを追い求める安易な政策に偏ってしまい、気がついて見るとそれがいつのまにか危険な流れに乗っており、慌てて舵を切らねばならない羽目になる。これでは、いつまでたっても視野の狭い政治から抜け出せないでしょう。

職域選挙がなぜ哲人政治論に結びつくのかと疑問に思うでしょうが、人徳者の多くは人心を洞察する力を備えており、このようないい方はしたくはないが、高い魂の持ち主が多いからです。彼らの人生観にはしっかりとした信条があり、そこから培われた見識があります。だから迷いも少ない。また、何事にもくじけない忍耐力と行動力も兼ね備えているので、時勢に即した対応も期待できる。この差はどこからくるのでしょうか？

人格には長い歴史があり、そこからくる思慮の深さの違いがあります。人格の高いものは巨視的なものが見方ができ、低いものは微視的な見方しかできない。これは誰が悪いのでもなく、単なる人生経験の不足(輪廻転生の数)から来る差なのです。当然未熟な地球上においては、高い人格者の数は少なく、低い者の数は多いといったピラミッド型を形成するでしょう。多数決原理が絶対だといえないのは、これらの理由からです。私が職域選挙を重視するのは、そのピラミッド層を上にも押し上げ、少数層の絶対多数を実現しようと思うからです。今日の政治家のすべてがこの中間層より下だとはいわないが、やはり占める割合は多いでしょう。その彼らは、金権と組織を利用しての上がつてきた者だけに、利権に惑わされ易く優柔不断に陥りやすい。そのような者の行う多数決政治が、国家を間違いない方向に導いてくれるでしょうか？ 職域選挙で選ばれた者は、普段の有りのままの姿が評価されるのですから、その時だけよい恰好をしても真にその人格から来ていない限り、すぐに化けの皮が剥がれ人に見向きもされなくなるでしょう。お金のない世界で人に認めてもらうには、不断の努力と人の心根がものをいうのです。

さて私が今日の政治を憂える一つの理由に、目的と手段が不明確になっている点が上げられます。つまり、派閥争い、権力争い、利権争い、選挙戦略などに力点が置かれ、何のための政治か、誰のための政治か、何を目指すべきか、この肝心なものが忘れられているのです。ただ経済を成長させ物質面から国民の期待に応

えよう、あるいは上辺だけの平和を続行させることで政権を維持しよう、といった薄っぺらい政策しか取られておらず、国民を一体どこへ向かわせるのか？ どういう世界を目指すのか？ この肝心な目的が忘れられているのです。ですから国民は金儲けを唯一の目的とし、気違いじみた経済戦争に明け暮れているのです。それが自らの足元を掘り崩し、亡国への影を深めているのです。これは良くよく心すべきことでしょう。」

「理性政治」

「今日の政治は政党政治によって行われていますが、奉仕国家も同じ方法で行われるのでしょうか？」

「ある特定の主義主張、あるいは原則において意見を共にする議員が結合した団体を政党と名づけているようですが、本当にそのような団体が必要でしょうか？」

「必要だと思います。人の意見は百人百様です。もし意見調整の場がなかったら、国会はたちまち空転してしまふでしょう。」

「しかし、その弊害も忘れては困ります。結成当時の意気込みは純粹で活力に満ちたものですが、時間の経過と共に初心が忘れられ、ついには権力闘争の修羅場に変わってしまいます。そのよい例が醜い派閥争いです。彼らは権力を勝ち取るために金権を利用しますが、その不純な金が足枷となって、正しい判断を鈍ら

せてしまいます。そんな連中に正義の政治が可能でしょうか？ また一旦政党に名を連ねると、反対意見をもついても政党の意に沿わねばならなくなり、本意な一票を投じなくてはならなくなる。その一票が国を動かすのですから、誠に恐ろしいといわねばなりません。

奉仕世界の創成に当たって、すでに思想的合意ができていますから、その政治において基本的意見の対立することはありますまい。だから、今日に見るような政党は必要ないのです。」

「でも、進むべき道は同じでも方法論は違うでしょうから、やはり意見調整の場は必要ではないでしょうか？」

「たしかに、細かい案件をまとめるには意見調整の場は必要でしょう。だから奉仕議会ではまず『意見調整委員会』という補助機関を設け、そこに奉仕議員の意見なり主張なりを文章にて提出させ、似通った意見をもつ者同士を集めてその案件限りの談議団を結成させるのです。もちろん類似の政策であっても、すべてに渡って一致するとは限りませんから、意見が煮詰められるまで大いに論争が交わされるのはいうまでもありませんが、今日のように立場や利権が障害となって正義が踏みにじられることがありませんから、案外スンナリと理性的結論が導きだされるのです。こうしてまとめられた意見は、談議団の代表が議会に持参し一つの政策として反映させるのです。もちろん最終決定は多数決によってなされますが、ここで肝心なのは、

他の談義団から出された政策が自分のところより上位と見たら、談議団の違いに関係なく、また面子にこだわることなく賛同する大きな心が表せることです。今日の政治家は、面子を重んじ立場を守ろうとするなど、理性を無視する傾向がありますが、奉仕世界では何よりも理性を重んじ、誠心を尊んだ政治がなされるのです。」

「それでは、案件ごとにそのような談義団が結成されるのでしょうか？」

「そうです、だから審議内容ごとに談義団の顔触れが違ってくるわけです。今日の政治においても、本来このような形が取られるべきですが、権力集中のために、利権獲得のために、寄らば大樹の陰ということで政党政治が幅を利かすようになるのです。」

「それで議会はスムーズに運ぶでしょうか？」

人は迷いが多いだけに、万事が万事すんなり行くとは思えないが・・・。

「彼らの意識の底には、人類の平和と使命達成という大目標があるだけで、私的な損得感情は一切ありません。もしあったとしても、それを形として手に入れることができないから、(金儲けができない・地位や名誉が得られない)そのエネルギーは良い面に向かうしかなくなるのです。したがってもし意見対立があったとしても、それは真に人類を思っていることから、そこに不和や憎しみの生まれる余地はなく、むしろそ

の意見の練り込みが最善の道を選択させることになるのです。

たしかに政治は難しいものです。人はどうしても日常の小事に目がいき、遠くの大事に目が行かないものです。だから卓越した意見は庶民には人気がないのです。これも本物の政治家を育てない理由になっているわけですが、良くよく考えて見ると、これもすべて利害がらみの経済に由来しているのです。その点奉仕世界は、損得勘定(感情)の生まれる余地はありませんから、思いっきり遠くを見据えた政治ができるのです。ですから、そこから良い芽が吹き、良い花が咲き、良い実を結んでいくのです。」

〔政治目標〕

「さて今日政治家は、一体何を目指して舵取りしているのでしょうか? 『一国の政治は何よりも先ず自国の利益を考え、他のすべての動機はこの考えに従属させるべきである』、とする国家行動の基本準則がそれならば、何と悲しむべきことでしょうか。自国の利益を何よりも優先するなら、他国の利益は無視して構わないということになります。そんな考えに立つて政治を行うから、他国が飢えていても平然と見過ごせるのです。国家は人であり、人は国家ですから、国家と国家は人の結びつきとなりましょう。したがって、人道主義の精神が垣根を越えて貫かれなくてはならないのです。それが我が国に不利益になろうとも、それが人

道精神に適うなら、万難を排して事に当たるのが正義の政治ではないでしょうか。それが、人種・言語・思想・宗教などの障壁を乗り越えてゆける唯一の方法なのです。

“これをしてくれたら、これをしましょう”では、あまりにも心が貧しいのではないのでしょうか？ そんな醜い心で、どうして物事の解決が図れましょうか？ 本当に困っており、助けを必要としているなら、利害を越えて援助の手を差し伸べるのが、人道政治・正義政治ではないでしょうか？

“与えれば与えられる。与えてもらってから与える”

この違いは天と地の差があるでしょう。したがって奉仕政治の第一番目の目標は、

『人道主義を貫き、相互扶助の絆を堅くする』ということになりましょう。

次の目標は、

『人格を極める教育の充実』ということになるでしょう。

宇宙心が体現化したものが人間です。人間は人格形成を目的に地上に降り立ちましたが、これまでの地球は荒地でした。その荒地で修行を積み、やっとここまで成長してきたのです。ここから以降は、豊かな土地で修行したいものです。そのためには、国家が率先して人格教育に加担すべきで、学校教育はその重責を担わねばなりません。国家が率先してということは、取りも直さず政治家が率先して人格教育に当たれという

ことで、これは政治家になった以上逃げられぬ宿命と思わなくてはなりません。ところが今日、“人心向上(魂の向上)”を政策に掲げる政治家は、ただの一人もおりません。何ともお寒い限りです。

さて次の目標は、

『生活の充実と福利の増進』でしょう。

この世は物質世界ですから、生きるためには物が必要です。その物の生産をスムーズに行い、国民に健康で文化的な生活を提供するのは国家として当然の役務でしょう。また、ただ生きるだけでは味も素っ気もありませんから、この世に生を受けた喜びも享受させねばならないでしょう。したがって国家は、物質的かつ精神的喜びを整える、経済の充実と文化の創成に力を注がなくてはなりません。

さて次の目標は、

『法科学の充実』ということになりましょうか。

“科学は人類に幸せをもたらすだろう！”との切なる願いをもってこれまで人類は科学の振興に力を注いできましたが、どうしたことかその科学が、今日人類を暗雲の下にさらしているのです。これは明らかに、どこかに誤りがあったからに外ならないのです。そうです。二面性の構造をもつ宇宙を一面性と勘違いし、物質科学だけに力を入れてきたところに誤りがあったのです。これを解決するには、精神科学と物質科学を

ミックスした法科学の充実以外ありません。それには、国家機関の中に精神世界を研究する特別班を設け、徹底してその解明に力を注がなくてはなりません。もしこれによって法科学が花咲けば、今日に見る不都合はすべて解決されるでしょう。

さて最後の目標は、

『人類の使命と目的を知らしめる』ことでしょう。

どの道を行けば良いのだろうか？ 人は分かれ道を前にして迷います。それほど人は迷いやすいのです。もし大きな力を持つ国家が道標を示せば、国民は迷うこと無く勇気をもって前進できるでしょう。今日国は国民に、何処へ向かいなさいといっているのでしょうか？ どのように生きなさいといっているのでしょうか？ 何もない、何とも悲しい限りです。

〔都市国家の財政〕

今日、国の財政は国民の税金によって賄われていますが、奉仕国家における財政は、国民の奉仕労働力によって賄われることとなります。貨幣のない社会において、これは当然といえば当然の話ですが、税の目的

からいっても、安定性・公平性・合理性からいっても、この方法が最良な方法なのです。税の目的は、あくまでも国家を賄うエネルギーを何に求めるかであり、そのエネルギーはお金でなくても良いはずだからです。エネルギーは目に見えませんが、目に見えないエネルギーが国を動かす、社会を動かす、人々を動かしているのです。すなわち、目に見えないエネルギーを目に見えるお金に置き換え、そのお金によって人を動かすことにより、物を生み出したり、サービスを生み出したり、国家を運営したり、しているわけです。ですからお金はあくまでも労働力を確保する手段であり、お金が物を生み出したり、サービスを生み出したり、国家を運営したり、しているわけではないのです。ここところが非常に誤解されている点です。

もし国民の奉仕労働力が確保できたら、労働力を確保する手段であるお金など必要なくなるのは当然でしょう。要するに、税金など集める必要はなくなるということです。

(今日の社会の仕組み)

税金を集める。↓その税によって官吏(労働力)を確保する。↓その官吏(労働力)が国を動かす。(国民と官吏の区分けあり)

(奉仕社会の仕組み)

国民の奉仕労働力が自主的に集まる。↓その労働力が国を動かす。(すべての国民は官吏)

このように人の心が経済を動かすように、政治も人の心が動かすのです。人の心を無視して何事も成し得ないことを知ってください。」

(3) 人類法の制定

一、法のよりどころ

「この地球には多くの国があり、そこにさまざまな民族や人種が共存しています。それらの人々は、肌の色も、目の色も、生活様式も、風習も、習慣も、考え方も違っておりますが、きれいな花を見れば美しいと感じ、ひたむきに取り組む姿を見れば心打たれ、素晴らしい音楽や物語に接すると感動します。このように肌の色が違おうが、人種が違おうが、心に感じることはみな同じなのです。この心の同感性は善悪についてもいえることで、人を傷つけたり殺したり騙したりすることは悪であり、人を助けたりいたわったり親切に

することは善であると、誰に教わらなくても知っているのです。それではその同じ心を持つ人間が、なぜ罪を犯したり争ったりするのでしょうか？ それは、利害や損得に心が奪われるせいではないのでしょうか？ つまり自分の利益を守るため、あるいは、国益を守るために、罪を犯したり争ったりするのは、もし利害や損得の生れない奉仕社会が作られれば、おそらく今日に見る争い事はすべて無くなってしまおうでしょう。もうそこでは、人を裁いたり、利権を調停したり、商権を裁定したり、国家の財政を規律する必要も無くなく、憲法や法律の中身も大きく変わってくることでしょう。ただどんなに利害の発生しない社会になっても、この物質世界では時間と空間が重なるどぶつかり合うという不都合が生じますから、それを回避するルールはなくてはなりません。また利害や損得にからむ争いは起きなくても、違った形の争いが起きないとはいえませんから、正義と秩序を守るルールは用意されるべきでしょう。要するに、衝突を避ける信号は必要だということです。そのルールは、“宇宙法を”よりどころとすべきでしょう。

この宇宙には法則が存在します。その法の精神は、一口に言って大自然を生かす愛そのものです。すべての生き物は、この法の下に生かされ、この法の下に進化するよう図られているのです。当然人間も、この法を無視して生きることができません。逆らったら確実に報いを受けるからです。といってもこの法則は、目や肌で実感できるものではないし、逆らってもすぐに現象化されるものではないので、非常に対処のしかた

が難しいのです。とはいえ、もろもろの不幸は法に逆らった結果ですから、そこに法の存在を感じなければならぬでしょう。つまり「因果応報」、これが私たちが最終的に感ずる法の姿なのです。したがって人類を統治する人類法・世界法・地球法といった人類普遍の根本法は、この宇宙法をよりどころとしなければなりません。

国連憲章や国際法が制定された当時、これらの法は強制力を持たない形式法として軽んじられました。今日これらの法は主権国家の憲法を凌ぐほどの力を持つようになりました。奉仕世界における人類法(世界法)も、それ以上の力を持つ統括法として国家憲法の上に置かれ、睨みをきかす存在とならなければならぬでしょう。その意味でも人類法は、地球上における最も権威ある法として、また人類普遍の憲法として、世界政府樹立と同時に制定布告されるべきでしょう。当然、各国が制定する国法や都市国家が制定する地方法も、この人類法の精神を継承したものとし、その優先順位も、人類法(世界法)―国法(基本法)―都市国家法(地方法)―法律―局令―条例等々、とすべきでしょう。そこでは世界政府(地球政府)が最上位の権能体となり国々を見守ることになるわけですが、統治の作用は(個人に及ぶ支配力)原則として各国の都市国家におけるべきであり、国民もここで民主主義の大原則である選挙権を行使し、自分たちが選出した代議員の決めた法に納得してしたがう、というのが正しい姿でしょう。つまり間接民主制であれ直接民主制であれ、主権

者である国民の意志が政治に生かされ、その結果として国民が国家に従うということであれば、誰も文句を言うことはできないからです。今日これは代議制という形で行われていますが、奉仕世界においてもしばらくはこの形が引き継がれるべきでしょう。

二、法の目的

法には目的法と手段法があります。目的法は、衝突や争いを回避するルールを定めた、いわゆる信号のよ
うなものです。たいして手段法は、目的を成就させる方法論を定めたものです。今日、交通事故を防ぐ目的
法として交通規則がありますが、別に交通ルールを守らせる手段法として罰則が用意されています。しかし
本来法は、諫めの道具になってはならないのです。ところが今日の法は、罰を全面に出し諫めることを主目
的としています。たとえば刑罰を科す、罰金を収めさせる、といった風にです。要するに今日の法は、諫め
の道具として使われ、犯罪をなくす道具にはなっていないのです。

それを端的に表しているのが刑法です。刑法では人を殺してはいけません！ 盗みをしてはいけません！
とは書いていません。

『暴行又ハ脅迫ヲ以テ他人ノ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト為シ五年以上ノ有期懲役ニ処ス』

これは罪を犯すことを前提としており、罰を科すことによつて犯罪をなくそうという、一種の威嚇法（おどし）なのです。これでは犯罪がなくなるわけがありません。犯罪も争いも人の心がつくり出すのですから、いかに刑法で威嚇しようとする人の心の中に罪の種がある限り、いつか芽を吹き犯罪へと発展していくのです。犯罪をなくしたいなら、罪の種をなくす方法を明確に示すことです。

人類法では人を罰する決まりはありません。また国を罰する条項も用意されておりません。あるのは、どうしたら犯罪をなくせるか、争いをなくせるか、その解決方法だけです。つまり、目的を達成する手段としての仕法書（方法を書いたもの）があるだけです。

三、良心を法の要とする

権力下の不自由さや法規制による締めつけは、自由の妨げがあると同時に責任回避も伴うもので、その代表的手本がソビエト型共産主義社会でしょう。その世界においては、言論や行動の自由の妨げがあったが同時に責任も回避でき、無責任極まる労働意欲の減退が何もかも落ちぶれさせたのです。人を規則や力で縛る

のは、一見統制が取れるように見えますが、実際は自主性を奪い無責任や怠慢を助長させるものです。

奉仕世界は法規制による締めつけがない代わりに、自由の代償として大きな責任がのしかかってきます。この方が一人ひとりに責任感を植えつけ、連帯意識を高めるには有効な手段でしょう。この責任は己の良心に対する責任ですから、法律や規則など及びもつかない足枷となるでしょう。しかもこの責任は、人それぞれ良心の痛みによって違ってくるだけに、特に意味深いものとなるでしょう。」

たしかに、自由には責任が伴うものだ。会社でも、自由きままな会社ほど社員一人ひとりの責任は重く、上に何人もの責任者がいて監視されている会社では、失敗してもその責任は二分三分され案外と軽くなるものだ。しかし自分の良心が監視人となると、鉄の鎖で縛られた以上の不自由が強いられるのではないだろうか？ またこの良心の痛みは、人それぞれによって違ってくるだけに、たしかに意味深いものとなるだろう。

「とはいえ、全く法規則がないわけではありません。ただ奉仕世界の法規則は、先程もいったように、あくまでも衝突を避ける交通ルールのなもの、あるいは衝突を避ける仕法書的なものとして身近に用意される法です。これを生活法と呼び、地方法の中に組み込まれています。国民はこの生活法を念頭に行動するわけですが、常識を弁えた人なら何の苦もなく守れるものばかりです。今日のように、経済的利益が人や国に影響を及ぼすのは違い、この世界では人と人との信頼関係が影響を及ぼしていくのですから、約束事は何よ

りも守られなくてはならないのです。もし約束事が守れず、人と人との間に国と国との間にギクシヤクしたものが生まれれば、すぐに世界は混乱してしまうでしょう。奉仕世界の弱点はそこにあるので、何よりも心の教育が大切になってくるのです。

(4) 奉仕世界の教育

一、教育の目標

「人間は実に環境に影響されやすい生き物です。どんなに素晴らしい能力の持ち主も、環境が悪いため能力を開花させることなく一生を終えてしまう、といったことは決して珍しいことではありません。その典型的例がオオカミ少年です。ジャングルでオオカミに育てられた少年は、何とオオカミと同じように四つん這いで歩き、唸り声を上げ、口で肉を裂き食べていたといいます。もしこの少年が人間社会で育っていたら、

人の上に立つ立派な人間になっていたかもしれません。人間はこのように、環境に非常に左右されやすい生き物だけに、家庭環境や教育環境や社会環境の整備が望まれるのです。

ところが今日これら教育環境の整備は、経済の前に骨抜き同然にされています。たとえば、エログロ雑誌・アダルトビデオ・競輪・競馬・パチンコ・酒・タバコなど、百パーセント害悪を与えるものが、経済優先の名のもとに放置されています。また、大人たちの素行も目を覆うばかりです。たとえば、国民の手本となるべき政治家が汚職をする、教育者自らが信号を無視しタバコのポイ捨てをする、酔っ払いが絡んでくる、電車の中で痴漢や喧嘩が発生する、家に帰れば今度は夫婦喧嘩が追い討ちをかける、それを見たくないとテレビをつければ、欲望を刺激する宣伝が目飛び込んでくる。果たして子供たちは、学校で学んだことと外で体験するこのギャップをどう感じ、どう埋めようとするでしょうか？ すべての悪を排除せよとはいわないが、せめて百パーセント害悪を与えろと思われるものは無くすべきではないでしょうか？ 反対に良いと思われるものは、率先して採用すべきではないでしょうか？ 経済的利益が得られない理由だけで採用しないのは、無罪を証明できる証拠を持ちながら握り潰している卑怯者のようなものです。これらのことを考え、奉仕社会では次のような教育目標が打ち立てられます。

- ・ 人格者に育て上げる。
- ・ 常識人に育て上げる。
- ・ 宇宙の法を知らしめ、同時に人生の目的を認識させる。
- ・ 社会創造の担い手に育て上げる。
- ・ 個性に見合った能力の開発を目指す。
- ・ 人間としての喜びに触れさせる。

「人格者に育て上げる」

人間の優秀さは、知能水準が高いとか、多くの知識を持っているとかで測られるべきでしょうか？ 私は人間の価値を決めるのは、心の豊かさにあると思っております。たしかに、優勝劣敗を重んじる今日の社会においては、頭のよさや知識の豊かさは大切かも知れませんが、もし生活の糧を得るのに何の憂いもない社会になったら、つまり奉仕社会になったら、このような教育は見直されるのではないのでしょうか？ といって、すべての知識を否定しているわけではありません。社会で生きていくためには、読み書きも、算数も、地理や歴史も、ある程度身につける必要はあるでしょう。また専門分野で働く人たちは、それなり的高等知

識も必要でしょう。だから、これらの知識の習得は大いにやったらよろしい。でも、温かみの無い人間を作るような教育であってはならないのです。つまり、

- ・勉強はできるが思いやりに欠ける。
- ・協調性がない。
- ・己のことに終始し、人の迷惑などかまわない。
- ・知識を光らせ、頭の悪い人を軽蔑する。
- ・ともに挨拶もできない。

このような温かみのない人間になっては、いくら勉強ができて喜べるものではないのです。真の教育は、人間性を高めるものでなくてはなりません。すなわち、人格教育こそが最大の教育目標なのです。

【常識人に育て上げる】

私たちは、祖父母や父母がいるからこの世に生を受けることができました。そう考えれば、祖父母の恩や父母の恩を忘れるわけにはいかないでしょう。また兄弟姉妹や友人がいるから、心豊かな人生を歩むことができるのです。そして、私たちの血肉になってくれる生き物たちの犠牲があるから、私たちはこの世で生き

ていけるのです。そう考えると、自分の周りのすべての物、すべての生き物、すべての環境に感謝しないわけにはいかないでしょう。またそういう気持ちになればこそ、人としての常識も芽生えてくるはずですから、すなわち、

・ありがとう！ の素直な言葉。

・すみません！ ごめんなさい！ の謙虚な態度。

・おはようございます！ こんにちは！ さようなら！ のすがすがしい挨拶。

・いただきます！ ごちそうさま！ の感謝の気持ち・・・。

このような言葉が自然に出る人間に育てることが大切なのです。ですから小学校における教育の相当時間は、この徳育教育に振り向けられるべきでしょう。

「宇宙の法則を知らしめ、同時に人生の目的を認識させる」

この宇宙には『宇宙の法則』が存在します。その宇宙の法則を、学校教育で徹底的に教え込む必要があります。なぜ必要かといえば、私たちの五感は十八歳ごろ発達の極に達し、色々な欲望を作り出します。この欲望を制御するには、悪い思いを持ち、悪い言葉を吐き、悪い行いをすれば、因果の法則によって罰せられ

る(悪いことが起きる)、といった畏怖の念をもたせることが必要なのです。それも何の疑いも持たない小さなころから教えれば、これは欲望の大きな歯止めとなるでしょう。これは脅迫ではない、心の揺れをなくす一つの方法なのです。しかも人間の本性は何か？ 人は何のために生まれてきたのか？ またどんな使命を果さなければならぬのか？ といった人生の目的を教えれば、どんな誘惑にも負けない強い心を築くことができるでしょう。これを心から納得させるには、瞑想が一番です。だから奉仕世界では、学校教育に瞑想が取り入れられているのです。

・良心に向かって反省を行う。

・心を統一し、宇宙との一体感を味わう。

・安らぎの光に触れる。

瞑想が身に付くに従い、法に対する畏怖の念も和らぎ、これまで抱いていた意識界(あの世)の迷信や、誤解や、不信は取り除かれるでしょう。奉仕世界では、国自らがこのマニュアルを示します。また、すべての国民も、素直にこのマニュアルに則った実践を行います。その結果は本人が一番分るわけで、それが法の存在を確かなものにするのです。

「社会創造の担い手に育て上げる」

もちろんこの間にも、語学、数学、物理、音楽、スポーツ、文芸などの一般教育が行われるのはいうまでもありませんが、加えて職場精神・社会精神といったものを身に付けさせるのも、学校教育の目的の一つです。その甲斐あつて中学生の後半ともなると、キラキラと個性が輝きはじめ、やがて生徒一人ひとりの進む道がはっきりと見えてくるのです。こうして、次の専修学校へと駒を進めることになるのです。

専修学校での学習は、すでに職場へとつながっています。その意味では、すでに奉仕社会人としての育成がはじまっているということです。生徒たちは基礎教育を習うかたわら専門知識を身につけ、その知識を本物の知恵に変えるために、実際に職場に向いて働きながら学ぶのです。量を問わず質を重んじる職人根性を植えつければ、この世からきつと怠慢やマナーを無くすことができるでしょう。それが社会常識ともなれば、もう理想世界は不動のものとなるでしょう。

「個性に見合った能力の開発を目指す」

魂の遍歴によって人それぞれ極める道が違うから、当然生まれもった環境も能力も違ってくるでしょう。だから基礎教育を重んじながらも、その上に個人色を輝かせる専修教育に力を入れなくてはならないでしょ

う。となると、全員が全員高等数学を学ぶ必要もないし、高等物理学を学ぶ必要もない、その生徒が得意とする分野で思う存分特性を發揮させてやり、それを生きがいにしてやるのです。その特性を見極める場が学校です。もし生徒の特性が発見できたら、迷わずその道に導いてやるべきでしょう。特に天童は国の宝ですから、大切に育ててやりたいものです。この社会では、天童を拾い育てることを何よりも重視していますから、この世界では、科学も、芸術も、スポーツも、ますます發展していくのです。

「人間としての喜びに触れさせる」

人は幼いころ大きな夢を抱くものですが、その夢を大事に育ててやるのも学校教育の一つです。したがって、できるだけ子供の夢が適えられる時間と環境を与えてやりたいものです。自然との触れ合い、生き物との触れ合い、異国人との対話、有名人との対話、冒険の旅、そして宇宙との触れ合い、この夢実現に国が率先して加担し、子供たちに夢と希望を与えてやるのです。学問だけが勉強ではありません。また学校だけが勉強の場ではありません。あらゆる環境が勉強の場であり、あらゆる人生体験が勉強なのです。したがって触れ合う人びとはみな先生であり、あらゆる環境はみな教材なのです。

二、教育の第一歩

今日の社会で生きていくためには、最低限の知識は必要です。ところが知識を重んじるあまり、有名校を出なければ出世できないといった、歪んだ学歴偏重社会を作ってしまった。したがって、誰もが有名校へ凌ぎを削る試験地獄に身を投じるようになり、最も肝心な夢と希望を忘れさせてしまったのです。

子供の一日を見なされ、誠にかわいそうなものです。学校から帰ると、教育ママが作った学習メニューの消化のため、塾というベルトコンベアに乗せられ家を追われます。家に帰ったら帰ったで、今度は宿題消化のために、夜遅くまで机に向かわされます。親は己のエゴと見栄のために、夢を育む大切な時期を、子供から奪い、それが我が子のためと自分をごまかしているのです。幼い頃には幼い頃にしかできない体験があり、学生時代には学生時代にしかできない体験があります。幼児は母親の愛情を一身に受け、安らぎの中で成長していくのが一番であり、子供は兄弟姉妹や友達と遊びを通し大人になっていくのが一番なのです。天真爛漫な心を育て、優しく思いやりのある人間に育てねばならない時期に、現実ばかりを直視させガムシヤラに知識を詰め込もうとするのは大きな誤りです。

知識は、この宇宙に無限に存在するのです。今地球でもの知りだと自負する者も、宇宙の無限の知識にお

いては、アブクにも匹敵する無知者になるのです。それを追いつく求めするのは、海岸で砂粒を数える行為に等しく、この世を去る時きつと悔やまれるはずです。そんな時間があるなら、少しでも心の研磨に励む方がどれほど有意義か？ よろしいですか、ガリ勉からは決して人格は高められないのですよ！」

「でも人間には、勉強しなければならぬ時期があると思います。そして教養というものは、人間形成に欠かせない大切な要素だと思うのですが……。」

あまりにも勉強を軽んじる老人の言いぐさに、私はいささか向きになった。

「私は勉強を否定しているわけではありません。むしろ、人は死ぬまで勉強の連続だと思っているくらいです。だが勉強をするにも、時宜と選定が必要ではありませんか。つまり人生がハードル競争だとすれば、子供の頃にしか越えられないハードルもあれば、大人になってからでも越えられるハードルもあるはずなのです。なのにそれを無視し、時宜にそぐわないハードルを越えさせたのでは、一体誰のための、何のための人生なのか？ 子供は日に日に成長していくものです。その一時期の体験というものは、人生にとって後戻りできない貴重な財産です。いってみれば、成長段階でつける勲章のようなものです。それを放棄させる権利は誰にもありません。このように教育の第一歩は、時宜に即した正しい学習選定をすることなのです。」

三、特殊教育

特に才能の秀でた天童たちは、中学校を終えた時点で分類され、特殊教育の場に送られることになります。もちろん、これも本人の意志を無視して行われるわけではありませんが、殆どは本人自らが使命感に燃えこの道に入ってくるのです。彼らはいつの日か人類のために役立つことを夢見、ひたすら能力開発、才能開発、技能開発に励むのです。

“人の欲が文明を発達させた”とか、“戦争が科学を発達させた”とか、“芸術は貧困の土壌から生まれた”とか、本気で思っている人がいるようですが、決してそのようなことはありません。もつとも、貧困から抜け出したい一念で目的を成就する人もおりますが、それはその人の努力と念が引き寄せたのであって、大抵の場合は私欲を滅し人の為に社会の為にと打ち込んだ時に天啓として与えられるのです。この天啓は、決して知識からは生まれません。いやかえって知識は、天啓の道筋を閉ざしてしまふでしょう。知識に溺れ過ぎると、その知識が固定観念となつて自由な発想を妨げてしまふからです。したがって特殊教育では、仕入れた知識を絶対視せず、あくまでも“仮定”として与え、生徒もそれを前提として研究に取り組み、澄み切った空白の中にきらめくヒントを掴むのです。

さて、この国家最高教育機関を管理監督するのは中央国家です。そして、その教育機関に優秀な人材を送り込むのは都市国家です。各都市国家から推薦されたこれらの能力の持ち主は、恵まれた環境の中で基礎知識を深め、更に才能に磨きをかけていくわけですが、中でも特に優秀と認められた人材は、更に上位の(世界政府傘下の教育機関)教育機関に送られ、世界の頭脳となって人類を牽引していくことになるのです。世界の優秀な頭脳(右脳と左脳のバランスのとれた頭脳)が国境や人種の垣根を取り払い、更に今日に見られる科学者同士の確執や師弟関係の阻習にこだわらず、広い大きな開襟の中でそれも鏡張りの中で研究に励むとき、人類の芸術や科学は飛躍的に発展していくでしょう。現在起こっているさまざま不都合は、この優秀な人たちの手によって必ずや解決されることでしょう。

四、国民自由学校(自由教育制度)

さて、教育も政治も文化も経済の背に乗って発展していくといいましたが、その経済は教育に支えられ進展していくのです。その意味では、この両者は相互補完関係にあるといえるでしょう。したがってこの世界の教育は、大人になってからも続けられるのです。

今日の社会では、仕事から完全に解放されるのは希です。朝早くから夜遅くまで、企業戦士は仕事に追いまくられ休む暇もありません。家に帰っても仕事で頭から離れず、まんじりとも休めません。どうしたら仕事が貰えるか？ どうしたら売上が伸びるか？ どうしたら利益が上げられるか？ 会社の業績が気になり、自分の成績が気になる。まるで仕事の奴隷です。奉仕世界では、労働に対する姿勢は今以上に厳しいかも知れませんが、一旦職場を離れると完全に仕事から解放されず。ある程度のノルマはあっても、利益追求の必要性がないから、成績が人を悩ませることがありません。また、労働力が豊富な上にキツチリした計画生産体制が敷かれているから、よほどのことがない限り残業はないでしょう。したがって労働者は、今日とは比べようのない自由時間がもてるのです。その自由時間は一体何に使われるでしょうか？ もちろん、息抜きの娯楽に、旅行に、家族の団欒に使われるでしょうが、殆どの人は自己挑戦に使うのです。自由教育制度は人間の可能性を啓発し、埋もれている才能を発掘しようという、奉仕世界ならでのユニークな教育制度ですが、それを一般向けにしたところに大きな意義があります。

私たちは一旦社会へ出てしまうと、生活に追われ、やりたいこともやらずに一生を終えてしまうものです。なかには、そのまま埋もらせてしまうには惜しい才能の持ち主もいます。その才能を発掘し、さらに磨きをかけ、花咲かせようというのが国民自由学校の目的なのです。挑戦課題は多々あると思いますが、中でも精

神開発の挑戦、やり残した学問への挑戦、スポーツ、芸術、趣味などの挑戦は多いでしょう。それを国は、国民自由学校という場を提供することで、国民の意欲に報いようというわけです。ここで磨きをかけた人たちは、成果を試す発表会に挑戦でき、その発表会で認められれば、人生行路を大きく変えることも夢ではないのです。どこまでも夢を与えてやるのが、奉仕世界の教育の誇りなのです。

教育について私の考えを述べさせてもらいましたが、まだまだ舌足らずです。といって、あまり時間をかけては外の話ができませんので、教育の詳細についてはあらためて機会を見つけて話すことにしましょう。」

(5) 奉仕世界の宗教と科学

一、宗教

「今日宗教といえ、抹香くさいものというのが一般常識になってしまいましたが、本来宗教は抹香くさいどころか、実に科学的なのです。つまり、優しさには優しさが、笑顔には笑顔が、暴力には暴力が、怒りには怒りが返る、この『因果の法則』そのものが科学的なものだからです。

人間はどうにもならなくなると、“神様お助け下さい！”と神頼みしますが、いくら神頼みしても助かるものではありません。なぜなら、『天は自ら助くる者を助く』『因果応報』が真理だからです。努力もせず、ただ神頼みするだけでどうして助かりましょうか？ 努力と精進が伴って、はじめて人は助けられるのです。奉仕社会では、『自らが自らを助ける！』という真理が理解されていますから、怠け者はおりません。みな一生懸命努力し、精進しています。果報はそれについてくるわけですが、それを当てにする人もまたおりません。

またこの世界の人々は、仏壇や神棚や祭壇を設け、祈るようなことはしません。祈りは己の心に向かってします。自分の心が、宇宙心（神）へ向けての発信所であり受信所であることを知っているからです。すなわち祈りとは、宇宙心（神）との対話なのです。その対話は次のように行われます。

一、感謝の祈り

今日の無事に対して、自分の周りの環境に対して、父母や先生などの恩人に対して、自分を導いてくれている意識の兄弟に対して、私たちを生かしてくれている神に対して、感謝の祈りを捧げます。

二、反省

今日一日の言動を振り返り、過ちがあったら二度と繰り返さないように心に誓います。

三、宇宙の波動と一体になるべく瞑想を行う

今日一日の終わりに、神に対して敬虔な祈りを捧げ、新たなる誓いを立てます。この真摯な祈りを続けることによって心の曇りが除かれ、やがて宇宙の波動と一体になることができます。

真摯な祈りとは神に意識を向けることですが、これが瞑想の極意です。この瞑想を続けてゆく内に宇宙の波動に触れ、言葉で言い表せない喜びを体験することができます。この段階までくると、人生の意味と

か、宇宙と自分との関係とか、幸せの正体といったものが分かり、自然と正しい生き方ができるようになるのです。もう難しい仏典や教典などは不要です。当然、仏殿・神殿・仏壇・神棚なども不要です。したがって宗教は、次のような変貌を遂げていくでしょう。

- ・因果応報のメカニズムが科学的に立証されるに至り、名実共に宗教⇨科学となる。
- ・“心の塔”の開校がなされ、家族ぐるみで心の勉強が行われるようになる。
- ・父親が音頭をとり、日々の反省会が行われるようになる。
- ・完全なオーラメーターが開発され、それが実生活に生かされるようになる。以降人類は、真の指導者を得ることになる。
- ・世界に何々宗教という名の宗教はなくなる。
- ・生活の実践⇨法の実践となる。
- ・宇宙の全容が明らかになる。
- ・あらゆる無知は解消される。

このように宗教は、人類の意識の高揚と共に姿を変えていくでしょうが、それは正に科学の進歩の足跡と

も一致するでしょう。

宗教は強制されるべきではありませんが、徳育は強制して構わないと思います。なぜなら、奉仕社会が浸透し偽りの宗教が淘汰されれば、宗教に代わって徳育が先生となるからです。その時宗教＝科学となり、その位置づけは、今日のように日常生活と掛け離れたものではなく、身近な生活法として実生活の中に縫い込まれるでしょう。

宗教を観念的なもの、生活から掛け離れたもの、と持っているうちは、私たちは決して真の自由者にはなれません。宗教を科学として捕え、今の一瞬一瞬の思いと行為が自分の運命に、人類の運命に、影響を与えると真剣に感ぜられるようになった時、私たちは真の自由者になれるのです。」

「本当に偽りの宗教は淘汰されるのでしょうか？」

「はい、金儲けのできない社会システム(奉仕社会)ができ上がれば、偽宗教は必ず淘汰されます。したがって、もう宗教という名の宗教は無くなるでしょう。これは私が保証します。」

二、科学

宇宙に二面性があるように、科学にも二面性があります。つまり物質法則の背後に心の法則があつて、この二つの法則が互いに関係しあい、物質界と意識界の存在を可能にしているのです。要するにこの二つの法則は、表裏の関係にあるため、どちらが欠けても宇宙の存続は許されないということです。ところが人類は、快適さや利便さや合理性を重視するあまり物質科学の虜になり、肝心要の精神科学をおろそかにしてしまいました。今日地球環境が危機にさらされているのも、まさにこの過ちによるものです。本来科学は、照応進化を満すものでなくてはならないのです。

照応進化とは、“科学の発達と精神進化は肩を並べなければならぬ！”という進化の法則のことです。もしバランスを欠くなら、人類は自然淘汰の憂き目を見るでしょう。

①科学の進歩V精神進化

科学の進歩より精神進化が劣勢すぎれば、人類は自らの手で滅亡に追い込むだろう。

子供に危険なオモチャは禁物です。危険なオモチャを与えれば、子供はおもしろ半分に使い、自らの首を締めてしまうからです。

②精神進化V科学の進歩

科学の進歩より精神進化が優勢すぎれば、人類は負わされた使命をまっとうできないだろう。

人類の最終目標は、地球上に理想世界を建設することですが、それには精神進化と肩を並べる科学力を持たなくてはできないのです。

③科学の進歩Ⅱ精神進化

科学の進歩と精神進化が肩を並べるのが理想的姿です。

これであれば物心バランスのとれた文明が発達し、人類も地球も調和のとれた進化が望めましょう。

このように調和ある進化は、精神進化と科学の発達が照応してはじめて実現するのです。③の科学が花咲いている奉仕世界の文明は質実そのものです。本来に必要なところにだけ科学が使われ、遊びやふざけたところには一切使われないのです。特に“化学”の乱用は避けられています。それを具体的に見てみましょう。

◎科学の利用が許される。

・公的場所や公的活動に利用される。

(大量輸送機関に、公的建造物に、公的情報に・通信に・インフラに)

・社会生活維持のために利用される。

(農業に、林業に、漁業に、酪農に、鉱工業生産に、物資生産工場に、公的サービス機関に、医療に、国民の福利に)

・人類の使命達成に利用される。

(宇宙法則の研究に、生命研究に、エネルギー研究に、元素転換研究に、異次元研究に、意識の研究に)

・人間性を高める教育に使用される。

(学校教育に、国民自由学校に、特殊教育の場に、芸術に、スポーツに、あらゆる文化活動に)

◎科学の利用が許されない。

・人の欲望を刺激したり、興奮させるところには使われない。

(射幸心を煽る、物欲を煽る、色欲を煽る、自己顕示欲を煽る、単なる勝負の世界)

・興味本位なもの、好奇心をくすぐるようなところには使われない。

(個人情報、大衆向け情報)

・エゴを助長するようなところには使われない。

(マイカー、過激な装い、度を越した遊興)

・意味の無い破壊には使われない。

(戦争・自然のバランスを崩す破壊など)

このように細心の注意を払って科学が使われれば、決して地球環境を狂わすようなことは起きないのです。照応進化が順調に進めば、予想だにしない法科学が咲き、生命の謎・人間の謎・宇宙の謎が解明されるでしょう。たとえば、

・エネルギーと物質、エネルギーと意識、意識と物質の相関関係が解明され、無限のエネルギーをくみ取る技術が開発される。元素転換が容易に行われるようになる。

・環境蘇生技術・保全技術が開発される。

・宇宙に充ちる生命がみな兄弟姉妹であることを知り、彼らとの交流が盛んになっていく。

・思念移送機の発明を契機に人類は地球を飛び出し、宇宙の果てに第二第三の地球を発見して、そこに地球人類を入植させるようになる。

・次元を超えた世界との交流が行われるようになり、もはやあの世とこの世が区別されることがなくなり、まさに天と地に虹の架橋が渡されるようになる。

これらは、理想世界建設後に控えている人類の大きな目標です。したがって人類は、いつまでもつまらない宗教戦争や経済覇権戦争や領土争いなどにエネルギーを費やしてはならないのです。我々人類には、もっと大きくもっと崇高な目標があるのですから・・・。」

(6) 平和

「多くの人は、戦争を起こしているのは政治家だと思っています。でも実際は、私たち一人ひとりが起こしているのです。」

「えっ！ 私たちが？・・・私はいつも平和を願っていますが・・・。」

「政治家もそういい、皆さんもそうおっしゃる。反戦運動もアチコチで行われ、今や戦争反対の声は大であります。しかし戦争はなくならない。なくならない理由は、平和を訴えている私たちが戦争の後押しをしているからです。つまり、直接私たちが手を下さなくても、間接的に銃の引き金を引いているということです。」

「まって下さい！ 間接的にとはどういう意味でしょうか？」

「あなたは人を恨んだり、憎んだり、怒ったり、しなかったでしようか？ あれが欲しい、これが欲しい、と欲望をあらわにしなかったでしようか？ 約束事をきちっと守っていたでしようか？ 愚痴や不平不満をいわなかったでしようか？」

「それは人間ですから、しない人はいないでしよう。」

「はつきりいって、それが遠因となって戦争は引き起こされているのです。」

「まさか・・・？」

「たしかに直接の原因は、人種間の争いや国家間の利害の対立から生じているかも知れませんが、でもその後押しをしているのが、私たち国民の欲望と感情なのです。もし国民一人が、欲望と感情に走らず、足ることを知り、約束事をきちっと守っていたら、決して争い事など起きないでしょう。一人ひとりの集まりが国となり世界となっているのですよ！ その一人ひとりの人間が、己の本性を知り、正しい信念と行いのもとに生活したら、戦争など起こるはずがないのです。」

人の心は使い方によって、どうにでも伸びるし、どうにでも縮まるものです。もし広く大きく使ったら、どんな大きな問題も小さくしてしまうでしょう。反対に狭く小さく使ったら、どんな小さな問題も大きくしてしまうでしょう。たとえば有る国に、食料不足から隣国を侵略しようと考えている政治家がいたとしましょう。それでは、

- ・政治家自身の生活は質素だろうか？
- ・国民は贅沢をしていないだろうか？
- ・すべての国民が食べ物不足なのだろうか？

・我慢できないほどせっば詰まっているのだろうか？

・助け合いはし尽くしただろうか？

・国民はみな勤勉だろうか？

・食べ物を作る努力はし尽くしただろうか？

・戦争をしたら人は必ず死ぬ、そんな犠牲を払ってまでしなければならぬ戦争だろうか？

ここまで心を広げて、なお食料不足だと私には思えない。そこには悪徳政治家や政商、あるいは死の商人といわれる族が必ず暗躍しているはずです。

・国家の面子や体面を汚されたから(政治家自身の体面を繕うためである)

・国家安泰のために

・子孫繁栄のために

・正義の戦いだ！ 聖戦だ！

と理由を正当化し、国民感情を煽って強引に戦争へ駆り立てている悪鬼の影が、必ず見え隠れしているはず。どんなに正当な理由を並べてみても、所詮国民を悲劇へ引っ張っていることに変わりはないのです。私たちは利権にしがみつき私腹を肥やしている、そんな強欲な権力者の口車に乗って戦争の後押しをしては

なりません。政治家になって世界平和を叫ぶのも結構、反戦運動に情熱を傾けることも結構ですが、最も大切な自分の心を貧しいままにしておいて、どうして平和が望めましょうか？ 平和が欲しいなら、まず己の心を豊かにすることからはじめるべきです。これは何も戦争に限った話ではありません。あらゆる犯罪、あらゆる争い、あらゆるいじめや人権侵害などにもあてはまることなのです。

ある人はいつています。『戦争のない状態が平和なのではない！ 人の心が豊かになってはじめて平和なのだ』と……。その意味では、人の心に憎しみ・恨み・怒り・愚痴・欲得などがある限り、決して平和の名を口にすることはできないでしょう。

奉仕世界の人たちは、一人ひとりの心が国を動かし世界を動かしていることを知っていますから、自分の心を磨くことを忘れません。一人ひとりの心が磨かれれば国が磨かれる、国が磨かれれば世界は必ず平和になる、彼らはそう信じているのです。」

(7) 奉仕世界の社会風景

奉仕経済が浸透するにつれ、社会に様々な変化が生まれてくると思うが、ではどのような変化が生まれるのか見てみることにしましょう。

(国内社会における変化)

- ・ 儲ける必要のなくなった奉仕社会では、人口分布は均一化し、今のような過密都市は無くなる。
- ・ 人集めが必要なくなった奉仕社会では、村おこしや町おこしなどが不要になる。
- ・ 類は類を呼ぶ法則により、似通った人たちが居住する都市国家・村国家が生まれる。
- ・ 地方色豊かな都市国家・村国家が生まれる。
- ・ 物や人の移動が少なくなることによって、交通事情は大きく変わる。もう交通渋滞も交通事故も昔話になる。
- ・ 競い合い、奪い合い、争い合いのなくなった奉仕社会では、あらゆる犯罪がなくなる。したがって、警察も、検察官も、裁判所も、刑務所も、弁護士も、いらなくなる。

・必要以外の情報が流されなくなった社会では、迷いが少なくなり、欲望や感情も刺激されなくなるので、正しい生き方ができるようになる。

・社会から銃などの凶器が一扫される。

・人間の本性を知ることにより、物の偏り、人の偏り、生活の偏りなど、あらゆる偏りが解消される。

・奉仕社会における介護は、特例を除いて各家庭に委ねられることになる。

・ストレスが少なくなることにより、事故や病気や自殺が減ってゆく。もう今日のような沢山の医者や病院はいらなくなる。

・勉強勉強！ 試験試験！ とお尻を叩かれなくなった子供たちに笑顔が戻る。もう学級崩壊も校内暴力もいじめもなくなる。

・儲ける必要がなくなった奉仕社会では、土地も労働力も有り余るほど生まれる。したがって、建物は上から横に広がり、労働力はかゆいところに手の届く使い方がされる。豊かな社会とは、このように有り余る自由な労働力と土地を有した社会なのである。

（国際社会における変化）

- ・ 国家間の争いがなくなった奉仕世界では、一切の武器、一切の軍備は不要になる。したがって、軍事施設は工場に、滑走路は田畑に、軍人は奉仕労働者に、姿を変えるだろう。
- ・ 世界の人口密度は、国土の面積に比例したバランスのとれた配分になる。
- ・ 人種や民族の存在意味を知ることにより、人々の意識の中に国境線がなくなってゆく。「人類は一つ、人類はみな家族」の意識が、当然のごとく定着する。
- ・ 人の欲が静まることよって自然は息を吹き返し、水も、空気も、土も、昔のような清澄さを取り戻す。もう台風・竜巻・豪雨・雷・地震などに悩まされることがなくなる。
- ・ 商業活動がなくなることにより、陸・海・空の交通量は激減する。当然、交通事故も船舶事故も飛行機事故もなくなっていくだろう。
- ・ 資源が人類全体の物として使われることにより、乱開発は無くなる。

ザーツと奉仕社会の変化を見てきましたが、では具体的にどのような変化が訪れるのか、奉仕社会の世情の一端を覗いてみることにしましょう。

【街の景観】

朝の通勤、街ゆく人々の顔はどこか喜びにあふれています。生活に追われることもなく、利益追求に悩まされることもないので、心に余裕があるせいでしょう。だから眉間に立ち皺を入れたり、しかめっ面をして歩いている人など一人も見当たりません。大通りには、エゴの象徴であるマイカーなどは見られないし、宣伝用のケバケバしい看板や、ノボリ旗なども見られない。道端には空き缶やタバコの吸い殻や紙屑などは落ちていないし、もちろん浮浪者の影などみじんも見られない。ダミ声を発して自己主張を繰り返す政治家の姿も、ノボリを掲げて氣勢を上げる労働者のデモ隊も、軍艦マーチを奏でて連なる右翼団体の車も見られず、街の景観は美しく静穏そのものです。

通学風景もほほえましいほど和やかです。車が走っていないので、子供たちは道を歩くのに神経を使う必要がありません。また居住地に近いうちに学校があるので、余裕をもって通学ができます。学校の近くに工場があったり、飲み屋があったり、遊戯場があるといったことがないから、悪に染まったり事故に出会う機会もない。また住宅地や学校の周りには、緑多い公園が用意されているので、自然に接する機会もずっと多くなる。休日ともなると、その公園から子供たちのはしゃぐ声が一日中聞こえてくるのです。

【社会情勢】

社会情勢も誠に穏やかです。新聞を開いてみても、テレビをつけてみても、円がどうなったとか、株がどうなったとか、経済摩擦がどうとか、不況がどうとか、ドコドコの国が飢餓で苦しんでいるとか、地球環境がどうなったとか、交通事故の死者が何人になったとか、殺人事件が何件増えたとか、テロで何人死んだとか、そんな殺伐とした報道は一切見られません。目や耳から入ってくるのは、微笑ましいものばかりです。それもこれも、労働本位制を柱とした奉仕経済が定着したお陰です。何せ、儲ける必要も利益を得る必要も無いのですから、争いの起きようがないのです。人生の目的が人格を磨くことにある社会では、外側（物より内側（心））に目を向けますので、競い合いも、奪い合いも、戦い合いも、起きようがないのです。

【自然の景観】

このように街の環境はいうに及ばず、自然環境もまた清らかで美しいのです。空を見上げれば、透き通ったスカイブルーがどこまでも続いているし、地に目を落とせば、緑の外套をはおった野や山が私たちの目を痛いほどに射ってくる。その合間を縫って流れる川も、輝くばかりの清澄さを見せている。だから、空気も、水も、食べ物も、そのままおいしいのです。これもすべて、自然と和合した証です。

【家庭】

そんな社会で一番大切にされるのは家庭です。私たちは家の外に喜びや幸せを見出そうとしますが、喜びや幸せは家庭内にあるのです。その証拠に、家族の一人でも悩んでいたり病んでいれば、家族全員が減入ってしまいます。どんなにお金を持っていても、どんなに楽しいことをしていても、心から喜べないのです。反対に家族全員が健康で悩みがなければ、つまらない楽しみでも心から酔えるのです。

奉仕世界では、何よりも家族の和を大切にします。平和の源が家庭内にあることを誰もが自覚しているからです。ですからこの世界には、家庭内暴力だとか校内暴力といったものは一切ありません。子供は大人を写す鏡だとか、社会を写す鏡だとかいわれますが、まさにそのとおりで、家庭が平和なら子供も健やかに育つのです。

【病院】

平和の証は病院にも見られます。いやこの社会では病院とはいわず、『癒しの館』あるいは『癒しの園』と呼ばれています。館に入っても患者の数はまばらで、何とも閑静です。その患者も外科が殆どです。心が平和だから病気も少ないのです。今日、医療費が膨大となり国家予算を脅かすまでになっておりますが、こ

れは心の病が増えていく証です。心が病むから肉体が病むのです。心が病むのは社会が悪いからです。いや、心が悪いから社会が病むのです。つまり心と病と社会平和は、相関関係にあるということです。

【学校】

この社会の学校は、子供たちだけの学校ではありません。すべての住民のための学校でもあるのです。というのも、真理の勉強は大人になっても続けられているからです。子供たちは学校で必要な知識を学びますが、同時に真理も学んでおり、それは大人になっても続けられているのです。ですからこの社会では、大人と子供が同じ机を並べて学ぶ風景は当たり前になっています。試験はありませんから、試験勉強で悩む必要はありません。ですからこの社会には、苦学という言葉はないのです。みな楽しく勉強しているのです。

【取得市場】

住宅街の一角に、かまぼこ型の大きな取得市場が用意されております。そこには家具・調度品から日用品・食料品まで、家庭生活で欠かせない、すべての生活必需品が用意されております。夕方ともなるとその市場に、多くの主婦たちが取得ボックスを引いて集まってきました。その取得ボックスには仕分けされた容器が備

えられ、そこに、醤油を、砂糖を、魚を、豆腐を、直接収納し持ち帰れるようになっております。何の包装もしてありませんから、ゴミが一切出ないのです。またこの社会では、どんな食べ物も一切保存剤は使っていません。この社会の人たちは、買いためしないのです。その日取得した食料は、数日の内に使ってしまうからです。日々取得市場に足を運び取得するのが、主婦の日課なのです。ただし持ち帰る際には、必ずコンピューターに報告しなくてはなりません。でもそれは、ボタンを押すだけの簡単な作業です。

家庭や社会は、人の心をそのまま映し出します。人の心が美しければ、家庭も、社会も、美しいのです。もし、家庭や社会から笑い声がこぼれるようになれば、その国は平和になります。その世界は平和になります。その星は平和になります。その宇宙は平和になります。

さて本日は図らずも、理想社会を紹介することになってしまいました。いかがでしたかな？」

「はい、今の私の気持ちは半信半疑といったところでしょうか。」

「半信半疑？」

「ええ、半信はいうまでもなく、人間の本性と目的がご老人のいうようなものであるかどうかという点において、半疑は人類は本当に奉仕社会システムを採用するようになるかどうかという点においてです。」

「半疑から答えましょう。」

今日、人間の信仰対象はお金です。殆どの人は、お金さえあれば幸せになると考えています。しかし、その信仰もやがて崩れる時がくるでしょう。つまり、お金に(資本主義経済に)裏切られる時がくるということ。今まで絶対だと信じていたものに裏切られた人たちは、もう何を信じてよいか分からなくなります。勿論、社会は大混乱に陥るでしょう。しかし、その混乱の中から人々は新しい信仰対象を発見するのです。新しい信仰対象とはいうまでもなく、奉仕労働力を柱とした奉仕経済・奉仕社会のことです。この信仰対象は、決して人を裏切ることはありません。また、どんな混乱にも揺らぐことはありません。

二十一世紀の信仰対象は、お金や物から絶対的価値を秘めたこの奉仕労働力・奉仕経済(労働は心がするので、信仰対象は心と言うことになる)に移っていくでしょう。これは時代(歴史)の要請とも、地球の要請ともいえるものですから、人類は厭でも私の提唱する社会システムを採用しなければならなくなるのです。前の半信、つまり人の心の謎については明日お答えすることにしましょう。この謎が解明されれば、奉仕社会の信頼性はますます確固たるものとなるはずです。」

第三章 宇宙と人間

すでに夕日が沈み夜の帳が下り始めたころ、私は息を切らして川辺に到着した。昨日と違って今日の私は車でなかったので、駅からここまで一生懸命走ってきたのだった。ここにくる途中河川敷のゴルフ場があり、昼間は派手なウエアに身を包んだゴルファーの姿がみられるのだが、今は人影はまったくなく闇と静寂だけが訪れつつあった。

老人の姿は、すでに昨日と同じ土手の上にあった。

「お待ちせ致しました。」

私は息を整えると、昨晚と同じように老人の横に腰を下したが、座るなり老人は口を開いた。

「あなたはゴルフをおやりですか？」

「以前少しやっていました。」

私は神妙に答えた。

「ゴルフというスポーツは実にメンタルなゲームのようで、心の鍛練には大いに役立つようすなあ！」

「ええ、そのようです。」

「どのような芸事も、名人芸に近づく^と心の錬磨が最終目標となるようで、宮本武蔵も晩年自分の心を見詰める座禅を行ったといわれます。技術は練習次第で上達させられるが、心はそう簡単にはいかない。不動心をつくるには心という生き物を知って、それを征服しなければならぬからです。それでは、その不思議で掴みどころのない心をもった人間とはいかなる生き物か？ その謎に迫ってみることにしましょう。」

(1) 進化論と人間

「人間は果たして、ダーウィンが唱えたように猿から進化したのじゃろうか？ それとも、もともと人間としての姿形をそなえ、独自の意志をもち、考え、工夫し、創造し、美的感覚や素晴らしい恋心をもち、自己主張する能力をもっていたのじゃろうか？」

一九世紀の著名な博物学者である、フランスのラマルク(一七七四年～一八二九年)は、キリンの首は祖先が高い木の実や葉を食べようと代々首を伸ばしていたから高くなったという、『獲得形質遺伝説』を打ちだ

しました。またイギリスの自然科学者ダーウィン(一八〇九—一八八二年)は、彼の著書『種の起源』の中で、生物は『神』が創造したのではなく、自然進化の過程で生まれたもので、その進化は連綿と続いていくものと唱えました。彼の自然選択説は、『どの生物も沢山の種を残すが、種の固体数は一定に保たれている。これは種の中で互いに生存競争が行われ、その勝利者は最も有利な変異を偶発的に持った固体で、これが何代も選択されるうちに種の変化が起こった』というものでした。

またダーウィンは、ラマルクの獲得形質遺伝説を自説の中にとり入れ、環境も固体変異に大いに影響を与えるとしています。このダーウィンの進化論については、百二十年以上も生物学者や遺伝学者の間で論争されてきましたが、今もって結論は出されておりません。現代の主流は、このダーウィンの進化論を補足し一歩進めた、ネオ・ダウイズム(進化総合論)を取っているようですが、この進化総合論は分子遺伝学が発達した近代になって、獲得形質は絶対遺伝しないという事実が判明されたところから、(DNA→RNA→タンパク質、つまり情報の流れは一定方向のみに伝わり、逆進はないという絶対的教義が確立された)ダーウィンの説からこの獲得遺伝説を抜き取り、突然変異のみが進化を助長するとしたのです。分かりやすく説明すると、『通常生物は子孫保存のために沢山の子供を生むが、その子供たちが外敵や同種の生存競争から生き残るのはすぐれた種のみで、劣ったものは滅びてゆく、しかもその固体に優劣の差が生ずるのは突然変異であり、

その突然変異の中でも特に優位な固体が生きのび、それが度重なる内に進化が促進される』というのです。この外にも、進化を促進させるのは単に環境のみであり、長い年月の間には獲得形質も遺伝すると主張する学者もおりますが、今もってはつきりしないのがこの進化論なのです。それでは私の意見を述べる前に、ダーウィンを初めとする既存の学説を覆すいくつかの根拠を上げてみることにしましょう。

人はなぜ、単細胞から霊長動物といわれるまで前進的進化をしてこられたのじやろうか？ これに答えられる人は誰もおりません。かろうじてラマルクだけが、『生物は元々前進的進化の潜在能力が備わっている』と説明しているだけで、他の学者は誰も答えられないのです。なぜなら、それを認めれば唯物論的考えを放棄し、目にみえない『何』かを、つまり『神』を認めなくてはならなくなるからです。彼らはそういう力や頭から否定し、生物の前進的進化能力を唯物的に論じようとするから、おかしな突然変異説をもってこなくてはならなかったのです。もしダーウィンの唱える自然選択説が正しいなら、生物は最終的にすべて人間にならなくてはならないじやろう。なぜなら、進化の最終目標は人間にあるはずだからです。ならば、人間の祖種と同時期に発生(今日の定説では、人間は魚類より枝別れしたといわれている)した生物が、今もって進化していないのはなぜじやろうか？ (三億年前のデボン紀に棲息していたといわれるシーラカンスや、貝類、ナマコ、クラゲ類など数多い)百歩譲って、途中で高等生物と下等生物に分かれたという説を認めたとし

ても、次の謎が解けない。

単細胞から魚類へ、魚類から両性類へ、両性類から爬虫類へ、爬虫類からほ乳類へ、ほ乳類が更にさまざまな種に分かれ猿へ、そして猿から人間へと進化したなら、なぜその途中の形態の化石が見つからないのじやろうか？（猿人、原人などの呼び名の骨が発掘されているが、あくまでも猿は猿、人間は人間で、中間的な化石は見つかっていない）またラマルクの唱える『獲得形質遺伝説』を認めたとしても、なぜキリンは首を伸ばしてまで高い木の実を食べる必要があったのじやろうか？ 周りに背の低い草木類がいくらでもあったらうし、たとえ木の実しかなかったとしても、首が長くなるのを待つより木に登る能力を身につけた方が手取り早かったはず。またラマルクは生物の自然発生を認めているが、それなら太古から現在まで途切れなく自然発生しているはずだから、進化途中の形態が残ってなくてはならないはずなのに、その化石が見つかっていない。現在の生物学者の間では、生物の自然発生は認めていないから前述したことは当てはまらないとしても、次の謎はどう説明するのか？

地球は生成当初、炎のように燃え、それが冷えて地殻が形成され海ができたといわれているが、隔離された地球で、それもそのような炎熱の中から、どうして生き物が誕生したのであろうか？ ある学者は、宇宙からやってきた隕石が孢子を持ってきたといっているが、その隕石に運ばれた孢子も炎熱の中から生まれた

はず。なお百歩譲って偶発的発生を認めたとして、なぜ現在偶発的発生はないのだろうか？

次に生物学者は姿形ばかりにとらわれ、肝心な人格についてあまり触れようとしません。人がものを考え創造する力もち得たのは、突然変異で単に細胞が優位に組みあわされた結果なのじゃろうか？ 私たち人間は、突然変異の産物なのじゃろうか？ 学者は都合が悪くなると突然変異説をもってきて逃げようじゃが、その突然変異が起きるのも、そうさせる何かの力が背後で働いているからではないだろうか？ その力こそ、『神』といわれるものなのです。」

「それではご老人は、人間は神によって創造されたといわれるのですか？」

科学万能の世界で生きている今の私たちには、神話や伝説はおとぎ話程度でしか受け取っていない。科学者がいう進化論の方が説得力があるように思うのだが？

「信じられないのも無理はありません。しかし騒々しい生活から一歩退いて、四季折々に見せる自然の装いや、整然と運行する宇宙の動きを眺めるとき、ふと心の底から沸き上がってくるノスタルジアは、宇宙と人間の深いつながりを証明しているのではないじゃろうか？

この宇宙には整然とした秩序があります。もし偶然にでき上がったものなら、宇宙は一瞬たりとも存在しておれないでしょう。私たちがこうして安心して生きていられるのも、目にみえない意識が全宇宙を支配し

ているからに外ならないのです。

それでは、その秩序を維持している意識とはどのようなものでしょうか？ 私たちは生物の順応性に目を見張ることがあるし、傷を癒す自然治癒力の不思議さにも驚かされます。しかし生物学者は、その治癒力がどこからきているのか説明できません。できないのは生き物を唯物的にみているからです。

この大宇宙の根底に横たわっている意識は、愛と秩序と正義に満たされた『識エネルギー』です。その『識エネルギー』が全宇宙を支配しているからこそ、恒星も惑星も衛星も一糸乱れぬ動きをみせ、生き物も意味のある生存が可能なのです。この地球上の生物はその『識エネルギー』、私はそれを『意識主』『創造主』あるいは『宇宙心』と呼んでいます。その意識主によって命を吹き込まれ誕生させられたのです。人間の目から見たら、それはあたかも自然発生的(偶発的)に見えたかもしれませんが、実はその背後にこのような意識主が存在していたのです。

私たちは時々、なぜこんな害をもたらす生物がいるのだろうか？ なぜ何の役にも立ちそうにもない虫がいるのだろうか？ と思うことがありますが、自然を冷静に観察してみると、それが他を生かす益物として活躍していることが分かり、その計らいの素晴らしさに感心させられずにはいられないのです。たとえば、食物連鎖にかかりあう数知れぬ生物は生態系を維持する一員として、お腹に住み着く大腸菌は消化調整役

として、私たちが嫌う病原菌だって、進化の抗体という形で役立ち、その存在意義を誇っているのです。それはあたかも、悪の顔と善の顔をもつ二重人格者のように、あるいは諸刃の剣のように、使い方次第で薬にも毒にもなる”という側面をチラつかせながら絶妙に生きています。

宇宙意識はこのように、あらゆる生き物に目的と使命をもたせながら地球という生命体を生かし続けているわけですが、人間は他の生き物と違い、宇宙意識の分身という形で命が吹き込まれ、万物の霊長としてあるいは地上の王として君臨させられています。

人間が猿から進化したなどと愚かな教育をするから、平気で悪を犯すのです。その罪の一部は”進化論を唱える学者にある”といわれても反発できないでしょう。

(2) 心

一般人も科学者も、この肉体がすべてだと思っております。そして人間の思考の源は脳にあり、私たちは何事もその脳の命令によって行動していると信じています。心とは脳の産物であり、脳はまた心を形成して

いる、これが今日の常識的人間像でしょう。それではここで、その脳について触れてみることにしましょう。

人間の脳は百数十億という細胞によって作られており、その重さは成人男性で二三〇〇〜一四〇〇g、成人女性で一二〇〇〜一二五〇gと、いくらか男性が重いようですが、重さが知能に関係していることはなさそうです。左右の大脳半球の表面積は約二二五〇平方センチ(約新聞紙一枚分の大きさ)、その細胞の数は生まれてから死ぬまで一定で、たとえ壊れても決して再生しないといわれています。脳は成長するにつれ多くの樹状突起をひろげ、付近の脳細胞とからみあい、神経繊維に髄鞘を発生させ脳の活動を高めていきます。つまり、成長段階で受けるさまざまな刺激や情報が、脳細胞の伝達機能を複雑化させていくようです。

さて、筋肉や神経繊維が電氣的振動を出すことは、一九世紀の始めころから知られていましたが、脳からも振動が出ているのではないかと考えたイギリスの生物学者ケイトンは、兎の脳に電極をあて精密な電流計を取りつけ脳波の計測に成功しました。これが脳波計測の初めだといわれています。今日ではエレクトロニクスの発達により精密な計測が可能になり、脳の位置的働きもかなり知られるようになりました。その位置的働きは主に、頭頂葉と後頭葉の部分は、知覚・認識・理解をつかさどり、前頭葉は思考・創造・意志の精神活動を、そして側頭葉は記憶や判断をする場所だといわれています。しかし物質である脳から、思考・知恵・記憶・美的感覚・喜怒哀楽・恋心などの感情、つまり『心』が本当に生まれてくるのでしょうか？ そ

うではありません。脳の機能は、単に情報や刺激を伝える中継所にしか過ぎず、五感から入ってきた情報を分析し、判断し、行動指令をだすところ、つまり『心』は別にあるのです。それでは一体心はどこにあるのでしょうか？ 心の存在場所については、昔から色々取り沙汰されてきました。つまり心とは、脳の中に存在するとする脳室局在論、心臓にあるとする心臓論、肝臓にあるとする肝臓論、肺臓にあるとする肺臓論などですが、いくら臓器を裂いても心があったという話は聞いたことがありません。当然です。心は物質を超越した異次元のものですから、いくら臓器を裂いても見つかるはずはないのです。ただし異次元のものではあるが、三次元的に言えば、どうも胸の辺りが、心のありからしいのです。その証拠に、私たちが感動したり悲しくなった時に胸に込み上げてくるのは、心臓が大きくなったのでも、肺臓が膨張したのでもなく、感動や悲しみの感情が膨んだ結果がああ込み上げなのです。また、思い出せそうで出せない時、胸や喉のところで何か引掛かった感じがしますが、これは記憶庫が胸の辺りにあることを証明しているのです。だから昔から、『胸の傷が痛む・溜飲が落ちた・胸が騒ぐ・胸がときめく・胸がわくわくする・胸が踊る』などの言葉遣いがされてきたのです。」

でも「怒り心頭に発する」というように、怒りは頭で感じるのではないだろうか？

「怒ると頭がカーツとなるのは、血が一瞬脳にのぼるからです。しかしその前に、必ず胸が高ぶっている

はずです。もし本当に物質である脳がすべてを支配しているなら、睡眠中近くで音がしてもなぜ聞こえないのか？ 匂いがしてもなぜ匂いを感じないのか？ 五感はあるとき完全に開放されているわけですから、音は鼓膜を通じて脳に伝達されているはずですし、匂いも鼻腔を通じて脳に伝わっているはずですが、耳や鼻や脳は物質ですから、入ってきた刺激をより分けたり拒絶したりするはずがない、なのに感じないのは、それらの器官は単なる伝達中継所で、それを受けとる意識が別に存在しているからではないでしょうか？ つまり寝ている状態とは、意識(心・魂)が肉体から離れている状態をいい、目覚めている状態とは、意識(心・魂)が肉体に入って五感を支配している状態をいうのです。そしてその心の存在場所を三次元的に言えば、胸のあたりにあるということです。」

では記憶のカラクリは、どうなっているのだろうか？

「記憶は脳の神経細胞に一時傷痕を残すことでまず脳に滞在し、すぐに想念帯(意識の帯)に刻まれ、さらに潜在意識に落ち込んで最終的に次元の違う記憶庫で保存されるのです。激しいショックを受けたとき、その記憶がなかなか消えないことがあります。これは脳細胞に深い傷痕をのこすためです。でも脳細胞に刻まれた記憶は、どんなショックであっても遅くて数ヶ月、早ければ数日で消えるはかなさをもっています。細胞が刻々新しいものと交換されていくことを考えれば、時間と共に記憶が薄れていくのは当然でしょう。」

どんなショックも時が解決するといわれる理由もそこにあり、だからこそ私たちは絶望から再起することができるのです。こうして脳から想念帯に刻まれ更に潜在意識に落ちこんだ記憶は、次元の違うところで永久に保存されることになるのです。だから少し前のできごとは、左側頭部の脳で思いだそうとし、何十年も昔の記憶を思い出すときは、胸の辺りで思い出そうとするのです。しかし前世の記憶を思い出すとなると、そう簡単にはいきません。なぜなら、顕在意識を静め、想念帯を清め、潜在意識へ降りていく必要があるからです。」

(3) 人間とは何か

「さて、科学が二面性をもっているように、宇宙も二面性をもっています。男女、陰陽、時間空間、物心、などがその代表でしょうが、コインは両面があつて用をなすように、宇宙も意識界と物質界という二面を認め合い干渉しあつて、二つの世界の存在を可能にしているのです。そして意識界こそ、二つの世界のリードオフマンなのです。ですから私たちも宇宙心から分かれたとき、まず意識界にその姿を現し次に物質界へと転身していったのです。その意味で意識界は、私たちの故郷となったのです。」

物質界に転身した人間は、そこで五つの感覚器官を与えられたわけですが、それが眼・耳・鼻・舌・身の五感だったわけです。当初人間の心は宇宙心と通じておりましたから、自身の存在意義も使命も悟っており、意識界とのやり取りも自由にできました。そして、地上に理想世界を築くため、一生懸命奮闘していたのですが、時を経るうちに杖の役目である五感に惑わされるようになり、やがてミイラとりがミイラになってしまったごとく物質の世界に迷い込んでしまったのです。しかし全知全能の宇宙心が、それを予期しないはずはありません。宇宙心は迷妄から人間を救いだす方法を、中庸という法の中にちゃんと用意しておかれたのです。中庸とは大宇宙の基本の姿であり、調和への指針です。また人間が目指さなければならぬ美しい流れでもあります。宇宙心はその流れの中心に住み、いつも慈愛の眼差しで私たちを見守ってくれているのです。もし流れに逆らい中心から離れようとしたら、きっと強力な愛の吸引力をもって引戻そうとするでしょう。その愛の吸引力が、時には病となり、事故となり、戦争という自滅の悲しい姿となり、天変地異という自然の怒りとなって現れてくるのです。

中庸の心から離れば離れるほど、そのギャップが激しければ激しいほど、吸引力も強くなり、苦しみと悲しみは深まっていくでしょう。でもこれも宇宙心の愛の証であり、我が子可愛さの叱咤激励のムチなのです。その苦しみがあればこそ人は反省し、中庸に戻る心を思いだすからです。ライオンはかわいい我が子を

谷底に突き落とすというではありませんか。愛は峻厳でなければならぬといわれますが、それこそが本當の愛の姿ではないでしょうか？ 私たちはそんな自然の教えを手本とし、間違いのない人生を歩まなくてはならないでしょう。

さて、この世はたえず変化変滅をくり返し、一時も同じ姿を保つことは許されません。大自然がそうであるように私たち人間もいつか老い、病に倒れ、死を迎えます。だから昔の人はこの世を“浮世”とか“うたかたの世”とか、うまい表現をしてきたのです。『諸行無常』とはそのはかなさを語っているのですが、私たちはその無常を深く考えないで一生を送ってしまいます。そして年老い、死が近づいてはじめて、人はその死がどこに通じているか恐れ戦くのです。

肉体の一生なんて、宇宙のタイムスケールから考えれば線香花火にも似た一瞬です。でも私たちは、そんなはかない存在ではないのです。今まで、泣き、笑い、感動していた人間が、肉体が消滅したからといって人格まで失ってしまうものでしょうか？ 今日までの苦勞も、喜びも、情熱を傾けたことも、愛を注いだことも、すべて泡のように消え去ってしまうものでしょうか？ それは単に、物質の中だけの出来事だったのでしょうか？ 人間って、石ころみたいなそんな虚しい存在なのでしょうか？ そうではないはずです。肉体は一時の衣であり、器であり、乗り物ではないのでしょうか？ かつて何度も乗り換え、今もこの肉体に乗

り移り、明々と命を燃やし続けているのではないのでしょうか？　これを仏教では輪廻転生とっておりますが、これこそが生命の真の姿であり人間の正体なのです。」

「心が永遠の存在だとしても、それは宇宙心のことであって、私たちの人格、つまり自我とか個我とかいわれるものは、肉体の死と共に消滅してしまうのではないのでしょうか？　本当に、今の私が死後も存在するのでしょうか？」

私も死について興味があったので、その種の本を読みあさったことがあったが、納得する解答は得られなかった。だから昨日、人は生き通しの生命であると聞かされた時も、私は半信半疑だったのである。

「消滅するのは肉体のみで、この世で体験した喜びや悲しみなど一切を携え、人は故郷である意識界へ帰っていくのです。死を考えない人が多いようだが、真剣に死を直視している人は永遠の生を直視していることになり、死から目を背けている人は、生にも目を背けていることになるのです。死は生の目覚めであり、出発点なのです。」

(4) 靈界の存在

「それでは、やはり靈の世界はあるのでしょうか？」

なかなか信じられないのがこの種の話である。

「靈の存在は昔から色々取り沙汰されてきましたが、一般的にはまだ信じられておらんようです。いつて否定する根拠もありますまい。目に見えない電波の存在を否定する人は今はおりません。ならば、目に見えないからといって靈の世界を否定するのは、それこそ非科学的ではないでしょうか。人はとかく目に見えるもの、肌を感じないものは否定しがちです。中でも科学者といわれる識者は、不可知論として頑ななほど拒絶反応を示します。一般人でもこの話になると、直ぐに証拠をみせよと迫ります。私は逆に、では存在しない証拠をみせて下さい」と質問しますが、この問いには誰も答えてくれません。私は体験から靈の世界は百パーセントあると断言しますが、五十歩譲ってここでは確立半々ということで話を進めることにしましょう。確立五割ということは、靈の世界があるか無いか半々ということですね。では仮に、そんな世界は無いとしましょう。そのことで、あると信じて生きてきた人たちに何か失うものがあるでしょうか？ 損することがあるでしょうか？ 何もないのです。それに対して、もし靈界が本当にあるなら、ないと信じて、

この世で好き放題に生きてきた人たちは、それこそ大変なことになるでしょう。なぜなら、この地上での生き様が霊界にまともに反映されるからです。

一言つけ加えておきますが、霊の存在の証拠は幾らでもあるのに、無いという証拠はどこにもないのですよ。なのにあなたは、わずか数十年の人生体験から得た常識と五感を信じ、霊界はないと断定してしまおう。科学者も目に見える研究結果だけを信じ、意識界などないと断定してしまおう。これはいささか軽率ではないでしょうか？

よろしいですか。物質界と霊界は次のような関係にあるのです。この物質界のすべての物質が、分子の組み合わせによって出来ていることは今や誰も否定しないでしょう。その分子は原子の集まりで、原子は更に陽子と中性子を核とし、その周りに電子を携え、物の存在を可能にしています。さきほど、宇宙は二面性をもっており、背反するもの同士が、支え合い、干渉し合い、補い合って物の存在を可能にしているといいますが、では物質を作っている分子や原子にも、背反するものが存在していると考えた方が自然ではないでしょうか。つまり陽子を支える反陽子、中性子を支える反中性子、電子を支える反電子の存在も否定できないということですよ。当然、反分子なる反物質の存在も否定できなくなる。その反物質の世界こそ、霊の世界の実態なのです。

物質はエネルギーの集中凝固したものであると現代科学は言っておりますが、そのエネルギーは一体どこからきているのでしょうか？ エネルギーは目でみることも触ることもできませんが、私たちはあると思っております。つまり私たちは、さまざまな道具に変換してエネルギーの存在を知ることが出来るわけです。私たちの意識も念も見ることはできませんが、肉体という道具の中で働くことで存在を証明しているのです。ならば次元的にいつて、意識もエネルギーも、同次元と考えてよいのではないのでしょうか。

そうなのです。物質は識エネルギーの凝結したもののなのです。私たちの意識は物質に比し、遙かに精妙なエネルギーであるため、通常波動の粗い物質に介入することはできません。でも同じ識エネルギーであることから、全く操作できないわけでもないのです。イエスキリストは数枚のパンを裂いて何千人もの飢えを癒したといわれますが、これは反物質を意識によって組み立て物質化した好例なのです。でもこれは、宇宙の法を完全に理解した者だけにできる技であって、余人にできる技ではありません。でも、宇宙の法が解明される時代がくれば、決して不思議でも何でもなくなるのです。今後人類は、反分子を上手に利用することを覚え、私たちの生活に大いに潤いをもたらしてくれるでしょう。もっとも、それが悪用されると、とんでもないことになるので、人の心が成熟するまで、その全容は明かされないでしょうが……。

(5) 宇宙を支配する意識

さてこの宇宙をみなされ、地球は太陽の周りを約三六五日かかって一周し、自らは二四時間かけて自転しております。惑星の公転は一定で、太陽や惑星の自転も一致します。宇宙の運行は整然と行われ、調和の中にあります。ミクロの世界を覗いて見ても、原子や分子の組みあわせの見事さに驚かされずにはいられません。これらの動きは、すべて偶然の産物でしょうか？

植物は誰に教わるでもなく四季を知っており、季節が到来すれば芽をだし花を咲かせ実を結びます。動物も同じように、季節に応じ身の置き場を変えます。だが、彼らには自我というものがありません。なのに自然の動きを敏感に察知し、自分たちの生存を可能にしています。これは単に長年の間に培われた反復癖や、あるいは遺伝形質の中に性質や能力を受け継いだものといいい切れるでしょうか？ このようなこともありません。

ライオンも驚も必要以上の捕獲はしないし、明日に備える蓄えもしません。食べ残した物は、惜しみなく他の動物に分け与えています。ハイエナはその残りものを食べて生きているし、ハゲ鷹もその恩恵にあずかっているのは知っているとおりです。また肉食動物の数は周りの草食動物の数によって、草食動物の数は周り

の草木の量によって一定を保っています。このように自然は、誰がどう手を下しているわけでもないのに見事な調和をみせています。これは目にみえない意識が、自然を差配しているせいではないでしょうか？ 私たちが読んでいる本にしても、い・ろ・は・に・ほ・へ・と・といった文字が、偶然によせ集まったものではないはずです。私たちの住んでいる家にしても、材木や瓦や釘を放り投げたらいつの間にか家ができて上がっていたというものでもありません。この宇宙の創造物も同様に、素材(分子、原子)が偶然に組み合わさってきたわけではないのです。この大宇宙を創造したのも、私たちの肉体を作ったのも、本を作ったのも、家を作ったのも、その背後には必ずそれを作った何者かが存在していたのです。したがって進化論のように、物質が偶然に都合よく進化したのではなく、作品にはすべて作者が存在していたのです。その作者を私は、宇宙意識(神)あるいは宇宙心と呼んでいるのです。

その宇宙心は、愛と、秩序と、正義と、美意識をそなえ、あらゆるところにおいて自らの思いを具現させようとしているのです。ゆえに大宇宙の運行も、星々の運行も、そこに生息する生き物たちも、秩序ある生態を保つことができているのです。当然人間も、この意識からはみだすことは許されません。しかし悲しいかな、人間だけがこの意識に逆らっております。なぜでしょうか？ それは、人間には他の生き物にない自我意識があるからです。その自我意識が勝手に絵筆をふるうから、宇宙心が望むものとは似ても似つかない

絵ができ上がってしまったのです。それではなぜ、人間だけにこのような特殊な『自我』が与えられたのでしょうか？ もし、あなたに自我がなかったらどうなるのでしょうか？」と、老人は私を見て言った。

「そうですね、自分の存在も、家族の存在も、苦しみも、悲しみも、喜びも、宇宙の存在すら分からないでしょう。」と私は答えた。

「もし肉体が自分なら、死は何を意味するじゃろうか？」

「すべての終止符を意味するでしょう。何も感じなくなるのですから当然です。」再び私は答えた。

「唯物論を唱える人は、肉体を自分だと思っているから、肉体の死はその人そのものを消し去ってしまうじゃろう。ならばあなたの死は、宇宙の死を意味しないじゃろうか？ 理由は、宇宙を存在させていたのはあなた自身だからです。」

「でも実際は、私が死んでも宇宙は無くなっていないでしょう。」

「だが宇宙の存在を認めていたのは、あなたの自我意識ではなかったかな？ あなたの自我意識が宇宙の存在を認めていたから、宇宙は存在していられたはず。その自我意識の消滅は、すべての存在物を消滅させてしまうことになりはしないだろうか？ 家族も、友人も、恋人も、会社の同僚も、太陽も、月も、星も、あなたが認めていたから存在していられたのですぞ、その認識者がいなくなれば、当然認識される方もなく

なってしまうのではないだろうか？」

「でも客観的にみたら、その人物がいなくても宇宙は消滅していないでしょう。もし本当に消滅するならば、毎日数え切れないほどの宇宙が消滅しているはずですよ。」

「でも死はあくまで主観的なもので、客観的に感ずることはできないはずじゃ。あなたが死んで何も分らないなら、宇宙がその後存在しているかどうかさえ分からないのですぞ？ 分からないということは、宇宙の消滅を意味するのではないだろうか？ あなたが死んだ瞬間、本当に宇宙がなくなっただけかも知れないですよ！ あなたはただ、それを確認できないだけなのです。」

「・・・？」

「それでは、宇宙は一体どこへいったのだろうか・・・？ 心配はいらない、宇宙はどこにもいつてはいないし、消滅もしていない。宇宙は過去・現在・未来を通じ、厳然として存在している。宇宙は永久に消え去ることはないからじゃ。それでは、あなたは一体どうなってしまったのだろうか？

安心しなさい！ 宇宙が消滅しなかったように、あなたも消滅していない。なぜなら、あなたの意識が消滅していないからです。肉体が意識を作ったことが、すべてのものを消滅させたのです。だから肉体が無くなっても、決して宇宙が消滅しないのです。いや宇宙が永遠の存在だからこそ、あなたも永遠の存在で

なくてはならないのです。

そこに何かが存在していても、その存在に気がつかなければ、それは存在しないのと同じなのです。認識されて初めて、そこにそれが存在できるのです。認識されない存在は、存在の価値も存在の意味もないのです。いや認識が、その存在を作り上げているのです。そこにそれが存在しているから認識したのではなく、先に認識があったればこそ、そこにそれが存在できたのです。したがって、宇宙のはじめに認識があり、存在はその後に認識され、存在させられているといえるでしょう。

友人がやってきた。「やあ！」と私が手を上げたが、友人はいつこうに私に気づいてくれない。友人の視線は、私のそばを歩いている美人に集中している。友人にしてみれば、その時私は存在していなかったのです。

このたとえのように、宇宙の存在を認める者があって初めて宇宙は存在し、存在意義が出てくるのです。今まで宇宙が存在していられたのも、今後永遠に存在するためにも認識が必要で、それを認識してやれるのが私たち人間なのです。人はそのために存在させられているといつて良いでしょう。だから宇宙が永遠なら、私たちも永遠でなければならないのです。私たちが永遠でなければ、宇宙は永遠を保つことができないからです。したがって肉体は有限であっても、私たちの魂・心・意識は、宇宙と並ぶ永遠者でなければならないのです。人間は神の子のいわれは、実はこんな理由から来ているのです。」

- ・宇宙は永遠の存在である。
- ・その宇宙はあなたが存在させている。
- ・よってあなたは永遠の存在である。

「私とは一体何者だろうか？ 私が死んだら本当に私はなくなるのだろうか？ このことは、一時たりとも私の頭から離れなかった。でも、どんなに考えても分かるはずもない。だが私としては、次のように結論づけなくては自分の何かが許さなかったのである。

もし私の意識が肉体に付随して作られたものなら、肉体の消滅と同時に意識が無くなるのは当然だろう。しかし永遠に続く時間の中で私と呼べる意識が、再びどこかの肉体に生じないとはいいい切れないだろう。なぜなら、今現に私は存在しているからである。としたら、今の意識と今後生ずる意識との関係、あるいは以前に生じていた意識と今の意識との関係は一体どうなるのだろうか？ もしそれらの意識がまったく別ものなら、以前の意識に責任をもつ必要はないし、後々の意識にも囚われる必要はないだろう。ただおもしろおかしく、今の肉体が消滅するまで人生を楽しんだら良いだろう。しかしもし前の意識と今の意識が、あるいは今の意識と後々の意識が何らかの関連性を持つとしたら、無責任な生き方はできなくなる。なぜなら、今

後持つであろう自分の意識を、より良い状態にしたいのは人情だからである。私がこう思うのは、次のような理由からだ。

- ・ 同じ環境に生まれた兄弟なのに、（一卵性双生児）なぜ性格や能力が違うのだろうか？
- ・ なぜ、生まれたばかりの赤ちゃんが不幸にあうのだろうか？
- ・ なぜ、貧乏な家（貧しい国）に生まれる人と、裕福な家（豊かな国）に生まれる人がいるのだろうか？
- ・ 成長するにしがいがい、なぜ心に癖がでてくるのだろうか？

このような理由から、私はどうも前の肉体の意識と、今の肉体の意識とが別物だと考えられなくなっていたのである。そしてその思いは、老人の話聞くうちにますます強まってきたのだった。」

「ところでギリシヤの哲学者エピクロス（前三四一〜前二七二）は、死についてこのようにいつている。『死はもろもろの悪いものの中で最も恐ろしいものとされているが、じつはわれわれにとって何ものでもないのである。なぜかといえ、われわれが存するかぎり死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである。そこで死は、生きているものにも、すでに死んだものにもかかわりはない。』

なぜなら、生きているものところには、死は現に存しないのであり、他方、死んだものははや存しないからである』(岩波文庫『エピクロス』出版・岩崎允訳)

なるほど・・・生あるときは死を見ないし、もし肉体の死が万事なら、死んだときには死の自覚はないのだから、そこに死を見ることはないだろう。でも彼は、死を間違って捕らえている。つまり彼は、死後意識はないとした上で死は見ないとしたが、実際は肉体の死後も意識は存在しているのだから、“肉体の死は見ても、本当の死は見ない”としなければならなかったのです。多くの者が無責任な生き方をするのは、このエピクロスのような考えをもっているからです。もし死後も自分の意識が存在し、その意識の持ち方によって住む世界が違っていると知ったら、決して無責任な生き方はできないじゃろう。」

(6) 人間は神の幫助者

「前述のことから、人間は宇宙意識から分れた意識の分身であることが理解されたでしょう。実は人間だけでなく、命を燃やしているすべての生き物は、宇宙心の分身なのです。すなわち、植物も鉱物も動物も宇宙心の分身であり、生命そのものといえるのです。『神は舞い落ちる葉一枚一枚をご存じである』といわれるのも、その舞い落ちる葉一枚一枚が神ご自身であるからです。ただその中において人間だけは、宇宙を客観視できる唯一の存在者として他の生き物より高貴な存在といえるでしょう。さきほども触れたように、もし人間のような客観的観察者がいなかったなら、慈愛の真心も、生命の躍動も、美の感動すら感じることもなく、宇宙は灰色のまま漂うほかないでしょう。それこそ、無、無、無、無、です。人間という認識者があるからこそ、神意の把握も、美の感動も、生の喜びも受容でき、そこに素晴らしい物語も展開されてくるのです。そう考えると、ただ漠然と肉体の一生をまっとうする無目的な人生は、どうやら間違っていることに気づくでしょう。

ではここで人類の目的と使命について、もうすこし掘り下げ考えてみることにしましょう。

一、源初、宇宙心から分れた人間意識は、親と同じような純白で汚れなき慈愛の塊でした。勿論この段階では、大我の断片としての存在であり、まだ個性色はつけていません。したがってそのままでは、所期の目的を達成するには余りにも弱々し過ぎます。そこで宇宙心は、その意識を一旦物質界に落とし、困難な環境の中から力強い忍耐力と不屈の精神を築き上げ、元来もちあわせていた慈愛の中に兼ね備えさせようとしたわけです。

このように目標の第一は、心を強くする精神修行にあったのです。

二、二面性を持つ宇宙の一つが意識界であり、もう一つが物質界であると述べました。この二つの世界は車の両輪のようなものですから、うまく歩調が取れなくては安定な走行は望めません。ですから、物質界を調和させる神の幫助者が必要になってきたわけです。その幫助者が、私たち人間なのです。ですから人間は、自らの心を磨く目的と、この地上界に理想世界を建設するという、二つの使命を持つことになったのです。

三、地球上で理想世界が完成された暁には、大宇宙の兄弟との交流も、また意識界との交流も盛んになっていくでしょう。人類はそれを契機に、広く宇宙に第二の地球を求めて飛び出していかねばなりません。この宇宙には、まだまだ未熟な魂が満ち溢れています。その魂たちには、どうしても地球のような修行の場が必要なのです。地球人の昔がそうであったように、大人になった地球人も、他の天体に肉を移植する使命を

果さなくてはならないのです。

こうして宇宙心の分身である人間は、自身を鍛え上げると同時に、地上界に理想世界を実現させ、それを大宇宙に広げていくという三つの使命を持つことになったのです。」

「それでは、宇宙心の最終目標はどこにあるのでしょうか？」

そのようにして進化する宇宙は、最終的に何を目指しているのだろうか？ そんな素朴な疑問がふと私の脳裏をかすめた。

「宇宙心がめざす意識の高揚に果てはありません。したがって、果てのないものを理解することは永久にできないでしょう。ただ人間の意識レベルで推量すれば、『一点の光源から放たれた無数の光が、元の一点に帰る旅』といえるかも知れません。その旅での体験は、どれほど多くの実りをもたらしてくれることでしょう。」

(7) 磨きあい

「さて、私たちが意識界から地上界に降りてきた目的の一つは、この地上界を調和させることにありました。しかし人間は、心につけてはならない歪みをつけてしまい、地上界を調和させる以前にその歪みを取りのぞく仕事が先になってしまったのです。

生まれたばかりの幼年期には、まだ心に歪みはつくられておりません。しかし、青春期に入り少しずつ社会環境に染まっていくにしたがい、潜在していた業が浮き上がってきて心に歪み(角)をつくっていきます。そしてそれは、中年期になると一層増幅され、ますます鋭い角をつくることになります。角が鋭くなればなるほど痛みや苦しみが増すのは道理ですから、この頃になると人生の悩みや苦しみが深くなっています。でも、その悩みや苦しみの中から正しい生き方を学んでいくのですから、この痛みや苦しみは薬といつて良いでしょう。

こうして厳しい環境にもまれていく内に、三角形が四角形に、四角形が五角形に、五角形が六角形に、と次第に円みを帯びてきます。人生も晩年ともなればこの円みも一層促進され、人は落ち着きを深め、ゆつたりとした生き方をするようになります。こうして八十年ほどの人生体験を踏んだ人間は、肉体を脱ぎ捨て意

識世界へと帰っていくわけです。この繰り返しが、いわゆる輪廻転生といわれる生命循環の姿なのです。如来とか菩薩といわれている魂は、地上の習わしを良く知り尽くしておりますから、その極意を伝えようと身を犠牲にして地上に降りてくるのです。」

「じ老人の話を聞いていると、人間は苦勞するために生まれてきたとしか思えないのですが？」

「いいえ、そのようなことはありません。本来人間は、喜びの内に修行できるようつくられています。それが苦しみに転じるのは、あくまでも人間側に非があるからです。ではどうしたら喜びの内に修行できるのか、聖者や賢者の残した言葉を参考に考えてみることにしましょう。」

(8) 幸福を求めて

一、幸福の定義

「人の幸せって何か？ と問われて、あなたははっきりと答えられますかな？」

「・・・？」

「私たちは普段何気なく “ 幸せ ” という言葉を使っていますが、幸せの本当の意味を理解して使っているじゃろうか？ もし “ 幸せな人 ” をどう定義するかと問われたら、あなたはどうか答えられますかな？」

老人は催促するように私を見た。

「それは、 “ お金や財産のある人 ” と答える人もいるでしょうし、 “ 健康が一番だ ” という人もいます。よう。また “ 家庭円満が何より ” と答える人もいるかも知れません。殆どの人は、 “ そのすべてを持ち合わせた人 ” と答えるでしょう。私もそう思います。」

今の世にあつて、幸せってそんなものではないだろうか？

「たしかに、お金や財産や地位や名誉があり、健康でなお家庭が笑顔で満ち溢れていれば、それが幸せといえるかも知れない。でも、人はいつまでも健康でいられるものじやろうか？ いつまでも生きられるものじやろうか？ いつまでも親子が一緒に暮らせるものじやろうか？ 人は古い、病み、死んでいくものです。子供は成長し、親から離れていくものです。お金も財産もいつまでもあるものではありません。」

たしかに、いわれてみればその通りかもしれない。でも私たち凡人が求める幸せって、そんなものではないだろうか？ それ以外の幸せってあるのだろうか？

「それでは、どのような人を不幸な人というのか、それが分かれば本当の幸せが見つつけられるかも知れません。」

“そりゃ、お金も、財産も、地位も、名誉も、家庭もなく、不健康な人さ”と先程とは反対の意見が返ってきてそうですが、本当にそうでしょうか？ 乞食をみれば誰もが不幸せな人と思うでしょうが、当人にしてみれば自由気ままに生きられ、案外幸せを感じているかも知れませんよ。反対にきらびやかな衣装をまとい、高級車を取り回し、豪邸で暮らしていても、様々ながらみに縛られ案外苦しんでいるかも知れませんよ。

幸不幸というものはこのように、傍で感じるものと必ずしも一致しているとはいえないでしょう。なぜなら、幸不幸というものは客観的なものと思われがちですが、実は主観的なもので、それも当人の心情によつ

て、コロコロ変わる、雲を掴むようなものだからです。外見で計り知れないもの、当人だけの心持、それが不幸の正体ではないでしょうか？」

そういわれてみれば、私にもいくつか心当たりがあった。ある大金持ちの家庭では、物質的豊かさはそれは羨ましいほどだが、なぜかいつも家庭内にいざこざがあり、家族の心からの笑顔は見られない。反対に、子沢山で経済的には苦しいが、いつも笑顔の絶えない家庭もある。こうみると、どうやら物やお金の多寡が人の幸せを決定づけているとはいえないようだ。

「さてここで、人の欲望には、限りがないという、心の傾向性を、科学的に捕らえた法則があるので、紹介しましょう。

ドイツの生理学者であり哲学者でもあるフェヒナー（一八〇一～一八八七）は、人の感覚とその認識を研究しているうちにおもしろい発見をしました。それは“感覚の強さを等差級数的に増すためには、刺激の強さを等比級数的に増やしてやらなくては効果が薄い”という発見でした。つまり彼は、“感覚というものはあくまでも主観的なもので、外から認識したり測定することはできないが、一定の法則にしたがって変化していく実態を掴むことができる”と気付いたわけです。感覚が、一、二、三、四、五、と、一定の強さで増していくためには、刺激の強さを、一、二、四、八、十六、と、一定の比率で高めてやらなくては効果が薄い

というのです。これを分かりやすく説明すると、年収百万円の人が二百万円に昇給した時の喜びと、年収一千万円の人が一千万円に昇給した時の喜びは著しく違ってくるというのです。当然といえば当然の話ですが、私たちはこの心の傾向性を見過ごして、ただ欲望だけをエスカレートさせているのではないのでしょうか？ フェヒナーの法則を普段の生活にあてはめれば、なるほどと思われる事例が数多く見つかるはずですよ。

私の子供のころは、今のように入物が豊かではありませんでした。その当時アメ玉一つ貰った時のあのうれしさ、今思っても胸が踊るほどです。またその頃のごちそうといえは、年に数回の母の手作りカレーライスくらいなもので、普段は実にお粗末なものでした。ところが今は、毎日が盆か正月がきたようなごちそうばかりです。これでは、喜びもおいしさも半減するのは当然でしょう。おもちゃ一つ取ってみても、最近では少々のものでは子供たちは満足しなくなりました。いや大人にしても消費感覚が麻痺し、より派手でより高価な品々を買いあさっては、満ち足りない心の空白を埋めようとしています。人間の欲望には際限がないので、今以上の満足をえたいと思えば、次にはその倍以上の刺激をもってこなくては満足できなくなる。最近の消費濫費の実態を突きつめれば、この欲望を企業側がうまく利用した結果といえるでしょう。つまり、派手な宣伝でまず消費者をこちらに向けさせ、次に目先を変えた品々で消費意欲をかきたて、”隣はもう買いましたよ”の殺し文句で購買意欲を誘っているのです。

現代人はなぜ限度を弁えぬ消費に走るのでしょうか？ それは満たされぬ心の寂しさや空しさを、物によって埋めようとするからではないでしょうか？ でもどんなに物を買えばあっても、決して心は満足しない。なぜ満足しないのか？ それは、心が永遠を求めるのに対して物は有限だからです。永遠の心を持つ人間が、有限なものにすがろうとするとところに無理があり、その不安やいらだちがまた物を追い求めるといふ悪循環を生むのです。もちろんその背景には、物を通して永遠の幸せを手に入れたい願望のあることは否定できませんが、物に頼っている限り、決して永遠の幸せを手に入れることはできないのです。」

二、価値観を越える

「いつの時代も、人は幸せを求めて歩む旅人でした。『幸福の青い鳥はどこに？』探せども、探せども、幸福の青い鳥は見つからない。本当に青い鳥は存在するのか？ それとも夢か幻か？ そんな疑心暗鬼な気持を抱きながら、人は諦めず今日まで幸せを追い求めてきました。私は幸せの青い鳥は存在すると断言します。なぜそういえるのか？ それはその気になりさえすれば、今すぐにでも、手に入れられるからです。それは秘境にあるのでも、お金や宝石の中にあるのでも、ましてや地位や権力の中にあるのでも無く、一自身

近な私たち一人ひとりの心の中に存在するからです。さてそれでは、一人ひとりの心の中にどんな形で存在するのでしょうか？ それには、価値観によって幸せの捕らえ方が違ってくると思いますので、まずはその価値観について考えてみることにしましょう。

卒業式に歌う“仰げば尊し”の一節に、“身を立て名を上げやよ励めよ”という個所が出てきますが、これが長い間私たちが求めてきた価値観ではなかったでしょうか。あなたは子供の頃、大きくなったら“偉くなれよ”と親や知人から激励されなかったでしょうか。この“偉くなれよ”の中身は、一体何だったのでしょうか。それは“末は博士か大臣か”のニュアンスが込められていなかったでしょうか。最近では少々変わってきて、“一流学校に入って一流会社に勤めろよ”あるいは“事業家になって金儲けしろよ”もしくは、“著名人になれよ”というものに変わってきたかもしれませんが、いずれにせよ大衆が求める価値観は『立身出世』に尽きるでしょう。

昔から、家柄、血統、身分、といったものを何よりも重視する人がおりますが、これもその人たちにとってみれば大切な価値観の一つでしょう。特に最近では、知識、頭の良さ、教育の程度といったものを重視する傾向がありますが、これなども、目にみえない価値観として、大切にされている一つでしょう。

形に見えるものとしては、お金、財産、絵や骨董品、宝石、といった物質的なものですが、これらは

特に肌で感じられる大衆向きの価値観として、現代社会では最も貴ばれているようです。その外に、ボランティア活動に生きがいを感じている人、過疎地で病人を救おうと献身的な働きをしている人など、実に素晴らしい生き方だと思えますが、これはしっかりと信条に支えられた価値観の一つでしょう。

変わったところでは、主義主張を振りかざし政治運動や社会改革に没頭している人、滝にうたれ山野を駆けめぐり荒行で肉体を虐めている人、地下鉄や橋の下でたむろする人など、これも特殊な人生観の持ち主なのかもしれません。さてこれらの価値観を整理してみると、次のように分類できると思います。

- 一は、物質的なものに価値観を置く者。
- 二は、精神的なものに価値観を置く者。
- 三は、その両方に価値観を置く者でしょう。

それでは現代人は、一体何に価値観を求めているのでしょうか？　いうまでもなく、物質偏重時代に生きている現代人のほとんどは、一番目の物質的なものに価値観を求めていると行ってよいでしょう。家柄、身分、地位といった価値観も、つき詰めれば、金や財産が下地となっていていますから、結局物質的な価値観に舞い戻ってしまいます。当然ながら、がむしゃらに金儲けに走る、肩書を求める、権力にすがるといった生き方に走ります。でもいくら手に入れても心は休まらない？　幸せ感が得られない？　なぜか心にポツカリ

とした空白がある？ 一体その足りないものは何だろう？ そうだ、永遠のものが足りないのだ！ そこで昔から大金持ちや権力者が求める究極のものは、不老長寿なる薬だったのです。でも、そのようなものがこの世にあるはずがない。したがって、どんな大金持ちも、老後の日々は穏やかにならず、暗い憂鬱な日々を送らなければならなくなるのです。今日ではそのような夢を追う人はいなくなりましたが、それだけに再び振りだしに戻り、物に幸せを見いだそうと躍起になるのです。しかし何度もうのように、物は永遠でないから手に入れても心は満足しない、そこで益々現代人の不安は高まっていくのです。

私たちは、外的環境である教育・思想・習慣・情報などによって知らず知らずのうちに価値観を身につけていきます。もちろん、身につける要因は外的環境だけではありませんが、(輪廻転生でつけた価値観もある)大きな影響を受けていることは間違いないでしょう。この外的環境によって身につけた価値観は、相対的なものですから浮草のように落ち着きがありません。年令により、性別により、時代により、場所により、あるいは立場の違いによってもクルクルと変ってしまいます。したがって、このような価値観にとらわれている限り、人の心は安らぎません。だからそのことに気付いた人は、安らぎを心の中に求める宗教に入るようになるのです。

でも心がいくら大切だからといって、お寺や教会に入り浸っていて良いでしょうか？ ろくに仕事もせず、

瞑想にふけていて良いでしょうか？ 滝に打たれ山野を駆け巡り、行に一生を捧げて良いでしょうか？ いいえ、それではこの世に生まれてきた意味がありません。心に価値観を置く生き方は、精神修養によって身につくものですが、それは決して社会を否定し人間味をなくすことではありません。物を無常なものとしながらも、人間社会を不合理多いものとしながらも、そこに身を浸し生きてこそ三番目の価値観を輝かすことができるのです。

三、幸せの正体

さて、これまで幸福について考えてきましたが、まだはっきりと結論が出されたわけではありません。たしかに“心”に幸せを求めることでしたが、それではあまりにも具体性がありません。もし聖人のように生きられるのでしたら（絶対を悟り、絶対の中に身を置くことができたなら）幸せの本質をつかむこともできるでしょうが、それを現代人に求めるのは酷というものです。したがって、凡人が幸せを手にする唯一の方法は、幸せを受け入れる心の状態をどう整えるかでしょう。それでは、現実に私たちが幸せを感じるのとはどんな時でしょうか？ そしてそれはどこで感じるのでしょうか？

第一に、五感で快さを感じたとき。

第二に、欲心が満たされたとき。

第三に、愛する者と満ち足りた生活をしているとき。

分け方は色々ありましようが、おおよそこんな時に私たちは幸せを感じているはずで、しかも、それを感じるのには肉体ではなく心でしょう。快感も肉体から心に伝わって感じるし、舌で味わったおいしさも心で受け止め感じます。また自己顕示欲を満たした時の満足感も、愛する人と充実した日々を送っている時の喜びも、お金や宝石を手中に収めた時の喜びも、すべて心が感じているはずで、その喜びは多寡によって感ずるより、質によって感じる方が大きいのではないのでしょうか？ その質を高めるのも己の心です。

たとえば、ここに月給二十万円の給料とりの奥さんがいたとしましょう。今日の物価からすれば収入は多い方ではありませんが、慎ましい生活をすればやっていけない額でもあります。そして、夫が一生懸命働いてくれたお金だからと感謝して使えば、不満は起きないでしょう。だが隣の裕福な家を羨んで、うちの亭主が甲斐性なしだから貧乏なのだと思えば、不満は膨れ家庭に波風が起きますでしょう。これでは幸せな家庭は築けません。どんな幸せも他人と比べ不満をいつていたのでは、決して手にすることはできないのです。同様にどんな不幸も “まだまだ不幸な人はい、私はまだ幸せな方だ！” とプラスに考えれば、大きな不幸

も小さな不幸に変えることができるのです。要するに幸不幸は、その人の考え方ひとつで決まってくるという事です。

たとえば病氣や事故などの不幸も、“これは生き方を変えなさいという警告だな！”と謙虚に受け取り悪かったところを直していけば、ノイローゼにならずにすむのです。また他人からひどい仕打ちを受けた場合も、これは自分を大きくする試練だと受け取れば、憎しみも恨みも感謝の思いに変えることができます。要するに、憎むべきことも恨むべきことも、考え方ひとつで喜びや希望に転じることができるということです。では、どうしたらそのような心をもつことができるのか、そのコツを教えましょう。

宇宙の心根は何度も言うように、“愛と調和”です。すべてここに通じているのです。これを信ずる事です。つまり“つらい苦しい中に必ず実りがある”“苦しみは幸せに通じている”という宇宙の法則を信ずることです。悪く受け取って暗い人生を歩むか、良く受け取って明るい人生を歩むか、欲と脅迫によって進化する道を歩むか、宇宙の法則を信じ進化の道を歩むか、この違いは天と地の開きがあるでしょう。

このように法則を信じ何事もプラス思考で対処すれば、どんな困難な出来事も、どんな不幸な出来事も、良きものに変換させられるのです。そうなることと老いることも、病むことも、別れることも、死ぬことも、すべて感謝の一念に包むことができ、出てくる言葉はただ“ありがたい”の一言になるのです。ただしひとつ

注意しなければならないのは、どんなにプラス思考を守っても、宇宙の正流に逆らった生き方をしてはなりません。宇宙の正流とは、“愛と調和”の美しい流れです。この流れに逆らわずプラス思考を持って生きれば、もう鬼に金棒です。

すべての人が一様な幸せを得たいと願っても、決してできるものではありません。なぜなら、人それぞれ幸せの感じ方が違うからです。ですから、幸せとはこんなものだ、あんなものだ、形にして見せられるものではないし、また人と比べられるものでもないのです。心のもちかた次第で、得たり失ったり、小さくなくなったり大きくなったり、またどこにでも転がっているありふれたもの、それが幸せの正体なのです。このように幸せの青い鳥は、どこにでもいるそんなありふれた鳥だったのです。

(9) 宇宙の法則

人間は、五感から受ける刺激や情報に惑わされやすくできております。そして心は、どうしてもこの五感に感応し、苦楽の情をつくるものです。といって、この五感がなくてはこの世でまともな生活は営めません。

それではどうしたら、この相反するものを上手に使いこなすことができるのか？ その方法を教えましょう。おいしいもののはつい食べすぎてしまい、快いものにはすぐ傾いてしまう。五感というものは、実にヤンチャ坊主のように落ち着きがありません。それだけに揺れ動く心に歯止めをかける必要があります。勿論そのために良心があるわけですが、この良心を惑わす顕在意識という大敵があります。この顕在意識は五感と結びついてさまざまな欲念をつくりますが、ほとんど五感に都合の良いものばかりです。したがってこの顕在意識に、知性と理性のクサビを打ち込まなくてはなりません。そのクサビとなる理性とは、宇宙の法則です。この法則を信じ守ることによって、いまわしい五感を制御することができるのです。」

「しかし、倫理や道徳も守れない私たち凡人が、雲を掴むような宇宙の法を守るなど、とてもできるとは思えませんが？ また宇宙の法を守ることが、どうして実生活に結びつくのでしょうか？」

「あなたは、宇宙の法を単に観念的なものと考えているようですがとんでもない！ 私たち一人ひとりの

言動が、個々人の人生に、人類の運命に、絶大なる影響を与えているのですよ。」

「宇宙の法と実生活の関わりを、どのようにして知ることができるのでしょうか？」

「それにはまず、法の中身を知らねばなりません。法を知り遵守していくうちに、私たちの運命がいかにこれらの法則に左右されているかが分かってくるでしょう。」

「誰でも知ることができるのですか？」

「勿論、それが人間の特権なのですから……。」

一、原因と結果の法則

「さて宇宙の法則の一つに、原因と結果の法則というものがあります。この原因と結果の法則を、宗教の世界では『因縁因果の法則』といい、物理の世界では『作用反作用』の法則といっておりますが、どちらも同じものです。

壁を叩くと壁からも叩き返されます。それも強ければ強いように、弱ければ弱いように、叩き返されます。これは叩いたという『原因』に対して、叩き返されたという『結果』が生じたためです。これは心の世界で

も同様で、たとえば人に優しくすれば人から優しくされ、笑顔で応じれば笑顔が返ってきます。反対に怒りには怒りが、憎しみには憎しみが返ってきます。人を殴り相手から殴り返されるのは、この原因と結果が即座に現れたためです。もし結果がこのように即座に現れるなら、誰も法則を疑わないし逆らおうとしないでしようが、残念なことにこの世は波動の粗い世界ですから、結果が現われるまでに、それ相当の、時間がかかります。その結果も人の目に見えなかったり、見えても変形しているため、なかなか信じられないのです。

この世では、盗みをしても人に見つからなければ法的責任を負うことはありません。良心を痛めない人なら、のうのうと一生を過ごすかも知れません。結果が直線的にみえないため、人は悪事を犯してしまうわけですが、決して“やり得”ということはありません。なぜ私ばかりが？ なぜこんな不幸が？ なぜ、なぜ、なぜ？ と嘆くのは、その結果が遅まきながら到着したためです。

ギリシャのアンチポンは、『法には人為法と自然法があり、人為法に背けば人為的に罰を科されるが、人知れず犯した罪は人為法で罰せられることはない。しかし自然法の前では、目撃者の有無にかかわらず必ず罰が与えられるのだから、人前では人為法にしたがい、目撃者のいないところでは自然法にしたがうべきである』と人間に警鐘を打っております。またイエスキリストは、『自分が撒いた種は自分が刈り取らなければならぬ』といい、釈迦は『因果応報』を説いています。彼の偉大な聖者や賢者が、このように口を揃え

て警告しているのに、なぜ私たちは信じようとしないのでしょいか？

それでは、アンチポンが唱える自然法が本当に実在するのか、ここで物質に働く作用反作用の法則と、心に働く原因と結果の法則を比較し、少々科学的に分析してみることにしましょう。

〔物質に働く作用反作用の法則〕

原因Ⅱ結果

“作用と反作用は直線上にあり、大きさが等しく向きは反対である”これをニュートンの第三法則といいます。

〔心に対して働く作用反作用の法則〕

原因Ⅱ結果

“作用は超空間にも働き、反作用の力は等しいかもしくは大きく、その向きは発した源に返ってくる”というふうになります。

物質の世界は波動が粗いため、“作用”は作用した人以外飛び火することなく作用と対等な反作用が生じますが、心の法則は池に石を投げ入れた時に生ずる波紋のように四方八方に広がり、それも超空間に影響を与え広がっていきますから、与える影響は絶大なものとなります。特に、同じ波動をもつ人の心に当たると

波動は増幅され、さらに影響は拡大します。その波はやがて震源地へ返ってくるわけですが、その波の力や大きさは、発した時と同じか何倍にもなって返ってくるのが通例です。原因Ⅲ結果は、そういう意味なのです」

「それでは一旦原因を作ったら、決して結果から逃げられないのでしょうか？」

「残念ながら、逃げられないのがこの法則の厳しいところです。」

私はドキツとした。

「それでは悪事をした人は、永久に救われないのでしょうか？」

私もこれまで何度か悪い事をしてきた。しかしある事件を境に、二度と過ちは犯すまいと心に誓い、なんとか最近では正しい道を歩めるようになったが、救いが全くないとなると一体どうなるのだろうか？

「いや、救われぬとはいっていません。たしかに法則は絶対ですから、原因に対する結果は必ずやってきますが、次のような方法で結果を繰り延べたり弱めたりすることはできるのです。その方法は、『反省』し二度と過ちを犯さないように心に誓うことです。人間であるかぎり誰でも過ちは犯します。でも、人間の真価を決めるのはそこから先です。

罪を犯した人の生き方には、次の三つがあると思います。

- 一、過ちを過ちとも気づかず過ちの上塗りをする人。
- 二、過ちを認めながらさらに過ちの上塗りをする人。
- 三、過ちを認めて改心し二度と過ちを犯さない人。

この三つの中で一番救われないのは、一でしょう。なぜなら、その人は過ちを過ちとも気がつかないほど、意識の進化が遅れているからです。二は、過ちを過ちと分かっているながら、欲望を捨て切れず過ちの上塗りをする意志の弱い人です。この人は、過ちを過ちと認められる意識の持ち主ですから、理性を保ち意志を強く持ったら、すぐにでも立ち直れるでしょう。

さて、過ちに気がついたその時から二度と過ちを犯さないと心に誓い、その後の生活を正していったら反作用は変形させられます。つまり返ってきた悪念の波動が、良念の波動に打ち消されるといふ波の干渉によって結果が弱められ、致命的難事から逃れられるのです。そうなると、百の借金を十ずつ十回に分けて返済したり、借金をお金で返すのではなく、別な形で罪の償いをすることも可能になるのです。そうなると、死によって償わなければならない反作用も、軽い怪我何回ですむかも知れないし、大事故が軽い事故何回ですむかも知れない。この物質の世界は結果が訪れるまでに時間がかかるので、それまでに修正し反作用を変形

させる芸当も可能なのです。それはあたかも執行猶予を与えられた罪人のように、執行猶予期間中正しい生き方をすれば罪が償われるようなものです。このように、悪果を修正できるのは宇宙心と同じ波動をもつこと、つまり、正しい思い・正しい言葉・正しい行いをすることです。その思いと行為が本物になるにつれ、悪しき波動は静まっていくでしょう。

因果の法則は神の愛そのものであるといわれるのも、愛は毒消しの役目をしてくれるからです。
※原因と結果は輪廻しているが、愛は因果をも越える。

二、慣性の法則

気分良く運転しているとき急に横合いから犬が飛び出し、あわてて急ブレーキをかけた！ そんな体験をした人も多いでしょうが、そのとき車は直ぐに止まらず、しばらくは惰性で進んだはずです。これが二つ目の法則、『慣性の法則』です。この法則は、心の傾向性という形で心にも働くのです。

“なくて七癖”といわれるように、人にはさまざまな癖があります。仕草に癖のある人や言葉に癖のある人は、他人から指摘を受け修正もしやすいですが、心の癖は目に見えないだけに見過ごされ、本人が自覚し

ない限り修正は困難です。その種類も十人十色、しかも一人で二つも三つも抱えている場合がありますから修正が大変です。

さて死ぬ直前に、“懺悔したからあなたの罪は許されましたよ”と気休めをいう人がいますが、懺悔しただけで罪が許されるなら、この世に罪人は一人もいなくなるでしょう。今まで極悪非道の行いをしてきた人が、死ぬ直前に懺悔したからといって本当に救われるものでしょうか。もし本当に救われるなら、若い時好き勝手に生き、死ぬ間に懺悔して許しを乞えば良いでしょう。しかし、そんなペテン師まがいが通るはずはないのです。たとえ本心から悔い改めたとしても、心の癖というものは抜けるものではなく、『慣性』という形で意識界まで引きずって行き、そこで苦しむことになるのです。これを宗教では『業』といっておりますが、私たちがこの世で修行する理由の一つに、この癖をなくすことがあるのです。

さて、この法則を先程と同じように対比させてみましょう。

「物体に働く慣性の法則」

“物体に力が働かなければ、あるいは物体に働く力が釣り合っている場合は、静止物体はいつまでも静止しようとし、運動している物体は同じ速度でいつまでも等速運動を続けようとする”

これを物体に働く慣性の法則といい、ニュートンの第一法則です。この法則は次のような性質をもっています。

“物体に力が働いているとき、物体には力と同じ向きの加速度が生じる。加速度 a の大きさは、働いている力の大きさに比例し、物体の質量 m に反比例する”このことから次の式が得られます。

$F = ma$ (a は加速度の大きさ、 m は質量、 F は働いている力の大きさ)これをニュートンの第二法則といいます。

このことからいえるのは、物体に力を加えなければ物体はいつまでも静止したままであり、運動している物体に逆方向から力が加えられなければ、その物体はいつまでも等速運動を続ける。そして物体に力が働けば、加えられた力の方向に加速度が生じ、その加速度の大きさは力に比例し質量に反比例するということです。

【心に働く慣性の法則】

ある m という悪念を発したとします。思いを発するにはエネルギーが必要ですが、そのエネルギーは念の力 (a) です。その思いは行動 (F) に駆り立てるでしょう。しかしその思い (念) の力が弱ければ、行動にまでつ

ながらないかもしれません。なぜならば、物質が動くとき摩擦や抵抗が生じるように、心にも逆念つまり摩擦や抵抗力が加わるからです。逆念とは良心から発せられる理性です。しかし、 a の力がますます募って理性を上回ってしまうと均衡が破れ、そこに ma という運動がはじまり行動化されるでしょう。

これで、 $F=ma$ が心の法則にも当てはまることが理解されたでしょう。理性を打ち破り己の欲望を満足させた思いは癖として生き残り、縁があれば再び行動に駆り立てるでしょう。今度は当初とは違い、すでに等速運動を続けていますから念の力はそれほど必要とせず、少々躊躇（良心が咎める）はするものの、実行に移すのはそう困難ではないでしょう。これが度重なると、他人の意見に耳も貸さず暴走することになるわけですが、これは癖が理性を上回ったために起きる一種のノンブレイキ現象です。つまりそこに、『業』が作られたわけです。これも早いうちなら修復も簡単ですが、度重なると修復にはそれ相当の逆エネルギーと時間が必要になってきます。それも質量が大きければ大きいほど、修復は困難を極めるでしょう。心の世界で質量(m)とは、思いと行為の内容をさしているのですが、どのような思いや行為が質量の大きなものか、ここで代表的なものを挙げてみましょう。

『狂思想家、狂宗教家、狂闘争家、破壊活動家、異常性欲者、殺人者、暴力者、盗癖者、人を平気で陥れる者、怒りと愚痴で調和を乱す者、人を憎んだり、恨んだり、誹謗したり、自己中心的な者、見栄っ張り、

意地つ張り、自己顕示欲の強い者、心配性、ネクラ性』などでしょうが、これらの癖も何種類か絡みあって浮かび上がってくるから厄介です。

人がこの世に生を受けたときには、みな正しい心をもっているのですが、傾向性(業)というものは心の芯に残り火のように残っており、人生道を歩む中で縁に触れ発火しはじめるのです。ではこの傾向性(業)を直すには、どうすればよいのでしょうか？

物体が加速している場合、まず加速している原因を捜し出し取り除く必要があります。加速度を取りのぞくと物体は等速運動に変わるから、今度は逆方向から同じ力を加えてやれば物体は静止します。心の癖もこの要領で止めればよいのです。ただ物と違って心の場合は、原因を捜し出すのが厄介です。心の癖というのは案外と自覚していないもので、また他人もはばかり指摘してくれませんから、なおざりになってしまします。その欠点を捜し出すには、自分の心をジーツと見詰める『反省』以外ないでしょう。反省だけが心の欠点を見つけ出してくれるのです。反省によって原因をつかまえたら、あとは加速度を加えないよう普段の想念と行為を謹めばよいのです。しかし、これで安心してはなりません。等速運動に変わったとはいえ、まだ悪癖の根は残っているわけですから、その根を掘り起こし完全に息の根を止めるまで油断は禁物です。息の根を止めるには、逆方向から力を加え等速運動を完全にストップさせることですが、それは先ほどもい

ったように、良い想念を常にもち続けそれを行為につなげることです。その行為も人前だけの繕いではなく、人知れずと、つまり良心の前でやるところに意味があるのです。

こうして悪い等速運動が止まり、良い等速運動がはじまるわけですが、それを意識して加速していくと、今度は良い癖(善業)がつきはじめるのです。

※悪癖を修正するには、宇宙心と一体になることである。

三、同類共鳴の法則

・ブランコに乗っている人の後ろから、その振幅にあわせて力を加えてやると、そんなに力を加えたように思えないのに、ブランコの振幅は次第に大きくなっていきます。このように、固有の振動数と同じ振動数の振動を与えることによって物体に影響を及ぼす現象を共振といいます。

・同じ長さの二つの振り子と、違った長さの二つの振り子を用意し、その四つの振り子を一本の糸で吊り下げます。そしてその内の一つの振り子を振動させると、振り子の長さの振動数は決まっているから、同じ

長さの振り子が共振を起こしてよく振れます。

・同じ振動数をもった発音体を向かいあわせ、一つの発音体を叩くとそれにつられもう一方の発音体も音を発します。これを共鳴といいます。

これらの実験でも分かるように、物体はすべて固有の振動数というものをもっており、ある物体が強制力を受けると、補足空間内にある同質の物体は何らかの影響を受けます。この現象を私たちの実生活に当てはめてみると、実に興味深い事実が浮かび上がってきます。

子供の頃は自覚せず無心で遊んでいましたが、今考えてみると同じ性質の持ち主同士が仲間をつくって遊んでいたように思います。これは社会へ出てからも同様で、釣り好きは釣り好き同士が、山登りの好きな者は山登りの好きな者同士が、酒好きは酒好き同士が集まるといったように、いつの間にか似通った者同士が集まって行動していることに気づきます。それも仲間が多くなると、一層促進されるようです。結局この現象は、同じ性質の心をもった者同士は共鳴しあう証明になり、自分を見極める一つの羅針盤ともなるのです。

“類は類を以て集まる・類は友を呼ぶ”のたとえのように、同類は同類を呼び、良い人のところには良い仲

間が、悪い人のところには悪い仲間があつまってくるのです。

※共鳴は心の反応、悪には悪の共鳴が、善には善の共鳴が。

四、質量保存の法則(エネルギー保存の法則)

・黄燐を入れたフラスコを秤に掛け、次に中の黄燐を燃焼させます。そうすると、燃焼し終わった後のフラスコ内には五酸リンに姿を変えた燃え滓が残ります。しかし燃焼後の重量には、少しも変化は起きていません。

・リチウムに水素イオンを高速で衝突させると、リチウムの原子核が壊れ二つのヘリウムの原子核ができます。この二つの原子核を加え、リチウムと水素原子核を加えた質量と対比してみると、ヘリウムの質量が少ないという質量保存の法則に反する結果が出てきます。しかしこの異常な現象も、アインシュタインの相対性理論で決着がつかます。つまり質量が少なくなった分、エネルギーに変換されたのです。消えた質量を m 、発生したエネルギーを E 、光の速度を c とすると、次の方式が成り立ちます。

$$E=mc^2$$

これによってエネルギー保存の法則が成り立つのです。要するに質量保存の法則は、エネルギー保存の法則でもあったのです。

物質はこのように、エネルギーが同居しているのです。質量は計量すればその存在を知ることができますが、エネルギーは人の感覚で捕えることは不可能です。しかし、すべての物質がエネルギーに変換できるところから、その存在を知ることができるでしょう。私たちの意識エネルギーも目には見えないが、同じように肉体に同居して行動を共にしているのです。

※意識はエネルギーの一種であり、エネルギーはまた意識の一種である。その意味では、意識の充ちた状態が宇宙と言えるのである。

五、循環の法則

この宇宙のすべての存在物は、循環の法則によって永遠の命を保持しています。大気の循環もそうです。水の循環もそうです。大宇宙の消滅生成もそうです。生物の誕生死もそうです。

〔炭素の循環〕

大気中の二酸化炭素(CO_2)は植物の中に取り込まれ、光合成によって有機物に変えます。草食動物(二次消費者)が植物を食べると有機物は草食動物の体内に移り、肉食動物(二次消費者)がその草食動物を食べると、有機物はさらに肉食動物の体内に移動します。そして、その動物が死ぬと今度は細菌や微生物によって分解され、結局二酸化炭素となって大気に戻っていきます。

〔窒素の循環〕

窒素は大気中に窒素ガス(N)として大気成分の約八十パーセントを占めています。直接これを利用してできるのは根粒細菌などいくつかの種類に限られています。生物の遺体や排泄物が腐敗細菌によって分解され、アンモニウム塩が酸化して硝酸塩になったものを植物は吸収しますが、この吸収された窒素化合物は、今度植物体の中で有機物化合としてタンパク質に合成されます。動物はその合成されたタンパク質を吸収し、

動物性タンパク質に再合成して生命を維持しています。動物体内のタンパク質の一部は生命活動に消費され、アンモニア、尿素、尿酸となり尿成分として排泄されますが、このような排泄物や動物の遺体は、再び分解者によってアンモニウム塩や硝酸塩に還元されるのです。

〔水の循環〕

地球の地表面積の約七十二パーセントは水で覆われています。その水は太陽の熱によって蒸発し、雲となり、雨となって地上に降り注いでいますが、その一部は蒸発したり、高山で雪になったり、地表を流れ川へ合流したり、沼や湖に止どまったり、地中へ浸透して地下水になったり、草木類の根から吸い上げられたりしますが、結局大部分は海に流れていきます。海に流れ込んだ水は再び蒸発し、雲となって次の降雨を待つことになるのです。

大気中の水は、おおよそ年に四十回転するといわれますから、九日に一度入れ代わっていることになります。しかし、地下水などの回転は遅く、通常の場合で二、三年、最も遅いサハラ砂漠などでは二、三万年もかかって入れ替わっているといわれます。これも循環のなせる技です。

〔生命の循環〕

私たちの魂(意識)は、地上で精子と卵子の結びつきのを待って子宮に飛び込んでいきます。飛び込んできた

生命は、以後細胞意識を上手にコントロールしながら正常な肉体を形成し、十月十日をもって産声を上げます。しかし空気に触れるや否や過去の記憶は完全に潜在し、全く新しい人生を歩まねばなりません。（あなたという意識生命は、Aという名の肉体の操縦者となって八十年余の人生を送ることになるのです）

こうして再生した生命は、新しい人生体験を魂の中に刻んでいき、やがて携えてきた目的を果すと、地上に肉を残し再び意識界へ戻っていきます。私たちの生命がエネルギーであるように、この宇宙に遍満する生命はすべてエネルギーの一種なのです。そのエネルギーが時に、水の循環として、物質の循環として、宇宙の脈動循環として（膨張と収縮の循環）、生命意識の循環として姿を変えていくからこそ、永遠の命が約束されるのです。もしすべてのエネルギーが固着し、循環を停止してしまっただうなるでしょうか？ 水は渾み、物質は静態し、宇宙意識は一箇所に止どまって輝きを失い、闇一色の世界が訪れるでしょう。"私は死にたくない、永遠の命が欲しい"という人がいたとすれば、それこそまならぬ老いの身を引きずり（生きる屍となって）永遠に地上をさま迷わねばならないでしょう。今生でやりとげられなかった目的も、新しい肉体がもらえるから果たせるし、無念の悔しさや漸塊の思いも、次生あるからこそ晴らすことができます。生命の平等性はこの永遠の循環があるから成り立ち、私たちは今の環境に甘んじられるのです。

※生命はさまざまな姿を見せるが、それは永遠の循環あればこそ、もしすべての循環が停止したら、命の火

花は闇の彼方に葬り去られるだろう。

老人は一息ついた。

老人の沈黙は西の空に一筋の流れ星が走るまで続いたが、それを満足そうに見送ると老人はおもむろに口を開いた。

「ミクロの世界も、マクロの世界も、実に人間によく似ています。だから人間を知るには宇宙を理解すればよく、宇宙を知るには人間を理解すればよいのです。宇宙は人間の拡大図であり、人間はまた宇宙の縮図なのです。

どうでしょう。人間の正体がご理解できましたかな？ 人間の正体が理解され、多くの人が人生の真の目的を知った時、奉仕社会は喝采をもって迎えられます。」

第四章 人類は何処へ行く

(1) 必然性の原理

さて人類の歴史はこれまで、偶然に進行してきたのでしょうか？ それとも必然的支えによって運ばれてきたのでしょうか？

新聞の社会欄を広げると、交通事故や殺人事件の記事や、先生が生徒の暴力行為によって負傷した記事や、自殺者の記事などが載っています。一面をひっくりかえせば、中東におけるきな臭い記事や、テロによる破壊行為の記事や、経済摩擦による関係大臣の苦悩の記事などが載っています。その裏をひっくりかえせば、農薬被害や酸性雨被害などの記事が紙面を賑わっています。どこを見ても、ほほえましい記事など見当たありません。失意と、落胆と、溜め息ばかりの世の中です。こんな世の中を政治家は、この繁栄は我が党の政策

のお陰であると自慢しているのですから、狂気の沙汰としかいようがありません。これが人類の取るべき道だったのでしょうか？ 他に取るべき道はなかったのでしょうか？ またこんな世の中が、いつまでも続くと思っているのでしょうか？

誰も思っているわけではないのです。何かがおかしい？ どこかが狂っている？ と心の底で思っているに違いなのです。ではどこが狂い？ 何がどうおかしく？ 一体どうすべきか？ と問われても誰もが首を傾げてしまう。またどんな世の中を望み？ どんな世界なら納得できるのか？ と問えばなお混乱してしまうのが、一般人の正直な気持ではないでしょうか？

特に今の若者は、生まれた時すでにテレビがあり、冷蔵庫があり、車があった。冷暖房付きの快適な環境が整い、親は痒いところまで手を差し伸べてくれ、将来の設計もすでに打ち立ててくれている。若者はただ、親が敷いてくれたレールの上を進むだけです。しかしそんな環境が整っているにも関わらず、彼らはなぜか落ち着かず、なぜか満足できないでいる。そして何かがおかしく？ 何かが変わた？ そんな疑問がいつも頭の片すみに潜んでいる。でもその疑問も目の前の華やかさに打ち消され、それ以上深く考えようとしない。そして、

・人種が違うのだから国境があつて当然で、その国境を守るためには軍隊は必要不可欠であると思つてしま

う。

・だから侵略には武力をもって対抗するのは当然だ、と疑問もなく思ってしまう。

・人それぞれ能力が違うから、地位や身分に差ができるのは当たり前と思ひ、そこから生まれる貧富の差もまた当然と考える。

・だから物の多寡が人生を決めると思ってしまう。

・その物の配分には貨幣が必要で、その貨幣を増やすことが人生の最大の目的だと思ってしまう。

・人の運命は偶然によって決まるとするから、正しく生きるより自分の都合のよい生き方をした方が得であると思ってしまう。

・また心は肉体(頭脳)の産物と思うから、心を大切にするより肉体を大切にしたい。つまり唯物的考えに陥ってしまう。

・肉体が全てであるとの考えが、生きている間は、せいぜい楽しく生きていたら良い！ という考えに走らせてしまう。

・死は避けられない現実と思いつつも、できるだけ死を考えないようにする。だから死後のことなど考えようともしない。

・したがって、神仏の存在など信じない。

殆どの人が、こんな人生観を持って生きているのではないじゃろうか？ 私はこういう人生観を、真っ向から否定するわけではありません。それよりも、当然と思っているくらいです。宇宙心から見ればそれも進化の道すがら、そんな人生観も成長段階には必要だからです。でもそんな唯物的考えも、人生の荒波にもまれるにしたがい、いかに精神的なものが大切か知るようになるのです。私はこれを、必然性の原理が働いた結果であると思っています。これは次のような例え話で分かってもらえるでしょう。

・ある幼子が(生まれたばかりの魂)欲しい物を手に入れたいがために、人殺しをしてしまったとしましょう。その反作用として、殺されるに等しい苦しみを、味わわれました。そこでその幼子は、“人を殺めれば自分も同じような苦しみを味わうのだな!”という勉強をさせられたのです。

・次生その子供は人殺しはしなかったが、物が欲しいばかりに人を傷つけるという罪を犯してしまい、その反作用として自分も同じような傷をおわされたのです。そこでその子供は、“人を傷つけると自分も傷つけられるのだな!”ということを学んだのです。

・その教訓を生かし次生では、人を殺めず人を傷つけないよう心掛けました。でも、どうしても人の物が欲しくて、今度は盗みをしてしまいました。ところが、全く逆さまな事件が起こったのです。現実には自分の物

が盗まれて見ると、何とも腹立たしく何とも悔しい気持ちです。そこでその少年は、"そうか人の物を盗むと人の気持ちをそれだけ傷つけるのだな!?"ということを学んだのでした。

・次生では、人を殺めず、人を傷つけず、人の物を盗まない戒めを守りましたが、人を陥れるという罪を犯してしまいました。そしてまたまた、自分が陥れられるという反対の体験をさせられたのでした。陥れられて見ると、その腹立たしさと悔しさは何ともやりきれない思いです。そこでその青年は"そうか人を陥れたらこんな憤りを感じるのだな!?"ということをも更に勉強させられたのでした。

私たちはこのようにして、一步一步成長の階段を上っていくのです。これが、因果応報によって矯正される必然性の姿です。人類はこれまで、何度も過ちを犯して報いを受けてきましたが、それは必然性の中を黙々と歩かされた結果といえるでしょう。」

「それでは人生における不幸な出来事は、みな必然性の産物だといわれるのですか？」

「そうですね。私たちには惑わされやすい、五感というものが備わっています。勿論、五感があるからこそ、無事に物質世界で生きられるわけですが、それに惑わされてしまうと、とんでもない過ちを犯す事になる。そこで宇宙心自らが法の中心に座り、人間に警鐘を鳴らしているのです。その警鐘が、痛みや苦しみや悲しみなのです。この図を見て下さい。これは宇宙における大河と見立てることができるでしょう。」

老人は、石で土の上に線を引きはじめた。

「人類はこの大河の中を、進化の最終地点であるP点に向かって進んでおります。でも中には、流れに逆らう渦もあれば、流れの外へ出ようとする渦もあります。しかし、いかに逆らおうと法網に跳ね返され、正しい流れに引き戻されてしまいます。逆らった分だけ苦しみを味わい、人より立ち遅れるばかりです。私たちは、宇宙号という特急列車に乗っているようなものなのです。乗っているのがいやだからといって、特急列車から飛び下りることができませんでしょうか？」

地球の進化は人類の双肩にかかっているわけですが、その地球は太陽系の進化の流れに乗ってP点に向かっています。その太陽系もまた銀河系の進化の流れに乗ってP点に向かっています。大宇宙もそうです。だからいかに人類が逆らおうと、この流の外に飛び出すわけにはいかないのです。ということは、いかに人類社会が混迷していようと、いつまでもそのような姿ではいられないということです。」

「それでは人類の行くべき道は、すでに決定しているといわれるのですか？」

「そうなのです。私が示した奉仕社会への道は、その決定した道の一つです。」

「待って下さい！ 個人の運命も、人類の運命も、すでに決定しているなら、私たちは何も努力して苦しむ必要はないでしょう。」

「反面からみれば、その努力を生み出させるのも、必然性の原理によるものといえるでしょう。五感はそのためにあり、私たちはこの五感の強制力によって必然性の道を進まざるを得ないのです。つまり必然性の原理は、すべての法則を包摂した究極の法体ですから、それから逃れることは絶対できないということです。」

「ならば私たちは何もせず、ただ苦海に身を任せていけば良いのではないのでしょうか？」

「あなたは何もせず苦海に浮かんでおれますか？ おそらく苦しくて手足をバタバタせずにはいらられないでしょう。それでも何もしないというなら、ただ溺れ沈んでいくしかないでしょう。」

はつきり言いましょ。どんなに屁理屈をこねても、生命の取る道は、進化・前進・発展しかないので。これは宇宙生命の目的ですから、いやでも進化・前進・発展の道を歩まねばならないのです。」

「……」

「失業し家でブラブラしていると、段々と覇気がなくなりこのまま自分は駄目になってしまうのではないか？ と不安になるものですが、これは進化・前進・発展を目指す本能が、そのような不安を誘っているのです。人間は、何かに挑んでいなければいけないようにできているのです。一番恐ろしいのは、何もしないことなのです。」

「でも悪いことをするより、何もしないでいる方が無難ではないでしょうか？」

「悪も”作用“しているからこそ善にも変われますが、何もしないということ、何も変わらないということ、これほど悲惨なことはないのです。もし本当に何ももしないなら、(五感があるので、何もしないではいられない)意識は間の中に沈澱し、永久に底無し沼で喘がねばならないでしょう。だから、いやでも泳ぎ続けなければなりません。」

「それで人間の尊厳が保たれましょうか？」

「すべての法を包摂した究極の法体が、必然性の原理だといったはずです。つまり必然性の原理は、因果律を含めあらゆる法則の最上位にあるので、どんなに愚かと思える行為も、どんなに逆向きと思える行動も、作用を及ぼしている限り無意味とはならず、善悪の相互消却を通していつか進化の道に置かれることになるのです。ただ人間はそこであって、ある幅をもって生きる自由意志は与えられています。」

「しかし、その意志が法則の枠からはみ出せないのなら、本当の自由意志とはなりえないのではないですか？」

「自由意志が発揮できるからこそ、逆流したり横道にそれる者も出てくるのではありませんか？ その為に苦しんだり悲しんだりするのは、その人の自由意志と行為の結果です。」

「とはいえ、最終的に本流に返ってくるなら、それは作家の意志を忠実に演じる役者と同じで、単に小説

の筋道を歩まされている操り人形にしか過ぎません。すでにこういう結果になると書かれた筋道を、私たちはただ歩いて行くだけなのでしょう。私たちは、宇宙心という作家の操り人形なのでしょうか？」

「しかし、人間にその筋道が分かりますか？ その筋道が最終的に同じ道に通じているとしても、行く先々に無数の分かれ道があり、その先に人生の無限のパノラマが開けているのですぞ……。その分かれ道を、どの方向にどれだけのスピードで進むか、そこに人の生き方の自由があるのです。」

「……？」

「よろしいですか。たしかに大道を踏み外すことはできないが、その大道の中でどう生きるかは、人それぞれ自由なのです。人間の尊厳はそれの中で見いだすべきでしょう。」

「それでは、その流れは一体どんな流れなのでしょう。宇宙には、それ以外の流れはないのでしょうか？」

「それは、愛と正義に満たされた光明の法道、つまり慈愛の大道です。これ以外の道は絶対ありません。私たちが善をなした時、何ともいえぬ喜びで心が洗われるのは、法道上を歩いている満足感によるのです。反対に悪を犯したとき不安が募ってくるのは、法道を踏みはずした悔恨の情によるのです。もし法道が存在

せず、邪悪と不正義の道しかないとしたら、宇宙はどうなるでしょうか？」

「・・・？」

「その道は破壊の道であり、混沌の道であり、暗黒の道です。宇宙は一瞬の存在も許されません。つまり無への突進です。愛と正義に包まれているから宇宙は光り輝き、そこに温もりあるさまざまな生命が息吹はじめるのです。不正義には原理は存在しません。あるのは破壊と混沌だけです。愛と正義に満たされた宇宙だからこそ、私たちの未来は明るいのです。要するに目指す頂上は、夢と希望に満ち溢れているのです。その頂上をどう目指すか、そこに人間の生き方の自由があり、人の世に無限の物語が展開されていく素晴らしさがあるのです。」

直線を登るのも方法、螺旋を描いてゆっくり登るのも方法、途中で寄り道して息を抜くのも方法、時には下がるのが楽だからといって下がるのも一つの方法かも知れないが、どんな方法を使っても、いつか必ず頂上を目指さなければならぬのが人間の定めなのです。ならば急ぐ必要もないが、逆らって苦しむ必要もない、できるだけ着実な方法で登るのが利口でしょう。人生というマラソンに一着はないのですから・・・。」

「でも、私たちにはそれが見えません。見えるのは目の前の生事のみで、それ以外は全くの手探り状態なのです。」

「しかしこの世で体験を積んでいけば、何が善で何が不善か、何が正義で何が不正義か、どんな生き方が幸・不幸をもたらすかが見えてきて、行くべき道も定まってくるはずです。」

「・・・」

「さて時代の節目には、必ず偉大な指導者が現れ人類を引っ張っていくものですが、これも必然性の原理が働いている結果といえるでしょう。イエスキリストの誕生、アイザックニュートンやカールマルクスの誕生みなそうです。」

「では、あのヒットラーのような独裁者の誕生も、その原理の落とし子といわれるのですか？」

「歴史の全体像を見れば、それも必然性の働きによるものでしょうが、それも逆流する渦の一つに過ぎず、人類の歴史はキツチリと進化の階段を上っていたのです。私たちは歴史の一部分を輪切りに見るから悪や不幸が見えますが、もし全体像を見渡すことができれば、人類の歴史が素晴らしい流れに乗って進んでいくことが分かるでしょう。」

老人はニッコリと笑って見せた。

(2) 奉仕世界は必然性の原理がとる終局の姿である

「なぜ私の提唱する奉仕世界が必然性の産物かといえば、地球環境が有限で、資源もエネルギーも有限ながら、当然人類の生き方は制限されてくるでしょう。したがって欲望の内に展開される今日の資本主義社会は、進化の途中には必要であっても究極の仕組みとはなりえない。右肩上がりでも成長しなければいけない資本主義社会は、有限の壁を破ろうとする愚かな挑戦であり、それは人類の滅亡を意味します。もし、地球という生き物が我が身の安全を考えるなら、自分を害するものを排除するか、害しない生き方を強要するかのどちらかでしょう。もし地球にとって人類が必要ならば、地球は必ず後者を選ぶはずで、よって、『奉仕世界は必然性の原理がとる終局の姿である』という考えが成り立つのです。」

「なぜ地球は、人類を必要とするのでしょうか？」

「それは地球の進化と人類の進化は、相身互いの関係にあるからです。つまり地球と人類は、シロアリとシロアリの腸内に共生する原生動物であるトリコニンファのような、共利共生の関係にあるということです。いや本当は、人類を進化させる舞台として用意されたのが地球なのです。その証拠に、地球には水・空気・資源など、人類が生きるに必要なすべての物が用意されているではありませんか。その物を無駄なく有効に

使えば、飢餓で苦しむ人など一人もいなくなるのです。こうみますと、配分を競争原理に委ねるか理性原理（良心）に委ねるかは、必然性の原理を持ち出すまでもなく当然のことなのです。」

（3）器をつくる

「“水は方円の器に従う”の諺が示す通り水は実に素直です。同様に、人間の幼子もまた素直です。この世に生を受けた幼子の心は、みな素直で純白でういういしい。その純白な心を、赤く、青く、黒く染めてしまふのは誰じやろう。誰でもない人間社会です。当然といえば当然の話ですが、ここに不幸の原因があります。もし幼子を豊かな土壌で育てられたら、決して曲がった人間などできないでしょう。私が奉仕世界を声を大にして訴えるのは、この世に利害得失の感情をつくらせず、人の心を純白のままにしておきたいからです。この世の争いは、すべからず欲得に関係しています。人より優位な地位を、人より多くのお金を、人より有名に、この『人より優位になりたい』の欲得が、さまざま争いを生み出しているのです。

これまでメシアといわれる偉大な指導者が、幾度となく地上に降り立ち衆生に生きる道を説いてきました。またそれを受け継ぐ宗教家たちも、人の心さえ豊かになれば必然的に世の中は良くなるだろうと期待し、教

化の対象を一人一人の心に置いてきました。その効果がなかったとはいいませんが、いつも一握りの人たちに及ぶだけで、大衆に浸透するまでには至りませんでした。なぜ、いつまでたつても人の心は向上しないのでしょうか？

その理由は、

一、安定の法則にしたがい、生命活動の勢いをコントロールする必要があったこと。

二、地球が持つ使命上、未熟な魂ばかりを受け入れてきたこと。

この二つが、魂を育てる土壌に制御をかけていたのです。

一はこれからも慎重にコントロールされるでしょうが、二はここに来てやっと一段上位の使命を目指せるようになりました。したがって、それ相応の熟した魂を受け入れることができるでしょう。

このように、地球は混沌としているように見えていても、それはそれで立派に役割を果たしていたのです。したがってメシアの使命は、すべての人の心を整えるためではなく、人の世に愛と正義の火種を絶やさないための吹子役に徹していたということです。いいかえれば、地球を暗黒の世にしてならぬ配慮から、目的を持った少数の人たちだけに真理を受け継がれるよう、荒れ地に種を撒いていかれたということです(真理を受け入れられる段階に至った魂のために)さてそのような段階を迎えた地球は、そろそろ優秀な魂を受け入

れる器作りをしておかなければなりませんまい。」

「その器とは、奉仕世界のことなのですね？」

「その通りです。日本には“形から入る”という独特の文化があります。茶道、華道、武道、すべて形を大切にした文化です。勿論これに心が加われれば鬼に金棒ですが、それを一度に望むのは難しい。したがってまず形を整え、その形に徐々に魂(心)を吹き込むようにするのです。そうすれば当初はぎこちなくても、次第にその形に沿った中身ができてくるでしょう。様々な矛盾を抱えた資本主義社会という器の中でも、みな順応して生きていますではありませんか。ましてや奉仕社会という矛盾のない器に入れてやれば、何の疑問も無くすんなりと順応して行くはずですよ。人間はそれほど順応しやすい生き物なのです。」

(4) 日は昇る

「地球が誕生して約四十数億年、これまで地球は大人になる道を歩んできました。つまり幼年期から少年期を経て、いま青年期の絶頂を迎えているのです。これは地球の総質量とエネルギーの関係、銀河系宇宙に占める太陽系の位置関係からいえることですが、青年の極に達した地球は、これから熟年期へ成長してゆかねばなりません。つまり安定の法則にしたがい、(安定の法則とは、きめられたスピードに沿って進化すること)一歩高度な目標へ向かって飛躍しなければならぬ時期が近づいたということです。したがって地球人類は、それ相応の飛躍が望まれるのであり、それがさまざまな変化という形で表れるのです。」

「どのような変化が訪れるのでしょうか？」

「経済面では、資本主義の崩壊がはじまり世界経済が大混乱に陥ること。社会面では、犯罪と紛争が多発し社会不安が広がること。また奇病や自殺者が増え、人々の心に暗い影を落とすようになること。環境面では地球環境の激変により、地殻異変や気象異変が起ること。このようにいうと、人類の終末を暗示させるようで心が暗くなってしまうますが、どうしてどうして明るい出来事も多いのです。まず、

・世界のアチコチに意識改革を促す賢者たちが出現すること。

- ・超常現象を体験する人が多くなり、心というものが見直されるようになること。
- ・怪奇現象の多発によって、唯物思想に風穴があけられるようになること。
- ・これまでの常識を覆す大発見がなされ、人類の歴史や地球の歴史が大きく塗り替えられるようになること。
- ・超技術革新の進歩により、人類の未来に希望の光が投げ掛けられるようになること。
- ・優秀な魂たちが生まれてくること。

そして最大の出来事は、偉大な指導者が出現することでしょう。その偉大な指導者は、巧みな話術と奇跡を披露しながら、また多くの正法者と宇宙の兄弟の支援を戴きながら、人類を理想世界へと引っ張っていくのです。この間百数十年、人類は幾多の苦難を乗り越え理想世界へと突き進んでいくのです。」

「偉大な指導者とは一体誰なのでしょう？　ご老人はなぜ、そんな予言めいたことを平然といえるのですか？」

「歴史の節目には、必ず偉大な指導者と助力者が現れ人類を牽引していくものです。これは宇宙意志の要請であり、必然性の法則を満たすエネルギーの流れでもあります。人類の歴史を振り返って見れば、”なるほど！”と思える人物が時代の節目に必ず現れているはずですよ。だから私が平然と予言するのではなく、歴史が平然と予言しているのです。また人類が神意に逆らって進めば道が険しくなるのは当然で、これも予想

のつくところでは。間違えた道から正しい道に戻すには、肉を持った偉大な指導者と助力者が必要なのです。いつ、どこに、どのような人物が現れるかは分からないが、その指導者によって地球が、人類が、導かれるのは間違いないのです。これが、必然性の法則に導かれる人類の未来図です。」

老人は目を細めた。

「一九九九年に人類は滅亡する！」というような予言書が多く出回っておりますが、そんなことはないのですかね？」

「ありません。それは私が保証します。ただ、夜明け前に深い闇が訪れるのは避けられないでしょう。これは生みの苦しみといってよいでしょう。でも、その闇を経なければ日は昇らないのです。」

「・・・」

老人は意味深長な言葉で結んだ。

「さて、動物的な面と霊的な面をかね備えた不思議な生き物、それが人間という生き物でした。食べて、寝て、子孫を残すなどの行為はその動物的な面でしょうが、それが動物にとっては生まれもった目的と一致するので仕方がないとしても、人間はそのような生き方で満足してはならないのです。動物と違って人間は、もう少し気高い目標をもって生きなければならぬようできていますからです。その気高い目標とは、

素晴らしい芸術作品をつくるとか、スポーツで大記録を打ち立てるとか、偉大な発明や発見をして世のため人のために役立つとか、自己を啓発し真の人間像を発見するとか、負わされた目的と使命をまっとうするか、まあこの外にも沢山あるでしょうが、要するに生本能とは違ったものに情熱を注ぎ込める素晴らしさです。ところがどうでしょう。これらの幸運を手にする人はほんの一握りで、殆どの人は動物と変わらない一生を送っているのが実情ではないでしょうか。要するに、食べて、寝て、子をつくり、老いて死んでいく、といった決まり切ったパターンを歩む人が殆どだということです。勿論これも人生でしょうが、はたして死ぬ間際に“ああ、私の人生は有意義だった！”と満足して逝くことができるでしょうか？ このような人生を歩む人が多いのは、経済的ゆとりのなさもあるでしょうが、やはりしっかりとした人生に対する目標が定まっていないからではないでしょうか？

何度もいうように、人間には生きる目標が必要です。目標がなければ、ただ動物のように本能の赴くままに生きるしかないため、そこに、お金だとか、モノだとか、地位だとか、権力だとかいったものが必要になり、競い合う、争い合う、奪い合う、社会にならざるを得ないのです。もし貴い目標が見つければ、人はどんな困難も厭わぬ気概をもち、素晴らしい人生を開発するに違いないのです。

奉仕世界では、国民に生きる目標を与えることを忘れません。また、その目標を適えるための時間と環境

を与えてやれるのもこの世界の良さです。それによって人間は、動物的生き方から数段上位の生き方に転換することができなのです。」

厳しい顔つき、憂い、そして微かな希望の笑み、そのように変化する老人の顔を見ている内に、私はなぜかホツとしたものを感じた。それは最後に見せた老人の笑みの中に、人類の明るい未来を見たような気がしたからだ。

「トントン！」

耳元で音がして、私はハッと目を開けた。

車窓に額をつけるように覗き込んでいる人がいる。私は驚きながら窓を開けた。

「どうかなさいましたか？」

男は眉をひそめながら問い掛けてきた。

「・・・？」

私は一瞬戸惑ってしまった。たしか今まで、あの老人と土手で話し合っていたはずだ。それがなぜ今車の中にいるのだろうか？

「いいえ何でもありません。ちょっと寝込んでいたようです。」

私はその場をそうつくろった。

「そうですか、あまり動かないものですから、何かあったかと思ひまして・・・。」

「ご心配をおかけしました。」

「それでは。」

男は一礼すると土手に向かって走り出した。どうやら彼はジョギングの途中だったらしい。遠ざかる後ろ姿を見ながら、私は頭の中の混乱を整理できないでいた。私は夢を見ていたのだろうか？ あの老人との会話は、夢の中の出来事だったのだろうか？ それにしては余りにもリアルすぎた。

私はカーラジオを入れた。

ちょうど九時のニュースが入っていた。そのニュースを聞いているうちに私は、またまた驚きに身をくめてしまった。何と、今日は五月十五日だというのだ。ということは、老人と出会ったこの二日間は幻の二日間だったことになる。つまり、数時間の内に二日間の夢を見ていたことになる。私はラジオから流れてくる音楽を聞きながら、呆然と西の空を見上げていた。

おわりに

老人が指摘するように、人間の本性を知ることが誠に意義深いものがあります。なぜなら、それによって人間の生き様が大きく変わってくるからです。人間を単なる肉の塊とすると、物や、金や、地位や、名誉を得ることが人生の目的になってしまい、そこに競争社会や闘争社会が生まれるのは当然でしょう。それに対して、人間を意識(心)そのものとする、意識(心)は永遠のものであるから、人生の目的は平安と安らぎを求めめる方に向かうでしょう。なぜなら、心は常に幸せを求めているからです。

私たちは、幸せを誤解して受け取っているのではないのでしょうか？ 幸せは物が持ってくるのでしょうか？ お金を持つてくるのでしょうか？ 地位や名誉を持つてくるのでしょうか？ そうではないはずですか？ 幸せは、一人ひとりの心を持つてくるはずで、これまで唯物史観の道を歩んできたがゆえに、今もって理想世界が訪れない経緯を考えれば、もうそろそろ唯物主義から唯心主義に方向転換すべきではないでしょうか？ その意味では、老人が示した世界モデルは、まさに理想的なモデルだと思えます。でもそのモデルは余りにも背丈が大きいため、その背丈にあった背広が欲しいと言われても、今すぐ仕立てるわけにはい

きません。特に、人類がこれまで手掛けたことの無いモデルで、しかも寸法の大きいものですから、そう簡単に仕立てるわけにはゆかないでしょう。でも、型紙くらいなら作れるのではないのでしょうか？　そうです。人類には、もうそろそろ理想世界の型紙が必要なのです。もし、この本に心動かされ型紙でも作ってみたいと思われた方は、あなたなりの紙型を作ってみて下さい。近い将来きっと役立つ時がくると思います。

世の中には「それは理想ですよ！　ハハハハ！」と、まるで理想を語る事が不謹慎であるかのような態度を見せる政治家がおりますが、理想を語れない者に政治ができるでしょうか？　ニュートンは、リンゴの落ちるのを見て万有引力を発見したと言われますが、それが偉大な発見につながったのは、常に理想を追いかけていたからではないでしょうか？　理想を夢見、理想を追求し、理想を語るに、何の遠慮もありません。大いに理想を語って下さい。理想主義者こそ明日の担い手なのですから・・・。

まどろみの中で

大地は母であり、天は父である

地のものは地に帰り、天のものは天に帰る、これは定めである。地とは物質（肉体）であり、天とは心（意識・魂）である。我々は母なる大地から肉をいただき天の心を宿したが、いつの日か天に帰らなくてはならない。その時は、地からいただいたものは地に返し、天からいただいたものは一段と輝けるものとして天に持ち帰らなくてはならない。そのために我々は肉を持ったのである。

泥道をなぜ好む

人は言う。なぜこのような苦しみを味わわねばならないのだろうと……。しかし、今のあなたの苦しみ

は、泥道を歩いたその代償ではないのか？ 考えても見たまえ、畦道を嫌い泥道を歩けば足をとられるのは当たり前ではないか？ 畦道を行けば歩きやすいし足も汚さないのに、なぜあなたは泥道を好むのか？

法外とは泥道であり、法上とは畦道である。

天の心を知れ

『難しい漢字になぜ振り仮名を付けないのか！』と怒る前に、辞書を引く努力をしなさいとの天の心を知るべきだ。

苦勞して探し当てた道は忘れないが、人に教えてもらった道はすぐ忘れてしまうもの。もし簡単に真理が得られるなら、人は努力することを忘れ、墮落の坂道を下り落ちるだろう。

手本

この世は暗闇ばかりではない。派手では無いが光り輝ける場所もある。その気になって探せば、手本はい

くらでも見つけられるものである。なのにあなたは、どうして暗闇ばかりを探すのだろうか？ その方が楽だから！ とあなたは言うのか？ それではいつまでたっても光は見出せないだろう。

鶏卵の巡り

宇宙はなぜ永遠なのか？ と疑問を持つ人もいるだろうが、私はその人に、『宇宙は鶏卵の巡りだから』と答えよう。鶏卵の巡りとは、こういうことである。

ここに一個の卵があったとすれば、その卵を産み落とした親鳥の存在がなければならぬ。その親鳥は卵から産まれた。したがって、その卵を産み落とした親鳥の存在がまた必要である。そしてまた、その親鳥を産んだ卵の存在も……。こうしてこの話は、永遠に堂々巡りをすることになる。

宇宙もこれと同じことがいえる。宇宙が今厳然と存在していることは誰も否定しないだろう。しかし、この宇宙が今存在しているということは、この宇宙を生んだ宇宙がその前になくはならない。そしてその宇宙を生んだ宇宙がその以前に存在し、そしてまたその宇宙を生んだ宇宙がその以前に存在していたことになる。宇宙はこうして、永遠の堂々巡りをするようになるのである。

不幸の積み立て

日々良心に背いて生きている人は気の毒な人である。なぜなら、不幸の種を毎日積み立てているからである。その種は利息に利息を生み、いつか大きな不幸となって返ってくるだろう。

反対に良心に従って生きている人は幸い人である。なぜなら、幸せの種を毎日積み立てているからである。その種は利息に利息を生んで、いつか大きな幸せとなって返ってくるだろう。

撒いた種は、必ず何らかの結果を生むようになっている。ならば、幸せの種を撒いた方が利口ではないか？
厭なことから逃げるな

人の成長は、苦難の中でこそ培われるものである。その意味では、人に厭なことを押し付けている人は、気の毒な人といわねばならない。なぜならその人は、成長の種を人にただで与えているようなものだからである。反対に、人から厭なことを押し付けられている人は、幸運と思わなくてはならない。その人は、成長の種をただで戴いているようなものだからである。あなたは成長の種をあげる人になるのか？ もらう人に

なるのか？ どちらだろう？

労働本位制は連帯意識を強める

貨幣は物を入れる手段として、利殖の媒体として、また価値の貯蔵もできる便利なものだけに、人の心に欲望を育ててしまう。また貨幣は、目に見え、手で触れるだけに、何とか楽して手に入れられないものと、よこしまな心を育ててしまう。ギャンブルでひと儲けしよう、人を騙し儲けよう、あるいは金を盗む、偽札を作る、儲け仕事に目の色を変える、ガムシヤラに働く、こうしてこの社会は、お金が敵と呼ばれる修羅場が変わっていくのである。もしこの社会に貨幣が存在せず、労働の循環によって支えられる労働本位制の社会だとしたら、私達の生活はどう変わるだろう？

労働者は自らの意志で職場に赴き、そこで天職をまっとうし目的物を完成させる。この段階で自分の労働がどのような社会的意義があったかは分からないが、資本主義社会のようにここでつながりが断ち切られることはない。なぜなら、ここで貨幣という果实をもらわないからである。したがって、労働者の責任は家庭内にまで持ち込まれ、良い意味での余韻を残すのである。もし手抜きでもしようものなら、その影響は自分

の家庭内にまで忍び込み、日々の生活を苦しいものにしてしまっただろう。また資本主義社会では、労働の目的が賃金であるところから、共に苦勞してつくった目的物も、その感激が貨幣にすり替えられてしまったため、社会的性質を持つ労働力が孤独に浮き上がってしまう。しかし労働本位制の社会では、それが消費生活を通じて感得されるため、喜びを共に分かち合うことができるのである。これでは、厭でも連帯意識が高まらないわけにはいかないだろう。また他人の生活の中に自分の労働成果が輝いて見えるようになり、何故かその人たちが他人のように思えない不思議な感情も生まれるのである。

満足を擦り減らす

ある人が便利な物を買ってきたとしよう。その人はそれを使って快適さや便利さを謳歌し、一時を満足した。明日再びその物を使って便利さや痛快さを謳歌し、一時をある程度満足した。次の日再びそれを使って満足しようとしたが、一昨日のような満足は得られなかった。しかし、まあ何とか満足した。だが次の日には、全く魅力の無いものとなるだろう。こうして人は満足をすり減らし、新たな満足を探し求めてゆくのである。その代償として、自然は汚れやせてゆく。

順応性のある心

物質は順応性があるといわれる。たとえば空気の汚れたところに住むと、鼻毛がよく伸びるし、砂漠地帯に住むとまつげが長くなる。だがどんなに順応性があっても、物質には限界がある。当然、物質は質量を持ち一定の空間を必要とするから、同時に二つの物が一つの場所を占拠することはできない。つまり、それだけ物質は不自由なのである。それに対して心はどうだろう？

心は空間を占拠しないし、どのようにも伸び、どのようにも広がる柔軟性を持っている。しかし反面、使いようによっては狭く、細く、小さくなる厄介なものでもある。もし、心を小さく使ったらどうなるだろう？ 摩擦を生じさせ、たちまち争いを引き起こすだろう。逆に広く大きく使ったら、どんな争いも克服してしまうだろう。だから我々は、どうしても心の修行が必要になってくるのである。

『戦争と平和』これは一重に人の心の使い方がいいにかかっているのである。

感謝は不幸を吹き飛ばす

人の不幸は、不平不満や無感謝の心に宿るものである。もし本当に幸せになりたいなら、どんなことにも感謝できる心を持ちなさい。またどんな厭なことからも逃げない、勇気と行動力を持ちなさい。その者は手に何を持たなくても、最高の幸せを手にしたことになるのである。

神を見せる

『神を見せてくれたら神の存在を信ずる』と人はいう。風は見ることができないが、鈴の音が風の存在を教えてくれているように、神は見ることはできないが、神の体現である花・鳥・風・月が神の存在を教えてくれているのである。

現実と非現実

我々は何を持って現実と断定するのか？ これは簡単なようではなかなか難しい問題である。たとえば我々はよく夢を見るが、これは一般的には非現実と思われている。また麻薬による幻覚も非現実的なものとして忌み嫌われている。でもこれらの現象は、本当に非現実なのだろうか？

悪者に追われ必死に逃げている夢を見る。麻薬による幻覚症状で虫が肌をはいずり回る感覚を持つ。あるいは柳を幽霊と見間違っつて心臓を凍らせる。その時、当人にとってみれば、これみな現実なのである。つまり現実とは、心を揺れ動かしたその時、すでにその状態にあると言えるのである。

科学的生き方とは

科学的生き方とは、実行力のある生き方と言う。何もしないで結果だけ求める生き方は科学的とはいえない。したがって、毎日何もせず神頼みしている人は、タマゴを前にして「早く雛にかえってください！」と祈っている親鳥のようなものである。本当に雛をかえしたいなら、一生懸命タマゴを抱くことである。

『原因あれば結果あり』が科学的生き方だからである。

貨幣はあらゆる責任を断ち切ってしまう。

貨幣本位制の世界では、どんな責任も貨幣によって清算することができる。どんなに無謀な消費をしても、どんなに無責任な生き方をしても、（法律を犯さなければ）お金さえあれば責任回避が可能なのである。だからこの世界では、『お金さえあれば』が人をお金の亡者にしてしまうのである。労働本位制の世界ではどうだろう？

その世界では、一人一人の責任は輪廻することく循環し、再び自分のところに帰ってくる。たとえば、Aという人がある物を無謀に消費したとすれば、その物を生産している労働者だけでなく、資源を掘り起こしている労働者にも、原料を作っている労働者にも、輸送をしている労働者にも、市場で働く労働者にも波及していき、すべてが労働者であるこの世界では、そのツケはいつか無謀に消費したAのところに帰ってくるのである。したがって、無謀な行為がいつか我が身に帰ってくるという物理的あるいは、心理的脅迫によって、その世界では節度ある消費がなされるのである。また人に迷惑をかけた償い方も、本人が身を尽くして示す

誠意しかないから、相手も欲を募らすこと無く、ただ誠意を待つのみとなるだろう。こうしてこの世界では、誠意と誠意の施し合いによって穏やかに解決されるのである。

イライラには二つの種類がある

一つは、モノや金や地位などを欲するにもかわららず、思うように手に入れられないときに起きる欲求不満のイライラである。もう一つは、何の努力もせず、ただのんびんだらりと生きるがゆえに生じる魂の嘆きのイライラである。人は何かに打ち込んでいるとき、何かに挑戦しているとき、何ともいぬ輝きを見せるものである。何によらず、ひたむきに打ち込んでいる人を見ると感動を覚えるのは、その輝きを見せつけられるからである。その輝きに決して上下は無い。だが楽ばかり、安逸な人生ばかりを追い求めている人から滲み出ているものは、どんよりとした曇天のような暗さである。そのような人は、どんなに物質的に満たされていても、心底から喜べないのである。だからまた、その満たされぬ喜びをモノや享楽で埋めようとするのだらうが、それではいつまでたってもイライラの堂々巡りから抜け出せない。

厭なことに勇氣を持って挑戦するとき曇天は去り、人は晴れ晴れとした爽やかな気分になれるのである。

『もし、今日人類が滅亡すると100%分かっているとしても、私は息子のために弁当を作ります。』この母の言葉は実に感動的である。

『あと数年もすれば世界は滅亡するのだから、何も一生懸命勉強したり働いたりすることはしない。どうせ死ぬのだから……。』こんな放言を吐く若者が最近増えてきているという。このような若者が増えている背景には、最近ブームになっているノストラダムスなどの予言書の影響があるからだろう。つまり、『もう数年もすれば死ぬのだから、今更あくせく働いて金をためても仕方がない、だからせいぜい面白おかしく生き方が利口だ!』彼らの考えはそんなところだろう。しかし、人類が滅亡することは決してない!と断言しよう。もしノストラダムスの予言を信じ、何もせずただ漫然と生きるとすれば、二十一世紀を迎えたとき、その若者は大あわてするだろう。

もし仮に人類が滅亡するにしても、何もせず死を迎えるのは万物の霊長たる人間の生き方ではないだろう。今日命がなくなると分かっているとしても、なくなるその瞬間まで一生懸命生きることが、与えられた命に対する礼儀ではないだろうか? これは何も人類の滅亡に限った話ではない。人間の一生の『生き死に』にしても

同様である。

人はいつか必ず死ぬのである。死ぬと分かっているからといって、何もせず一生ブラブラ過ごすとしたら、人は一体何のために生まれてきたのか？　死ぬと分かっている。分かっているが、死の訪れるその瞬間まで悔いの無い生き方をするとところに、人間の尊さがあるのではないだろうか？　今日、一生懸命生きてこそ、明日もまた輝いて生きられるのである。そんな生き方をしている人には、何の不安もない。なぜなら、やることをやり遂げた人の心には、ひとカケラの悔いも残っていないからである。不安を抱くのは、ノンベンダラリと生きてきた悔恨の情が、心を煙らせているからである。

何事も飯の種にしては真心がこもらない。

教育にしても、政治にしても、宗教にしても、科学や芸術にしても、それを飯の種にしている限り本物にはなり得ない。

どんな人の心にも、必ず正義の虫は宿っている。しかし、悪の虫も同居しているのである。その悪の虫は、華やかなもの、金ピカなものに弱く、権力には更に弱い。したがって正義を貫こうと思っても、それを貫く

ことによって生活が破綻するとすれば、悪の虫が『そんな馬鹿げたことは止めろ!』と囁くだろう。現実に戻って見ると、やはり我が身が大切なのである。仕方なく、不本意ながら不正義を通すことになる。そして、もっともらしく弁解するのである。

- ・このプロジェクトは専門家の我々から見ても危険はない! だから進めるべきだと・・・。
- ・喜捨しなさい、さすればきつとあなたは救われるでしょうと・・・。
- ・あまり出来栄えは良くないが、早くお金にしなければならぬので、このへんで妥協しよう・・・。
- ・締め切りが迫っているので、適当に書きつないでおこうと・・・。
- ・儲けるためには質より量だと・・・。
- ・地位確保のため、あるいは金儲けのためなら、自らの信条を曲げてでも従おうと・・・。

こうして正義は飯の種にねじ曲げられ、良心は牢獄の中に封じ込められるのである。もし生活に心配がなければ、人々は堂々と正論を語り、誠心を表し、偽らない自分を現わすことができるだろうに・・・。

安心して生きるには

あなたが不安なのは、良心に逆らって生きているからである。良心は知っている。『法を犯す者は法にて罰せられる』と・・・。法とは、宇宙の秩序を守っている番人である。その番人は、毀誉褒貶に惑わされないパーフェクトな法の執行人である。愛と秩序と正義を貫く者は、法の心に従順であるがゆえにその者のところには安らぎと平安が訪れる。だが法に逆らう者は、常に苦しみと悲しみを背負わなくてはならないのである。これは誰が悪いのでもない。自らが進んで甘受した浄罪（罪を償う）の姿である。だから賢い者は決して法に逆らわない。もろもろの苦しみに喘いでいる人たちは、人の目にはかわいそうに見えるけれど、良心（魂）はその理由をちゃんと知っているのである。

自然許諾

自然はすべての生き物に、自然許諾を認めている。生きるために本当に必要ならば、相手の命を奪っても構わない、そんな許しまで与えているのである。したがって人間も、本当に生きるに必要なならば、人の物で

あっても使うことは許されるのである。ただし人間は、万物の靈長として相手を思いやり、相手を脅かさな
い節度が求められている。したがって、使うにしてもそこにおのずと限界があるだろう。しかし、その行為
が相手の命を脅かさず、対立しなければ、そして節度が守られているならば、人の物であっても使うことは
許されるのである。ところが人間は、明日に憂いを持って生きる悲しい生き物ゆえに、我が身かわいさのあ
まり手に一杯の物を持っていても他人に分け与えようとしない。そこに争いの要因があるのである。

法は実に平等である。もし欲をかかず、余っているものを困っている人に分け与えるなら“情けは人のた
めならず！”で、必ず自分も助けられるようになっているのである。自然許諾とは、そういった意味も含ま
れているのである。

生きるために消費を作る愚かさ

私たちは生きるために消費するのであって、生きるために消費を作っているのではない。今日の資本主義
経済は、生きるために消費を作っているのである。

ここに一人の大工がいたとしよう。その大工は、一年の生活費を家一軒建てることで得ていた。家の耐用

年数が20年なので、この町にある20軒の家を毎年一軒ずつ建て替えていったら、大工の仕事は一生なくならない。したがって生活も困らないだろう。ところが、もう一人の大工がこの町にやってきて店を開いたために、古株の大工の仕事が半分になってしまった。そればかりではない。競って仕事をもらわなくてはならなくなったので、値段も以前の半値になってしまった。仕事も少なくなつたし収入も減つた。大工はすっかり困つてしまい、何とか仕事を増やす方法は無いものかと考えた。

ある年の暮れ、今まで一度も起こつたことのない火事が立て続けに二件も起きた。勿論、二人の大工に仕事が転がり込んだのは言うまでもない。

さて、消費を作らなければやっていけないのが今日の資本主義経済であり、その火付け役が企業である。どこかこの話と似ていないだろうか？

どちらが賢い分け方か？

ここに五人の人がおり、五個の食べ物があったとしよう。この五個の食べ物を一個ずつ分け合うのと、奪い合うのと、どちらが賢い分け方だろうか？ 万物の霊長である人間ならば、当然前者の方と思うだろう。

では今日人類は、その賢いやり方をしているだろうか？ 今日資本主義経済は、弱肉強食まがいの後者の方ではないだろうか？ つまり我々は、万物の霊長にふさわしくない愚かな配分方法を今採用しているのである。

人の不幸を漫然と見過ごすな！

我々の周りには多くの不幸がある。その不幸を漫然と見過ごしては人に進歩はない。たとえば、お葬式で、病院で、人の不幸を見る。あるいは家庭崩壊で涙する人を見る。そのとき我々は、その不幸の陰に潜んでいるもの、その不幸が訴えているものに目を向けなければならぬのである。

なぜこの人は苦しんでいるのだろうか？ 人生とは何だろうか？ 老いとは何だろうか？ 死とは何だろうか？ 等々・・・特に、身内の不幸は強烈なインパクトを与える。それだけに自分のこととして受け止められ、人生の思索を深めるきっかけともなるのである。その意味では、不幸をただの悲しみとせず、修道の材料として厳粛に受け止めなくてはならない。他人の不幸を自省の材料にできない人は、今度は自ら不幸を招くことによって、人生に対する疑問を持たされるのである。

鉄は熱いうちに打て

鉄は熱いうちに打て！ それも打てば打つほど良い！ まだ何色にも染まっていない時期に徹底してやるのが大切である。特に、徳育はこの時期には持つてこいである。それも厳しければ厳しいほど良い。

今日学校でちょっと厳しい躰をすると、父兄はすぐに先生をつるしあげる。これでは本当の教育はできないだろう。真に子供が愛しいと思うなら、鉄と同じように厳しく打つことを認めるべきである。ただし先生のムチも、怒りで打つのではなく叱りで打ってほしい。その打ち方いかんによっては、鬼にも仏にもなろうからだ。

頭上の刃物

資本主義経済は成長なしには成り立たない。したがって、国家挙げての景気振興策が取られる。経済が成長すればそれに見合うエネルギーも必要になってくるから、電気はますます入用になる。つまり、原子力発電所の必要性が増すのである。我々は今日物質文明に酔いしれているが、その姿は、鋭い刃物の下でワイン

に酔いしれダンスを踊っているようなものである。

原發推進派の人たちは、刃物そのものは危険だが、その刃物をつりさげている紐は頑丈で決して切れないから安心である、ともっともらしい言い訳をしているが、たとえその紐が切れないにしても、我々は果たして楽しくダンスを踊っていられるだろうか？ 今や頭上にぶら下がっている刃物は、四十個以上にもなっているのである。人間のやることである。間違つて落ちてこないとも限らないだろう・・・？

国民はこれ以上の繁栄を望んでいるのか？

『あなたはこれ以上の繁栄を望んでいますか？』との問いを、一度国民にしてほしいものである。おそらく『もう必要ない！』との答えが返ってくるだろう。もしまだ望む人がいるとしたら、物質が幸せをもたらすと錯覚している人たちだけであろう。多くの人は、物質に囲まれて生活することに辟易しているはずである。といっても、我々はもう、どうすることもできない。なぜなら、一度転がり出した資本主義経済にストップをかけることは、坂道を下る特急列車に、ブレーキをかけるようなものである。もし急ブレーキをかければ、乗っている全員が大怪我をするのは目に見えている。しかしこのまま進めば、電車は断崖絶壁

から落ちて、間違はなく全員即死してしまうのである。

死ぬよりも、怪我の方がましではないか？ その勇気を持つとうではないか・・・？

寂しい人のために

世の中には、寂しい思いをしている人は意外に多いものである。たとえば、

幼い時に親と別れ別れになった。

幼い時に親を亡くした。

子供を亡くした。

恋人を亡くした。

こんな時、人は悲嘆にくれるものである。人生とは寂しいものだ、侘しいものだ・・・しかし負けてはならない、忘れてはならない、思い出してほしい、その環境を選んだのは自分自身であることを・・・ではなぜ、そのような環境を選ばなければならなかったのだろうか？

人は幸せに浸っているときには、決して人生に疑問を持たないものである。しかし、不幸に出会い悲しみ

にうち震えるとき、人生とは何だろうか？ 人間とは何だろうか？ 死とは何だろうか？ と疑問を持つようになる。あなたは人生に疑問を持つために、そのような厳しい環境を選んだのである。その環境を決して無駄にしてはならないだろう。

嘆くより無言の行動を示せ

環境が悪い！ 相手が悪い！ と嘆いてもらちがあかない。そのときは、自分の心を変えることだ。変えれば必ず相手も変わってくれ、環境も良い転換を見せるだろう。何もせずただ愚痴ばかりこぼしては、心はおろか、体まで傷めてしまうだろう。利口な者は人を当てにせず、まず自分の心を変えることから始めるものだ。自分の心を変えれば環境が変わるのは、心が（波動が）環境を呼び寄せるからだ。嘆くよりもまず心を変え、行動おこすことである。